

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

We

ウイ

新しい家庭科



国立婦人教育会館図書

和 104195

10

1989

特集 食べものから地球を見る

逐次刊行物
平成元年, 9, 21 成
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

野分



風の地図

佐藤哲生

卷頭詩

遊 び

幼い孫娘が

「遊ぶのを忘れたのがおとなだよ」といいます

おとなの言葉をどこかできいたのでしよう

そんなことはないよ わたしは遊ぶでしよ

あなたのお母さんも それから……

わかった 遊ぶのを忘れたおとなはこのくらいで

と孫娘はてのひらをふくらむ桃の形に見せ

忘れないおとなはこーんなにいっぱいだね と

腕を頭上にひろげてまるい輪をつくります

それから

わたしはまた孫娘とはてもない遊びをつづけたのです

We

ウイ 1989.10月号

【特集】 食べものから地球を見る

- インタビュー 室田 武さん (インタビューー 中野敬子) 4
—地球はどのくらいもつかという問題になってきた—
- 健康長寿への提言 ・鷹觜テル 12
- 放射能汚染食品が問う生き方と教育 ・小出裕章 16
- だれのための食品への放射線照射 ・久保田裕子 20
- 西暦2000年までに
飢餓を終わらせるために ・柁津都子 24
- 「食品安全条例」——私たちの直接請求 ・林 温子 28

【発言】

- 「美味しんぼ」からのスタート ・菱田 彰 32
- 川が生きかえった ・加藤文江 34
- まちの環境汚染 ・柳原真理子 37
- 投稿 地球を守る心を家庭科で ・村岡洋子 40

【学習の主人公たち】

いのちのもとをつくる／福島県立農業短期大学校1年生 42

●新しい家庭科を創るために

- 小学校では／一年生の性教育は日々の暮らしの中に ・光永京子 46
- 中学校では／家庭科の本質とは……
—地域の特産物を生かしたすしづくりを通して— ・木下宣子 51
- 高等学校では／「お母さん、命は地球より重いってホント？」
・田村より子 56

■連載

風の地図／野分	佐藤哲生	
巻頭詩／遊び	羽生禎子	1
家族と家庭科／女性の解放と家庭科	酒井はるみ	62
親子論と心理学／人間の解放とは一読者への手紙	小沢牧子	64
海の輝く日／多く朝の歌 その2	佐藤通雅	66
広がるネットワーク／「病気のおかげで 凄味のある音楽になりました」	平井雷太	68
あっちゃ、こっちゃ、フフフ／入籍ごっこ	田中正彦	71
筐／森のかなた	村田直文	72
幼児クラブを始めてみたら／子どもってわからない	佐多和子	73
KNOW HOW共学家庭科／高遠高校での共学 その5	湯沢静江	74
私の朝鮮史／梶村先生のこと	岡百合子	75
食べもの文化史／副食 その1	石川尚子	76
よそおい	内山裕子	77
コンピューターと暮らし／その6	碧海酉癸	78
石けんコンサート通信／チェルノブイリの春	よしだあきひろ	79
波／人が人と出会う	半田たつ子	80

●こだま 「村田論文」についての異論 82 ●ひと 湯沢静江さん 86

- イキイキぐるうぶ 61 ○Weの会通信 83 ○わたくしからあなたに 84
- Weになんでも言おう なんでも聞こう 87 ○Weの読者会だより 88
- 私のすすめる1冊 89 ○今月の読書から 90 ○泉 91 ○十字路 92
- アンテナ 94 ○編集室からあなたに 82・87 ○WE EDITORS NOTE 96



Interview ● 室田 武さん

地球はどのくらいもつかという 問題になってきた

自然保護を訴える七十数か国の子どもたちの声を収めた本がある。『美しい地球をよごさないで』（偕成社）という。これは子どもたちが書いた大人向けの本である。さまざまな国の、さまざまな子どもたちが、戦争、工業化、自然破壊、公害など環境問題に心を痛めている。そして、しあわせとはどういうことなのかと考えている。私たちの課題は、次の世代に、次の次の……の世代にどんな地球を残せるか、そして、今、何ができるかということでしょう。

夏休み直前、国立市の一橋大学に室田武氏をお訪ねした。氏は原発の立場から、エネルギー問題に取り組み、水力や雑木林の重要性を訴えていらつしやる。

広大なキャンパスは、武蔵野の面影を有し、学生の声が若々しく頼もしく聞こえた。



インタビュー

中野敬子

一九四三年、群馬県生まれ。イリノイ大学講師、国学院大学講師などを経て、現在一橋大学経済学部教授。専攻は理論経済学。木炭復興を目指す「炭焼きの会」顧問、エントロピー学会会員、日本有機農業研究会会員。
〈著書〉『エネルギーとエントロピーの経済学』（東洋経済新報社）『原子力の経済学』（日本評論社）『水土の経済学』（紀伊國屋書店）『水車の四季』（日本評論社）『雑木林の経済学』（樹心社）『天動説の経済学』（ダイヤモンド社）など多数。

学生が有機農業を

——添加物、残留農薬、チェルノブイリ以後は放射能汚染も心配ですし、安心しておいしく食べたいというのはみんなの当然の要求だと思つてのですが、不信感を持ちながらしか食べられない現状と、環境破壊につながっている農業のあり方を残念だと思つてのですが。

室田 身近な所で農地を捜して、自分の納得のいくやり方でそこを耕す、自分で耕す時間のない人は、農家と提携して農薬を使わないで作つてくれるなら、あるいは農薬の回数をできるだけ少なくして作つてくれるなら、作物の全量を引き受けましょうという、いわゆる共同購入の形は日本全国で行われていますね。

——水車むらはそういう営みの一つですか。

室田 水車むらは直接食べものを作っているんじゃないんです。静岡県の藤枝市で、ここはお茶の産地ですから、水とお茶を見直してみようと、自家発電の実験とか、紅茶を作る機械を水車で動かしてみるとか、いろいろやってきたグループです。お茶はとにかく農薬をたくさん使いますが、地元の農家の方々が無農薬、無化学肥料の、いわゆる有機農法でやつてゐるんです。

——それは、エネルギーの分権というところからも考えてい

らつしやるのですか。

室田 そうですね。原子力発電所とか、大きなダムに依存している水力発電所とか、火力発電所とかで集中的にエネルギーを生産して、遠い消費地まで野を越え、山を越え高圧線で運ぶようなやり方でないやり方があるだろうと考えて、その一つとして水が流れている所で水車をと着想したわけです。

——水車一台のエネルギーってどのくらいですか。

室田 数キロワットくらいでしょうね。キロワットというのは動力の単位で、馬力といたら分かりやすいでしょうね。一馬力は〇・七五キロワットですから、数馬力と云つていいですね。ところで、東京都西多摩郡の羽村町で前から水車を回したいと考えていて、実際に回した人がいるんです。今、そのお宅にゼミの学生が一人下宿して、米作りに関わつていゝるんです。その近くにゼミで四アールの水田を借りて、初めから終わりまで米づくりをやっているんです。昨年からは、

——きっかけは？

室田 新聞で羽村に水車ができたというニュースを見たんです。東京都内でも水車を復活させた人がいるんだなと思つて、それをゼミで話して見に行つたんです。その人は中野さんといって、本業は木工業なんです。自給用に田んぼと畑を耕しているんです。米も、麦も、野菜も基本的に自給用の農業をやつて、一つのパターンとして理想的な生活をしてい

るんです。そこに学生が何度か通っていて、農業に興味のある学生が何人か、いろいろ話しているうちに、じゃ自分たちが田んぼづくりをやってみようかということになったんです。そして、数年間とぎれていたんですけれども、また昨年からやり始めて。でも、水田は朝水を入れて、夕方落とすという水の管理が大事なんですけれど、それは、現場近くに住んでいないと難しいわけで、じゃ、思いきって自分がそこに引っ越しちゃえということになったんです。他の学生の力がないとできない作業はみんなに来てもらってやっていますね。

——農業の一つ一つの作業は苦しいですよ。

室田 ええ、でもどうしようもない時だけ機械を借りて、なるべく機械は使わないで、力仕事だけでやっています。

——草取りは大変でしょうね。

室田 ところが草があまり出ないんですよ。無農薬ですから草取りが大変だろうと覚悟して取り組んだのに、出ないんですよ。水温の低いところで、雑草があまり生えないんですよです。それでいて周りと同じくらいの収量で。いずれにしても、田起こしとか、代かきとか、ものすごい力りますね。若い人にとっては農作業で汗流すのもいいんじゃないですか、力余っていて、普通テニスとかで汗流していますから。

——人間の汗の流し方も変わってきましたね。

室田 それは石油文明の力ですね。人間の力ぐらひは全部代

行できるから。

人間が危ない、地球が危ない

——人間がそれを明け渡したことによるマイナスは？

室田 成人病が増えている。生物としての本能みたいなものを失わないためには、やっぱり汗かかなくや。

農村ではすぐ近くに行くにもトラクターに乗る習慣ができちゃった。成人の体力比較がどこかの新聞に載っていました。が、働きざかりの人では、農家の人が一番低いんです。今農業をやっても体力がつかないんです。都市の公務員の方が、電車や地下鉄に乗ったり、降りたりたびに、駅の階段を上ったり、下りたりで、実はこちらの方が体力があるという調査結果です。

それに加えて、食べるものもおかしくなりました。添加物が入っているし、肉食偏重だし。添加物はどんな民族にとっても毒物ですけど、日本人はもともと雑穀だとか、米が中心で草食に近いから腸が長いんで、またその長い腸が雑穀や米を消化するのに都合がいいのに、急に肉食になったんでは、何らかのトラブルが起こるのは当然です。

長寿村で有名になった山梨県の棚原の山村でも、雑穀を中心とした食事が徐々にくずれ始めている。

じゃ、肉食偏重になってきたその肉はどうして作っている

のかと言うと、大量の輸入穀物で成り立っている。これがなかったら、こんなに肉食なんてできない。肉一キログラムをつくるのに飼料穀物が一〇キログラム程度必要なんですから。

また、大量の穀物を売りたいという人がアメリカにいるわけです。これがアグリビジネスで、要するに輸出向けの穀物をたくさん作ってくれば自分たちがそれを輸出してあげますよ、というビジネスが成立していて、それに合わせてアメリカの農業は、水にあまり恵まれない条件の所でさえ、地下水を汲み上げて、普通なら耕地にならない所を耕地にしている。そうすると地下水が枯渇しちやう。そうすればそれで終わりです。そして、そういう所がアメリカに広がる。これはアメリカの農地にとってもあまり健全じゃない。

——地球へのダメージという点では、温暖化もありますね。

室田 地球温暖化の一番大きな原因は、石油、石炭をたくさん燃やしすぎて、炭酸ガスが貯まってくる。そうすると、地上から宇宙空間に逃げるはずの熱が逃げられなくて、貯まってしまう。温室効果といますが、それに加えて、フロンガスも熱を逃さない。温室効果は高まります。

——エントロピーっていうのはそれと関連がありますか。

室田 そうですね。エントロピーっていうのは生きている以上は出てくるものなんです。エントロピーが出なかつたらもうそれは生物ではない。生物っていうのはエントロピーを増

やすことによって生きていて、ただ同時に増えたエントロピーを体外に捨てて生きています。汗かいたり、呼吸したり、排泄作用をしたりして生きています。それができなくなつたら死ぬんです。

——それは生物に限って言うわけではないのですか。

室田 生物でなくても、地球についてもそうです。

——じゃ、地球の熱の蓄積も、よりゆっくりであれば長持ちにはするのですか。

室田 ええ、長持ちはしてもいつかは死んじやう。大気圏内の水循環を通じて廃熱を宇宙空間に放出する仕組みがうまく機能しなければね。従来だと、炭酸ガスとかフロンガスが大量になかつたから、生物っていうのは生きながらえるって程度じゃなく、永久にはいえないまでも、半永久的に存在できるだろうという見通しを立てることができたわけですけど、今それは危ういというか、半永久なんてものじゃなくて、何年長持ちできるかっていうような問題になってきちゃったんですね。

——そうすると、地球の危なさと、人間そのものの危なさとあるんですか。

室田 そうですね。

木炭を見直す

——八王子市の浅川地区のお話をご本にありましたけど。

室田 私が直接関わっているわけではないのですが、浅川によごれがひどくて、合成洗剤追放っていうことで始めたんですけど、それでも使い続ける人はいるんで、もう一つきれいにならない。その時に八王子在住の杉浦銀治先生が木炭を使えばいいと言って、グループで焼いて川に入れたんです。

——木炭にそういう力があるんですか。

室田 ええ、よごれはどんどん吸収してくれる。よく言われることですが、木炭を冷蔵庫の中に入れておきますと、冷蔵庫特有のムツとした臭いが消えちゃうんですよ、臭いを消したり、汚物を吸着したり、そういう性質があるんです。僕自身は「炭焼きの会」というのに所属しています。その中心的な活動をしているのが、先に出た杉浦先生と岸本定吉先生で、お二人は木炭の研究については世界のトップクラスの先生です。この会は全国的な組織で、炭を焼くのはもちろん、たくさんの人々が木炭を見なおしてくれるようにとか、木炭のもとになる木も育てようとかしているんです。

ゼミの学生も焼くんですが、夏は暑くてちよっとね、だけど冬は必ず何回か焼くんです。

——山の中に入ってますか。

室田 山の中に入る場合もありますし、年によってはキャンパスの中で焼くこともあります。

——木炭に適した木というのはあるのですか。

室田 用途によつてですね。うなぎの蒲焼の場合は紀州備長炭といつて、ウバメガシという硬い樫の一種で、備長がまといつかまで焼くんです。ウバメガシ以外のものは紀州備長炭じゃない。これが蒲焼きには一番いい。炭の出す熱は遠赤外線と言つて波長の長い熱線で、中までよく熱が通るわけです。だから炭で焼いたうなぎの方がおいしいんです。灰をかければ火力は弱くなる、のければ強くなる、火力の調節が簡単にできるし、さらにこの炭は長時間持ちます。

刀鍛冶の鍛冶屋さんが使うのは赤松で作った炭、それはすごく火力が強いから金属を扱うのにいい。それから茶の湯で使う炭はクヌギの黒炭、いい茶の湯炭というのは、しまりがあって、重く、火箸でたたくと澄んだ音がするというものです。だから何をやるかによつて決まってくるのです。紀州備長炭などは、かまも特殊なものですし、すごい経験がいるわけです。誰にでもできるといふものではない、お手伝い程度のことならできますけど。学生が焼くのは雑炭で、用途としてはパーベキューぐらいできればいいと。冷蔵庫の脱臭くらいならどんな炭でもいいですしね。それから花をかけた時に花びらの中に炭を入れておくと、持ちがいい。水が腐りにくい。だから炭は目的によつて使い分けが必要ですね。

——そんなこと知らなかったですね。炭の生活っていうのが

大体なくなっちゃった。

室田 これも石油文明以降なくなつた。

——もつたないですね。

室田 放っておいたら、知る人がなくなつちやうつていうんで、五、六年前、「炭焼きの会」ができたんです。

石油文明以降

——人類の歴史の中で、石油つていうのは、見えにくい部分でも大きな力があつたんですね。

室田 エネルギの面で見ると、国産の石炭と輸入の石油の割合が逆転したのが一九六〇年（昭和三十五年）、これを石油文明元年というんですが、石油文明成立以降、いろんな大事なことほとんど消えていくんです。

農業の面で見ると、石油化学の産物である農薬とか化学肥料の使用が増える、安い原油がどんどん入つて、石油コンビナートができて、石油化学産業が成立して、農薬も化学肥料も安くできるようになると、夏になつても螢がでない、秋になつても赤トンボが飛ばない、それ以前だったら、春先に、農村に行つたらモンシロチョウが、ワンワンいたんですよ。

それから、木炭にも関係しますけれど、木炭とか薪を確保するためには、雑木林が必要ですけど、木炭とか薪を使わない生活になつてくると、雑木林も不必要になつてしまいま

す。雑木林は概して、広葉樹、秋になると落葉するものが多いいんです。落葉する、そして実をたくさん落とすという性質を持つているんです。ところが、広葉樹が不必要だということとは、秋になつても紅葉しない、冬でも青々としていて。緑はいいことだと思ふかも知れないけど、冬でも全体が緑つていふのは不健全な世界です。日本の四季は春の若葉、秋の紅葉がメインなんです。これは広葉樹があるからなんです。だから、広葉樹と針葉樹があるバランスをとつて並存しているのが健全なんです。炭焼きが衰退すると同時に広葉樹が伐採され、実を落とす木が少なくなつた。実は野生動物のエサだつたんです。野生動物はしかたがないから里に下りてきて農作物を荒らす。野鳥の生息も難しくなる。

——木炭の使用は世界的に見るとどうなんでしょうか。

室田 人間の住む所どこにもありますが、日本は森林国ですからよく使つていたんです。今は世界でもっとも使われない国になつちやつた。日本では薪の生活は古くさいという感じがありますけど、アメリカとかヨーロッパでは、薪が使える生活はいい生活だ、薪の炎を見ながら暮らすのが贅沢な生活だとなつています。そのために、むやみに熱を逃がさない暖炉の設計や、薪ストーブの改良が研究されています。

——アメリカに住んでいらつちやつたんですか、そこから見ると日本はどんなふうにご覧になれますか。

室田 極端から、極端に走りやすい、いいところも悪いところも。

農政について

——農政の失敗点は？

室田 石油文明元年が一九六〇年ですけど、その翌年に、農業基本法ができるんです。で、農業基本法に基づく農政ですから略して、農基法農政っていいんですが、これは大規模化を奨めて機械化を進める引き金になった。その土地の条件に必ずしも合わなくても、機械が使いやすいように区画整理とか、耕地整理をやった、これが農業構造改善事業です。主産地形成という考え方ができて、例えば、群馬県の嬭恋村はキヤベツだけ、三浦半島では大根だけというように、複合的な自給農業を否定して、農作物というのをすべて商品として、農業も工業と同じようにお金につながるような形にしようとした。農業っていうのはお金につながる部分もあるけれど、本来は人間が生きるために自給するものです。農基法農政はある意味でその自給農業を否定したんです。

——それが今、しわよせになつてきているんですね。

室田 そう。農家の人たちも機械は買う、肥料もたくさん使うから借金する、その借金のめんどろは農協がみてくれる。農協は農家がどんな作物を作るかよりも、金融機関としての

関わりの方が大きくなつちやうた。小さなトラクターを使っていると、もつと大きなトラクターに買い替えたらと言う。お金がないと言うと、じゃ貸してあげますと言う。

また農協では防除暦を作つて、何月何日にはこんな農薬を撒きましょう、その二週間後にはこれこれと書いたカレンダーを全農家に配ります。農家の人たちも主体性をなくして、この気候だったらこの農薬は不要だと判断する力がなくなつて、農協がいうとおりの農業をやる。

水田があつたから工業がここまでできた

——米はどうなのでしよう。

室田 米はアンケートなんかみると、自由化すべきじゃないという意見が強いですね、やはりみんな危機感持っているんですね。自民党は今まで農民の票をあてにしてきたんですけど米の自由化までやろうと言ひ出したから、農家の人の反発も強いですよ。農政の側としては、国民はきつと安い物を輸入すればいいと言うだろうと思つたんだけど、必ずしも米の自由化を望んでいるわけではない。少しぐらい高くてたつて国産の米を食べたいんだと言っている。

——味だけでなく、農業を守るためにという意味も込めて言っているのですか。

室田 そうです。

——「日本の中に「ゆるやかな鎖国」という言葉があつて、その外側に少しの流通経路があればいいと書かれていますね。

室田 そうしないと、日本の生態系がとかく崩れちゃうからです。米を国内で作らなくていいってことになったら、水田がまず潰れますね。もうすでに減反政策によって大分潰されてますけど、日本の場合、山に森林があつて、山間や平野に水田があつて保水してきてるんですよ。水田がものすごい大量の水を貯めてるんです。海にすぐ流れないように。水田に貯まった水が一部は地下に染み透つて、地下水に關与している。水を保つということでは、コンクリートで造つたダムなんかよりはるかに大きな力を水田は果たしているんです。日本経済がなんでこんなに発展したかつて言うと、石油文明のもとでの工業の拡大ですが、工業の拡大はなんでできたかつていうと、日本が水田農業国だったからです。工業は冷却水と洗淨水の二つを大量に必要とします。これがないと工業は成り立たないわけですけど、地表面には農業の灌漑用水の技術があり、地下水は水田中心にある。この二つがあつて水に恵まれていたから工業生産が一挙に伸ばせたんです。中近東諸国では、石油はいくらでもあるんですけど、それを売ることで莫大なドルも持っているわけですよ。だけど水がないから工業をやるうとして制約を受けるんです。

工業中心にやっている人はそのことを忘れてしまつてい

る。何のお陰でこれまで大きくなれたのかつて、本当のところを忘れて、水田なんかやめて宅地にでもしたらどうかつて、そして工業やればいいなんて、恵まれていた水の条件をどんどん悪い方向にするという意味では自殺行為です。

——「チェルノブイリは、危機感を共有するという意味では大きなきっかけになりましたが、世界的に見てもそうですか。

室田 日本以上にヨーロッパの汚染レベルは高いですから、イタリアは原発をやめることにしちゃった、スウェーデンもオランダも、そういう国が増えていきます。日本ではまだ危機感の持ち方が少ない方です。原子力発電なんていうのは基本的に放射能を産み出すだけなんですけど、科学技術を信じ過ぎて、それに原子力平和利用なんて名前をつけて、経済を豊かにするという幻想の方が大きく膨らんじやつたんですね。でもチェルノブイリがあつて、そうじやないんじやないかと思ふ人が増えてきているのは間違いないですね。

エコサイクル（生態系循環）が以前は地上のもので完結していたのが、石油という地下資源が入り込むことによつて完結しないで毒物が地上に残っちゃうようになってしまつたんですね、ウランもそうですけど。為政者もおかしかつたけど、それを許してきた側もおかしかつた。

——「しっかりしなきゃいけないですね。希望はありますか。

室田 希望は持つしかないですね。

特集 食へものから地球を見る

健康長寿への提言

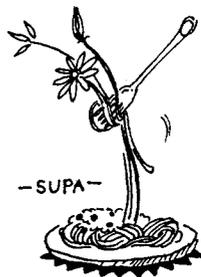
■ 足で求めた健康長寿への道35年

私は岩手の僻村に生れた。村の人たちが町の病院に行くということは、当時は死亡診断書をもって帰ってくるということであった。即ち死ぬ直前でないと医者にかかれぬこと。そうした貧しい村人を見て、なんとかして医者になって、無料で病める人たちを診断してあげたい……そうした夢をいつも心の中にあたためていた。

その後昭和十八年に東北大医学部の長寿研究者近藤正二博士の無料健康法という講演をきく機会を得た。人間が日に三度の食事を健康的にすれば、お金をかけなくても健康長寿が保てるという内容であった。そこで私は医者になれなくともこの道を選べば、私の夢を果たせる……と心の中に叫んだ。

その研究をすすめる方法をいろいろ考えたが、開学当時は研究の予算もなく、研究方法としては歩いて調査研究する他

鷹 髻 テ ル



なかつた。とにかく休みを利用して歩いて歩いて……一日五時間歩いたのが最高で、その後自転車、バイク、ジープと、私の三十五年の研究歴は戦後の交通史でもあった。

最初は県内の長寿村と短命村の食事と健康調査とその比較、その後全国の長寿村と範囲を広げ、世界の長寿国は文献を通してまとめ、国際的にも比較検討した。

以上のような理由で、疫学的調査を中心に研究をすすめたわけであるが、村の人たち一人ひとりの生の声をきくことができ、時間はかかったけれども、食物のとり方は勿論、この調査を通して、生活の中でどんなことが問題になっているのか、さらに永年培われた伝承文化や、人間の生活の知恵や、自然の中に生きている生活哲学にもふれることができた。

次にこうした研究を通して感じたことを中心に、二十一世紀にむけての食生活のあり方について提言をしたい。

■生活構造をふまえた総合的研究の必要

まず最初に人間の栄養学は、生活構造を無視しては、実践不可能だということを強調したい。高血圧地帯の食物と健康についての疫学調査を行った際、食塩一日35gも摂取している人たちに、その理由をきいてみると、「高食塩食事が体に悪いことは分つていても、うす味にすると、食べる量が多くなるので農家の経済がゆるさない」、あるいは「労働するとどうしても汗をかくので塩分を要求する」、または「うす味にすると、すぐ腐敗する」等々訴えが次々と出される。私はこうした農民の切実な声をききながら、栄養科学的な味だけでなく、経済の味、労働の味、保存の味等の生活の味も考慮すべきだと痛感した。

栄養科学的なサイドからだけの結論なら「塩分所要量10g以上は健康によくない」と言い切れるのであるが、人間を対象にした栄養学は、食する人間と、人間をとりまく生活構造を重視しながら、実践可能な結論を出す必要があると考え、次の研究に発展させた。

食塩摂取量と高血圧出現率の関係について調査したところ雑穀地帯は、白米食地帯に比較して、高食塩食事で高血圧出現率が低いことが判明した。その事実を裏証するために、動物実験を試みた。高食塩食事の区は、確かに血圧が高くなるが、それに雑穀の中に多含しているビタミンB類を組み合

せて与えると、血圧は正常になることがわかった。その理由は、ビタミンB類が過剰塩分を、尿中に排泄して、塩分の害を和らげるためである。高血圧出現率の低い雑穀地帯は、このビタミンB類を毎日の食事（雑穀や豆類）から摂取していたのである。

このように人間の塩分の至適量の指導は人間の場合、生活構造が多種多様なので、画一的に所要量一本だけで結論づけないで生活構造上どうしても多くとらざるを得ない場合は、過剰塩分の排泄に効果のある食品を組み合わせることを強調し、実践に効果をあげた具体例である。

■栄養学に風土性と民族性を

日本は温暖な海洋性気候と土地に恵まれて農耕民族としての日本人を育ててきた。それは穀菜魚介類の食習慣であった。こうした風土によって養われてきた民族的食生活の伝統が、輸入食糧の増大、食品工業の隆盛によって大きく変化しようとしている今日、民族性、風土性の立場からもう一度再検討すべき時にきているのではないだろうか。どんなに流通機構が発達して、食品がどんどん輸入されても、風土までは輸入できないということ、常に考えなければならぬと思う。

その意味から、人間栄養学として総合的に捉える場合、われわれの祖先が、その地域地域で何を食べてきたか……。そうした地域の伝統食に目を向けてみたいと思う。現在までの

栄養学は、分析科学的立場を重視するあまり、こうした視点から捉えるという面が、うすかったように思われる。

伝統食には本来何世代もかけて、人間生活に定着させてきたものがあるだけに、生活の願いがこめられた文化が脈打っており、それぞれの地域で日本民族が生きてきた知恵が、蓄積されていることがよくわかる。そのいくつかを述べてみよう。

1 身土不二の食生活の知恵：人間生きていくところに、ふるさとがあり、ふるさとはその土地土地に生産される、季節毎の産物を活用した伝統食がある。

岩手県の場合、交通の便も悪く、閉鎖社会であったから、他から購入する食品は全くなく、自ら生産食品に依存する他なかつたと思う。したがって畑作地帯には、雑穀や豆食文化が発達し、米作地帯には米食を中心とする餅食文化、漁村地帯には魚貝食文化、豪雪地帯には保存食が発達した。

2 食品配合の知恵：その伝統食の中に、食品配合の知恵を知ることができる。昔の人は長い間経験的に、体を通して、その土地の生産食品を有効に組み合わせ利用していることにおどろく。ここで私は、人間の食物として考える場合単なる個々の食品のもつ栄養価ではなく、住民が食べている食品をセットとして捉える知恵の重要性を知ったのである。

3 生命をまもり抜いた食物の知恵：次に伝統食には、私

たちの祖先が、人体試験を試みながら、食べてきた生命の糧としての健康食が各地にいっぱい残されている。それらを掘りおこし、次の世代に伝えたいと思う。

4 一物全体食の知恵：ある長寿村に「大根を食べたら葉をすてるな」という言葉が残されている。これは経験的に緑葉野菜の栄養学的効果を伝えたものと思う。また正月用魚を最初は切身にして食べ、最後に残りの骨を料理して食べる骨正月という行事が残っている地域がある。ここでは魚を骨ごと食べる一物全体食の効果を教えていると思う。

5 その他：積雪寒冷の風土と貧しさの中で、いかにして家族に温かいものを、腹いっぱい食べさせようかという、母の家族を愛しむ心が脈々と伝ってくるものがたくさんある。こうしたことから、これからの食生活は単に栄養学的なサイドだけでなく、その風土に適應して発達した地域の伝統食にも目をむけ、民族学的な立場からも考慮すべきではないだろう。

■長寿村の教訓とその実践

次に永年調査を行ってきた長寿村の食生活の教訓を述べて、これからの健康長寿への指針の参考にしたと思う。

1 多穀・玄穀食の再確認：長寿村桐原の食生活を一言で表現すれば、麦を中心とした五穀の活用であり、ここに健康と長寿への大きな道が開かれていると思う。桐原は、昔から

の五穀・玄穀食から単一の白米食になってから、短命化の問題がおきてきたことから、大いに反省すべきである。今後穀類の食べ方を大いに研究する必要があると思う。

2 いも食文化の維持存続：「いもを食する民族は栄える」と言われているが、長寿の地域が高冷地に多いのは、雑穀やいも類がよく出来る風土であることも関係していると思う。世界の長寿国コーカサス地方やフンザの国々の食事も、雑穀といも多い。

3 蛋白質のとり方が年齢に応じて適当であった：乳児期はすべて母乳からとり、成長するにつれて、自然飼育の鶏卵や川魚に依存した。さらに加齢と共に植物性の蛋白質を多食する豆類をとった。したがってコレステロールの問題もなかった。今後年齢に相応した蛋白質のとり方を大いに研究する必要がある。

4 緑葉野菜、冬菜の効用：桐原特産の冬菜は秋から冬にかけて食べられ、カロチン、ビタミンA・C・Eの良き給源となった。抗ガン食品としても緑葉野菜が見直されてきていることは周知のとおりである。

5 胚芽食品の高度利用：胚芽にはビタミンEが多含し、老化予防に役立っている。長寿村桐原の特徴的食品として、フスマを活用したフスマみそやフスマ麴がある。これも先人の知恵の一つと言えよう。

6 醱酵食品の効用：桐原特産の酒まんじゅうは、フスマ麴を原料として甘酒を作り、それを原料として、各家庭で作る醱酵食品の代表である。これらは健康長寿を保つための有用な腸内細菌の繁殖に役立つのである。世界の長寿国では醱酵乳、ヨーグルト、チーズの形態で摂取している。桐原の醱酵食品（酒まんじゅう、納豆、みそ、甘酒）と対照して考えると面白い。

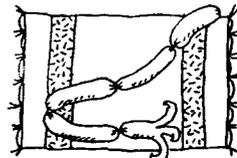
以上スペースの関係上代表的な問題を申しあげてきたが、多穀・玄穀・いも類・豆類中心に緑葉野菜や醱酵食品を組み合わせ、蛋白質も年齢に応じて適当にとった頃から、一変して白米中心に加工食品を組み合わせた現代食をとるようになってきた。そして成人病が多発し、短命化が憂慮されている。こうした桐原の食卓の変化は、戦後のすべての地域の変化であり、桐原が抱えている問題は、この地域だけの問題ではないように思われる。わが国の現在の食生活に対する警鐘として大いに検討すべきである。

こうした教訓をいかして、今後高齢化社会に向って、長寿への道を歩もうとすれば、何をすて、何を選ぶか大いに検討する時にきていると思う。一方これからの食品工業が国民の健康本位に行われ、栄養学が民族の伝統と風土性に開眼されるならば、日本人の将来の健康長寿を保証することができよう。（たかのはし てる・岩手大学名誉教授）

特集 食へものから地球を見る

放射能汚染食品が問う生き方と教育

小出 裕 章



- TAKO -

1 教育現場での一つの出来事

去る六月二十九日の朝日新聞大阪版に、次のような見出しの記事が掲載されました。

【中学教師が手書き教材、「強者に従うのが弱者の知恵】

後日、私はその教材を入手してみました。「恐怖の対人関係をどうさばくか」と題された教材は、次のように教えています。

「社会常識の基本——目上の者と目下の者」

「上位の者——下位の者に服従を要求する。場合によっては強制する。服従した者を保護する。（しない者はみすてる。）

——弱者は強者の保護下にいないと生きられない」

「下位の者——上位の者に従う。服従し、敵意のないことを示す。そして保護してもらう。（時には保護してもらうため

に愛敬をふりまく……）」

「社会（集団）には上下（強弱）関係がある。——これがよい集団」

④「逆——『人はみな平等、みんななかよく』が、とかく、

烏合の衆となる。烏合の衆⇨無政府状態——国内が混乱して政府の力が弱まり、取りしまりのできない状態」

この教材を読みながら、私は恐ろしさ、情けなさを感じながら、余りに単純な発想と視野の狭さに、思わず笑ってしまいました（本当は笑っていられることではありませんが）。

2 原子力が問うものは差別社会の認否

ソ連の原発事故からすでに三年たちました。この間、多くの人々が原発発、脱原発に立ち上がって下さいました。でも、なぜ原発発、脱原発なのでしょうか。

反原発、脱原発の人々のいちばん大きな根拠は原発が危険であるという点にあり、最近でも推進派との主要な論争点はその点にあるように思います。しかし、原発が危険なことなど、議論の必要がまったくないと私は思っています。原発は都会に建てられません。それは原発が危険であることを、原発を推進している人たちが十分に知っているからです。

原発がひとたび大事故を起こした場合の被害は、ソ連原発の事故をみるまでもなくまさに破局的です。資本主義国においては、少なくとも建前では、企業が及ぼした被害は、その企業が賠償することになっています。しかし、原発で大事故が起こった場合の被害を、電力会社という一民間企業が賠償することなど、まったくできない相談です。そこで日本の電力会社が原子力に手を染める前、一九六一年に異例の法律が作られました。その法律は「原子力損害賠償法」といい、大事故に備えて電力会社は五〇億円（今年の三月に三〇〇億円に改訂）だけ保険契約で用意しておけば、あとは国が面倒をみてやると書かれています。こうしてはじめて、電力会社も事故時の賠償の心配をせずに、原子力に足を踏み込むことができたのです。逆に言うならば、電力会社も政府も、大事故が発生するかもしれないこと、またその場合には巨大な被害が出るということを十分に知っていたからこそ、この法律がなんとしても必要だったのです。

日本の原発にしても、明日の大事故と隣り合わせで今動いているのであり、多くの人たちが原発の大事故を心配することには当然根拠があります。しかし、私が原発に反対する理由は、明日起こるかも知れない事故が怖いからではありません。

日本にはウランはありません。日本の原発で使っているウランは、人種差別で有名な南アフリカの手によってナミビアから武力を盾に盗んできたもの、あるいはオーストラリアや米国の先住民の手から白人の手によって奪いとられてきたものです。また、原発は過疎地と呼ばれる地域の犠牲や、下請け、孫請け労働者の日常的な犠牲なくしては成り立ちません。おまけに、原発が生み出した膨大な放射能は、今は意志の表明すらできない子孫にツケとして残して行く以外に方策がありません。

原発が弱い立場の人たちを踏みつけにしている例は、この他にも枚挙にいとまがありません。そして現在、好むと好まざるとに関わらず、私は日本というこの国に住み、多かれ少なかれ原発の電気を使いながら生活しています。私が原発に反対するのは、明日ではなく今、私自身が弱い立場の人たちを踏みつけにしているからです。

3 放射能汚染食糧が問う私たちの生き方

ソ連原発の事故は、残念ながら、すでに過去形として起つてしまいました。その事故で放出された放射能は、広島原発がまき散らした放射能に比べれば、一五〇〇発分にも相当し、すでに世界中の食糧が放射能で汚されてしまいました。私たちが時間を元に戻すことができない以上、もはや誰かがその汚染食糧を食べる以外ありません。

日本という国は、ウランを含めエネルギー資源を輸入に頼っているように、食糧もまた輸入に頼っています。食糧の自給率はカロリー換算では五割しかなく、私たちが日々食べている食糧は、半分が輸入品です。ミソも醤油も豆腐もパンも材料はみな輸入です。当然のことながら、ソ連原発事故で強く汚されたソ連やヨーロッパからもたくさんの食糧が輸入されていきます。その現実を前に、日本の国は、輸入時に検査をし、強い汚染食糧は輸入を許可しないから、日本人の食卓は安全だと主張しています。ところがその検査たるやまことにずさんなもので、危険な汚染食糧が毎日私たちの食卓に上ってきているのが現状です。

— そうした国のデータメな対応を前にして、反原発や脱原発の運動を担ってきた大部分の人たちは、日本の国に対して、検査を強化して日本国内に汚染食糧を入れないように求めました。もちろん私も放射能で汚れた食べ物など食べたくありませんし、「嫌なもの嫌だ」といえなければ原発を拒否す

ることなどできないと、彼らは言います。しかし、私が食べなかった食べ物、日本が拒否した食べ物はいったいどうなるのでしょうか。もちろん、拒否したからといって放射能がなくなってくれるわけではありません。汚染食糧は他の誰かが食べさせられることになるだけです。それが原子力の恩恵などまったく受けてこなかった人々、貧しく食糧に事欠いている人々であることを私は疑えません。

日本は現在三十八基の原発を持ち、今後も原発利用を拡大して行くと言っている世界で数少ない国です。そうであるならば、日本のような国こそが原発利用から発生した汚染も引き受けるべきだと私は思います。反原発、脱原発の運動は、自らが踏みつけにされることを拒否する運動です。その運動は、自らが他の人たちを踏みつけにすることを同時に拒否する運動である時に、はじめて目標に到達する展望を持つのだと私は思います。自分が踏まれることを拒否するために、自分よりも弱い立場にいる人たちを踏みつけにするようなことをすれば、運動は真の目標自身を見失うことになりません。また、多様に存在する運動や課題の連帯すらが失われてしまい、結局は求めていた目標自身を得られないことになってしまいます。

敢えて言うならば、原発の恩恵を受けてきた日本あるいは日本人が放射能汚染で滅んだとしても、それは当然の報いだ

と私は思います。いま日本の反原発や脱原発の運動が問題にしなければならぬことは、汚染にまつた責任がなく、また弱い立場にいる人たちを踏みつけにすることを、自らが行うとした運動が前提にしていたことです。

現在日本の国は、輸入食糧の汚染検査値を隠しています。汚染の高いものは国内にいれなかったから安全、汚染の低いものはもともと安全（放射能に安全量などないことは周知のことなのに……）だから数値を公表する必要はない、というのがその理由です。実は、数値を隠すことで国がやろうとしていることは、一刻も早くソ連原発事故を忘れさせようということです。そのような時に、反原発、脱原発の運動がやるべきことは、汚染食糧の輸入拒否を求めるのではなく、汚染の実態の公表を求めることです。原発を許し、事実として恩恵に浴してきた日本人として、傷だらけの現実と向き合い世界および日本国内で、いわれなき犠牲を少しでも避けることこそ私たちに求められていることだと、私は思います。

4 現実の厳しい差別と教育

現在の世界は、想像を絶する差別によって、はじめて成り立っている世界です。そして私たちが住んでいる日本という国は、「強者」に属し、差別をする側の国に属しています。冒頭で引用した中学校の教材は、日本は上位の者（強者）

として下位の者（弱者）に服従を要求し、犠牲を強制することが当然だ、それが社会の現実だと教えます。「弱者」は「強者」に愛敬をふりまいて、時には放射能汚染も受け入れろと教えます。

広辞苑で「教育」を引くと、「社会の持つ基本的な機能の一。人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」（傍線、筆者）とありました。なるほど、冒頭の教材を作った教師は、日本という、差別をする側の国の「意図」を完璧に体现しています。

実は、この世界には絶対的な「強者」も絶対的な「弱者」もいません。程度の差こそあれ、一つの存在はある面では、「強者」の側に属し、ある面では「弱者」の側に属します。また、私たちはどんなに頑張っても弱い立場の人たち、生き物の犠牲の上にか生きられません。完全な「平等」などがあるわけでもありません。しかし、大切なことは、あらゆることを固定的に捉えるのではなく、時間の流れの中で捉えることです。そして、差別の場合には、それを一步一步相対的に埋めて行くことこそが、実は「平等」の内実なのです。現実の差別の厳しさに恐れおののいて、差別の固定化と保身を教えるよりは、一步一步「平等」に向かう努力を教えるような「教育」こそ、私はしたいと思います。

（こいで ひろあき・京都大学原子炉実験所）

特集 食べものから地球を見る

だれのための食品への放射線照射

久保田 裕子

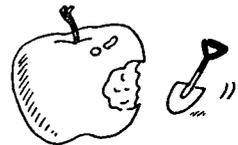
二つの顔

コバルト六〇やセシウム一三七などの放射性物質からは、ガンマ線などの電離放射線が出ている。これはひじょうに強いエネルギーをもった放射線で、その放射線を食品にあてると粒子や波動として中まで透過していき、それによって例えばジャガイモならジャガイモの中にある発芽細胞が破壊される。そのためジャガイモは発芽しなくなってしまう。玉ネギにあてれば、それも芽が出なくなる。

また、穀物中のコクゾウムシや果物の中に産みつけられたミバエの卵やサナギなどの殺虫もできるし、その他食品中の寄生虫の殺虫や、食品に付着したバイ菌（微生物）の殺菌をすることもできる。

このように電離放射線（ガンマ線、アルファ線、電子線、X線など）には生物の細胞を傷つけたり殺したりする力があ

り、そうした放射線のもつ殺傷力を主に食品の保存性を高めるための殺菌、殺虫、発芽抑制、熟成遅延などに利用している。こうというのが「食品照射」（食品への放射線照射）である。すでに医療器具の殺菌などに放射線照射が行われているが、食品照射はそれを食べものを使う。そもそもは、第二次世界大戦中に米陸軍が缶詰に代わる簡便な保存食を開発しようというところで実用化研究が始まったという。戦後もアメリカでは一九五〇年代にアイゼンハワー大統領の提唱した「原子力の平和利用」のかけ声のもとで陸軍による本格的な開発研究が続けられた。日本では一九六五年（昭和四〇年）、日本原子力委員会に食品照射専門部会が設置され、その二年後の六七年から開発研究が始まった。食品照射は、食品保存技術の一つではあるが、原子力テクノロジーという顔を併せもつきわめて現代的な技術なのである。



食品組成が変化

食品照射では、目的により一萬五〇〇〇ラド程度（発芽防止）から三〇〇〇ラド程度（殺菌）の放射線を食品にあてる。（ラドは放射線の吸収量の単位で、ほぼレムに相当。最近はグレイ（一グレイ＝一〇〇ラド）を使用することが多い）。放射線で照射された食品（照射食品）は、いわば「被曝食品」である。医療用胸部X線が〇・〇一ラド以下、ヒトの半数致死量が五〇〇ラドというから、食品照射の場合はケタ違いに高い線量である。

有害な放射線をこれだけ多量に食品にあびせるのであるから、照射食品を食べて安全なのかどうかという疑問がおきるのは当然である。食品照射の開発研究も、その有用性ととともに、照射食品の安全性問題、すなわち毒性、栄養適格性、微生物学上の問題などを含めて「健全性」と呼ばれるものを検討してきた。

照射食品の安全性問題は、チェルノブイリ原発事故によって大きな問題となった放射能汚染食品の問題とは性格が異なる。放射能汚染食品の場合は、事故でまじ上げられた放射能（放射性物質、たとえばセシウム一三四とかセシウム一三七など）が文字通り食品を汚染していて、食品中に含まれている。

一方、照射食品は、放射性物質（コバルト六〇やセシウム

一三七など）を据えつけておいて、それから発する放射線を一定量一定時間あてるということなので、ふつうは照射食品自体が放射能を帯びることはない。そのため、照射食品は放射能汚染食品のようにその食品が何ベクレルであるかというように計る意味はない。

照射食品で問題となるのは、放射線を当てられることによって食品の組成が変化するということである。イメージとしては電子レンジに似ているといえなくもないが、電子レンジの場合は広い意味での放射線の一部であるマイクロ波を食品にあてることで食品の組成である分子が動いて熱を発生し、食品が熱くなる。照射食品の方は、電離放射線というひじょうに強いエネルギーをもった放射線をあてるので、分子が動くという程度ではなく分子構造まで変わってしまう。食品の化学組成が変化して、それまで食品中にはなかった新しい化学物質が生じる。照射食品はそれによって有害なものになるのではないかという意味で問題なのである。

安全ではない照射食品

照射食品は安全性に問題はないという科学者もいるが、これまでの経過を一瞥しただけでもとうてい問題がないとはいえない。ハンガリーのJ・バーナは、一九七九年までに行われた照射食品の健全性研究結果を分析したところ、悪影響が一、四一四回、好影響一八五回、どっちともつかないもの七、

一九一回であったという（一研究に対する結果は複数）。

日本では一九六七年から原子力委員会の音頭でジャガイモ、玉ネギ、米、小麦、みかん、水産練り製品（カマボコ）、ウインナーソーセージの七品目の健全性研究が行われ、それぞれについて特に問題はないという結果の報告書が出ている。ジャガイモについては早々と食品衛生法上の手続きがとられ、北海道士幌町農協が放射線照射施設を建設して、一九七四年から商業照射を始めて今日にいたっている（照射ジャガイモは年間約一〜二万トンとみられる）。

しかし、当時は国立予防衛生研究所で照射食品の研究に携っていた里見宏氏によると、照射ジャガイモの動物実験では体重増加の不良や卵巣重量の減少、死亡率の増加が指摘できるといふ。また、玉ネギの動物実験でも、死亡率の増加や卵巣と卵巣の重量減少、仔の生殖器異常や奇形が現れた。一九七八年三月に原子力委員会は、すでに営業照射が行われていたジャガイモを除く六品目について、「遺伝的安全性」の実験を追加したという経過もある。

また、アメリカでは、一九六三年に陸軍の申請で缶入りベークンが認可されたが、五年後の六八年に実験結果を洗い直した結果、ありとあらゆる悪影響がみられたということで認可が取り消された。その後一九八〇年代になってスパイスや豚肉、生鮮野菜果物への認可が下りたが、これにはレーガン

政権下で安全性への考え方が緩くなってきたという背景がある。

国際的には一九六〇年代からWHO、IAEA（国際原子力機関）、FAOなどが照射食品の健全性問題についての合同専門委員会を何回か開いている。一九八〇年の会議では、一〇キログレイ（一〇〇万ラド）までならいかなる食品を照射しても毒性学的問題はないとする報告を行った。推進側はその後しばしばこれを「一〇〇万ラド安全宣言」と呼んで引合いに出すが、照射ベビーフード事件の刑事裁判の判決の中でも、この報告には論理の飛躍があり照射食品が安全であるという根拠とはならないと述べてある。

検知法がない

放射線を照射された食品は、味や臭いや色が変わるが、線量がそれほど多くない場合にはあまり違いがわからない。そして問題なのは、食品を調べてそれが放射線照射されたものかどうか、どの程度の線量があてられたかなどを検知する方法が見当たらないということである。

このことは照射食品の管理・監視上の問題をひきおこす。表示が適正かどうか、さらには悪用や濫用の取り締まりにも支障をきたす。十一年前には日本でベビーフードの原材料となる粉末野菜が照射されていたという事件が起こったが、イギリスでは細菌汚染で積み戻しになったクルマエビが秘かに

オランダの照射施設に運び込まれ、殺菌されて「きれいに」されて再輸入され、イギリス国内で販売されたという照射エド事件が明るみにでた。デンマークでも同様のムール貝事件が起きている。

照射推進派の人の中には、細菌で汚染されたものを殺菌して食べられるようにすれば食料不足の国などには朗報ではないかという人もいるが、ふつうは推進派の人でも細菌汚染などで品質の劣るものをごまかすために照射することを認めてはいない。それを認めれば、不衛生な製造過程を放置して細菌数だけ押さえるということが恒常化し、食品全体の質の低下につながるからである。

電離放射線は透過力が強いので、段ボールの上から放射線をあてることができる。しかも、熱が生じないから、生の魚介類、肉類も、生鮮野菜果実類も見た目に変化はない。こうした放射線照射のもつ性格そのものがそもそも反消費者的なのだと思う。

推進の波

さて、これ以外にも食品照射はさまざまな問題をかかえているのだが、このところ食品照射を実用化しようという動きが目立ってきている。昨年暮れにはジュネーブで国連関係の諸機関（原子力推進のIAEAも含む）が主催し、各国政府代表が出席して「照射食品の受入れ・管理と貿易に関する国

際会議」という照射実用化推進のための国際会議が開催された。照射技術を食品・農産物の貿易に利用しようというものが、この会議には世界の消費者団体の連合体である国際消費者機構（IOCU、約六〇カ国一八〇団体加盟）の代表二十数名がオブザーバーとして参加し、安全問題を提起した。スウェーデン、西ドイツ、ニュージーランド、オーストラリアなどの政府代表も実用化推進の決議案には異議を唱え、コンセンサスは得られなかった。だが、金や権力をふりまわす推進側の力をあなどれないのも実情である。

食品照射は、長距離長時間輸送や植物防疫、検疫などが不可欠の輸出入食品にむいている。カナダは経済援助の一環としてタイに照射施設を建設中である。タイは照射ソーセージの試売やトロピカルフルーツ、米、鶏肉の照射を考えているという。韓国には照射施設が完成し、一方で十一品目の認可も下りた。輸入食品大国の日本の消費者も目を内外へ光らせる必要があるようだ。

（参考文献）

トニー・ウェブ他『食卓を脅かす食品照射』三一書房

『海外の市民活動』No.44、49、54 大竹財団

高橋暁正・里見宏『放射線照射食品——照射ジャガイモを中心に——』薬を監視する国民運動の会

（くぼた ひろこ・国民生活センター）

特集 食へものから地球を見る

西暦二〇〇〇年までに

飢餓を終わらせるために

柘津都子

●私達は今、地球から飢餓を終わらせることが可能な豊かな時代に生きている——そして、飢えは毎日三五、〇〇〇人の命を奪っている

人間の歴史にとつて、飢餓を終わらせることは夢にすぎませんでした。ほとんどの人は「飢餓や餓死は避けることのできないもの」「人間が多すぎて食糧が足りない」と考えてきました。

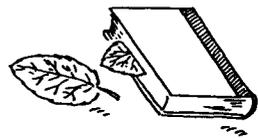
ところが今から十二年前の一九七七年、米国科学アカデミーは、世界中の一五〇〇人以上の専門家の協力を得て、二年前にわたって行った世界の飢餓に関する研究結果を公刊しました。その報告書は次のような結論を下しました。

「わが国と諸外国に飢餓を終わらせるという政治的意志があれば、広範な飢餓と栄養不良の最悪の局面を一世代のうちに克服することが可能であろう」と。

現在では西暦二〇〇〇年後に予測される世界の全人口を養うのに十分な食糧があり、しかも技術の進歩はそれ以上の生産を約束しています。もはや「世界中の人々に十分行きわたる食糧がない」という考えは通用しなくなりました。

私たちは、今、人類史上初めて地球の慢性的飢餓を終わらせるための能力、資源、解決策を持っているのです。

それにもかかわらず、飢餓は毎日三五、〇〇〇人の命を奪っています。一分毎に二四人。そのうち一人は五歳以下の子供たちです。二六〇人の子供を乗せたジャンボジェット機が毎日一〇〇機墜落している様子を想像してみてください。これだけの数の子どもが来る日も来る日も飢餓のために命を落しているのです。現在、世界中で少なくとも五億人が飢えに直面しているといわれています。そして年間、一三〇〇万人から一八〇〇万人の命が飢餓と餓死により失われているの



です。一体、この飢えとは何なのでしょうか。

●飢饉と慢性的飢餓の区別

「飢餓」と聞くと、どんな光景をイメージしますか？ ほとんどの人がニュースでみる飢饉の被害者を思い浮かべるでしょう。例えばお腹がふくれていて手足が棒のように細い子どもたち。難民キャンプで食糧の配給を待つ人々の群れ……これらは飢饉のイメージです。飢饉とは旱魃、洪水、戦争などにより突発的に特定の地域で発生します。飢饉は人々の生活に突如打撃を与え、人々を住み慣れた家から追い出し、飢えた人々で一杯のキャンプへ追い立てます。飢饉が発生した地域では食糧の不足が急激に起こります。そのために人々は死に至ります。

しかし、飢えによる死のうち、飢饉で死ぬ人の割合は全体の10%にすぎません。これは氷山の一角です。

実は残りの90%が慢性的で執拗に続く飢餓がもとで死んでいく人々です。

飢饉や食糧危機は大ニュースとなり、人々の関心を集め、ある程度の効果的な対策がとられます。しかし、慢性的で執拗に続く飢餓は注目されません。これらの人々は単に貧しく見えるだけなのです。しかし、実はこれらの人々が毎日、何千何万人と死んでいるのです。そして、このような飢餓の現状がマスコミに取り上げられることはほとんどありません。

世界の通信ネットワークがこれだけ広く発達しているにもかかわらず、毎日三五、〇〇〇人が死んでいるというこの恐ろしい災害は、人々の目にふれず起こっているのです。

これは「静かな虐殺」です。

慢性的な飢餓はアジア、アフリカ、ラテンアメリカなど七〇以上の国で続いている世界規模の問題です。何億人もの人々にとって日常的に続いている悲劇です。人々は直ちに餓死するわけではありません。しかし、健康を維持するために必要な蛋白質やカロリーを十分摂ることができず、やがて病気への抵抗力がなくなり、仕事の生産率は低下し、明瞭な思考ができなくなっていくます。慢性的飢餓状態におかれている子どもたちは、ちょっとした風邪や下痢で死に至ります。栄養障害とそれによって起こる病気は幼児の死亡原因の第一位を占めています。また、世界中でビタミンA不足のため毎年二五万人もの子ども達が視力を失っています。

飢えが続いている国では、四五歳まで生きた人は長生きをしたと考えられます。慢性的な飢餓は直ちに死に至らないにしても、人々の寿命を大幅に縮めているのです。

また、飢えの続いている国の子ども達は多くの乳幼児期に死んでしまします。そのため親たちは生んだ子どもも何人かが成人することを期待して、たくさんの子どもを作りまします。飢えている国の母親は飢えない国の母親に比べ、二倍

以上の子どもを出産しているのです。このことは人口増加に拍車をかけるだけでなく母体の健康も害されていきます。

●飢饉と慢性的飢餓への解決策は異なっている

飢饉と闘うために、私たちは食糧をはじめ、緊急援助を行います。飢饉は確かに深刻な脅威ですが、世界は効果的に対応するようになりました。一九八八年、世界中がエチオピアの飢饉を回避するために動きました。

現在は飢饉を予測できるようになり、素早く対処して避けることさえできるようになりました。これに対して、慢性的で執拗に続く飢餓を終わらせるための世界的な努力はまだ始まっていません。毎日飢えに直面している五億の人々は旱魃や洪水や他の緊急事態のためではなく、彼らが必要な食糧を買うお金や、農作物を作るのに必要な資源がないために飢えています。

飢えている人々の大多数は農村部で生活し、そこで働いています。そしてその多くは土地を持たない小作人です。たとえ持っていたとしても猫の額ほどしかなく、生産性を上げるのに必要な融資も得られなければ、技術指導も受けられませんが、また無秩序に広がる都会のスラムなどにも多くの飢えた人が住んでいます。

文化の違いにより住む環境はさまざまですが、飢えた人々には共通のことがあります。それは貧しいということです。

飢えた人々はたいい読み書きができず、健康を害しており、政治力を持っていません。

これらの人々はどんなに一生懸命働いても、生産性を高める機会がないのです。機会がなければ、飢えた人々が自分たちの飢餓を終わらせることはできません。その機会とは、教育医療、清潔な水、効果的な衛生設備、予防接種、家族計画の方法などを利用できること。また、飢えた人々が土地や種や農具を手に入れられるようになることでもあります。機会は農業の研究や、農業技術の改善や、灌漑などでも生み出されます。機会は、道路、交通機関、作物の貯蔵庫、処理施設など、農村社会の基本構造によっても作られるでしょう。機会を手にするためには、土地の購入、灌漑設備の改良、器具や家畜の資金の借入れが必要です。

飢えている人々は非常に厳しい環境にもかかわらず、決して絶望的な犠牲者ではありません。これらの人々は自立心があり、生産的で、生きるための技術を持った人々です。そして、飢餓を終わらせるために一番努力している人々です。

飢えている人々は、十分に自由かつ開放された機会さえ与えられれば、家族を養うのに必要な手段を得ることができ、飢餓を克服するでしょう。

●世界は動いている——今こそ飢餓の終わりが政治的経済的優先課題となる時代を

飢餓を終わらせることは、各国であるいは国際的にまだ高い優先順位を与えられていません。しかし、このゴールに向かつて世界は動いています。

一九〇〇年には飢餓を終わらせた国は地球上に一つもありませんでした。(飢餓の終結は乳児死亡率へIMR)による判定を基準にしています。IMRとは、一〇〇〇人の出生に対して一年以内に死亡する乳児の数をいい、その数が五〇以下になった時、その国の飢餓は終わったと判定しています。一九四〇年までにIMRが五〇以下になった国は九カ国しかありませんでした。しかし一九六〇年以来、執拗な飢餓がスリランカ、ポーランド、アルゼンチン、モンゴルなど五二カ国で終わり、一九八四年までには、世界の人口の半分にあたる七三カ国がIMRを五〇以下に下げました。この動きには加速がついてきています。西暦二〇〇〇年までに全ての国のIMRを五〇以下にすることは可能です。それは地球レベルで努力を行う全ての人々の一致した意志と行動によってのみ達成することができます。

●ハンガー・プロジェクトの取り組み

ハンガー・プロジェクトは「西暦二〇〇〇年までに地球上から飢餓をなくす」ことをコミット(公の宣言・約束)しています。一九七七年に発足以来、現在世界一五二カ国、六〇〇万人以上の人々が地球の一人として飢餓を終わらせるとい

う立場を宣言しています。何百万人何千万人という個人個人の意図が地球全体に充満する時、それは私達の地球規模のコミットとなって、新しい時代の思潮を生み出していきます。

飢餓を終わらせるために必要なことは、飢饉と慢性的飢餓との区別が明確に確認され、飢餓を終わらせるための決定的かつ有効な行動が取られる時代、飢えている人々に機会を提供することが政治的、経済的な優先課題となる時代、飢えた人々が飢餓を終わらせることができるように、必要な資源が再配分される時代、そのような時代を呼び起すことです。

そのためにハンガー・プロジェクトは広範囲な活動を行っています。世界中の人々に参加を呼びかけるエンロールメント活動、飢餓の終わりのための教育プログラム、餓死を根絶し、飢餓を永遠に終わらせるためのリーダーシップに対するアフリカ賞の授与、また、インドで実際に飢餓を終わらせる革新的な開発戦略計画(グジャラート州バヤド・タルカ地区の一六一の村が自分達の飢えを四年後に終わらせるプロジェクト)の開始、他の非政府組織とのパートナーシップ等々を行っています。日本におけるハンガー・プロジェクトの窓口は左記の通りです。多くの方々の参加を願っています。

ハンガー・プロジェクト東京オフィス 03-816-0796
〒112 東京都文京区後楽1-1-15 伊藤ビル

(ねず くにこ、ハンガー・プロジェクト)

「食品安全条例」

私たちの直接請求

林 温子



私たち生活者の食をめぐる状況は、近年ますます深刻の度を深めています。チェルノブイリ原発事故による地球規模の食品の放射能汚染、貿易摩擦解消策としての食糧輸入の拡大、加工食品の多様化、農薬・化学肥料多投与の農業、放射線照射食品・バイオ食品等々の新技術の不安などが、その原因といえます。

にもかかわらず、このような食不安を解消し、危害を未然に防ぐ役割を負わされている政治の対応は、法制度の不備も手伝い、まったく頼りない状況にあります。このことは消費者にとっての問題にとどまらず、いざれ生産者へも不利益を招くことになるのは必至です。私たちはこのような事態を打開するために、「食品安全条例」制定運動を始めました。

私たちのやってきたこと

直接請求は地方自治法によって保障された市民の政策提

案権で、市民自身がつくった条例案に対し、都内（あるいは区市町村内）の五〇分の一以上の有権者の賛同署名を添えて首長に提出すると、首長は二〇日以内に議会を招集して審議し結論を出さなければならないという制度です。

今回の直接請求運動は、多くの団体・個人の参加による「市民の手による条例づくり運動」として、条例案づくりから署名集めまで手作りの運動となりました。

私自身がこの運動に参加したのは、生活クラブ生協の共同購入を通して「問題を社会化し解決する」ことを実践し、体得してきたことからです。例えばカネミ油症事件は、食用油の脱臭工程でPCBが混入して起きた事件ですが、このことを社会問題として促え、仲間と共有化し、一切の化学合成品を使わない「なたね油」をつくる生産者と提携しています。

システムは、班を単位とした予約共同購入です。予約という

ことは、一年間に私たちが消費する量を生産者と約束することです。それに責任をもつためには、毎日、班の中で話合いを持たなければなりません。この話合いという行為が私たちの共同購入の重要なポイントです。生産者との提携関係は予約共同購入のしくみの中で強くなっています。例えば、豚肉の買ひ方は、一頭を丸ごと買うという方式です。市販の豚肉の販売表示、不自然な肉色、複雑な販売ルートなどの問題点を共同購入によって解決してきました。一頭の豚からとれる部位のバランスは決っていますが、私たちはその全てを食べています。その結果、生産者原価方式を実現し、私たちは市場より安く買ひ、生産者は一般生産者より収入が多いのです。

不安を解決するために私たちに出来ることは実践してきました。＃自分の生活を自治する＃これが私たちの運動です。しかし、複雑化、巨大化した経済システムの中で、こうして解決できることには限りがあります。運動を続け広げながらいつもこの壁につきあたるのです。この壁に風穴をあけることが、私たちの新たな課題です。

自治体には、住民および滞在者の安全、健康、福祉を保持する役割があると地方自治法に明記されているのですが、どうもその通りではない、私たちの声を直接、政治・行政の場に届ける必要があるということに気付いたのです。それが、

「食品安全条例」制定運動になりました。

一九八七年、生活クラブ組合員が住む特別区・市ならびに東京都に対して請願運動を行いました。当時の食不安の実態は、「オーストラリア産輸入牛肉から残留農薬」「台湾産豚肉から発がん性抗菌剤」「タイ産ブロイラーから残留農薬」「輸入肉をめぐる利権の発覚」など社会問題が続出していました。それにも拘らず、政府は貿易摩擦と輸入許可基準を引替えにして輸入食品の検査体制を後退させているし、チェルノブイリによる食品の放射能汚染も深刻になるばかりです。不安は輸入食品だけでなく、国産品も農薬の多投与、食品添加物の多使用、畜産や養殖での危険な薬物使用、有害物質を含む容器使用、ゴマカシ表示など問題は絶えることがありません。

こうした中で、私たちの集めた「食品安全条例」制定の請願署名は十一万人を超えました。請願に対する議会の反応は、基礎自治体の責任を逃れたいという傾向が強く、継続審議、否決が続きました。このような都や国への中央依存主義、他の自治体をうかがう横並び主義の中で、三鷹市、町田市、日野市（一部）が採択したことは、大変意義深いものでした。食品の安全をめぐる問題が、これだけの請願署名をもって各行政区で一斉に提出されたのは初めてで、議会にも社会的にも大きな影響を与えました。

この請願運動によって、自治権の行使というところでは前

進しましたが、条例を制定させることはできませんでした。

直接請求へ

基礎自治体に対して引き続き運動を行いながら、東京都に對して直接請求を行い、条例の実現を図ることを新たな目標としました。請願の時は、ほぼ生活クラブの組合員で行いましたが、直接請求にあたっては多くの団体・個人の方々とともに「食品安全条例をつくる会」を結成しました。

私たちが直接請求を行うことの意義は、行政の政策に對して、市民が自らの生活をよくするための政策を提案していくことによつて、主体的な生活を獲得していくことだと思いません。陳情、請願と異なつて、市民自らが条例案を作らなければならぬ直接請求は、政策提案運動の中でもよりハイレベルの運動といえるのではないのでしょうか。

条例案づくり

大ぜいの市民の生活要求と知恵を持ち寄つて条例案をつくりあげるために、多くの人たちが「一言提言」運動に参加しました。寄せられた日常の生活の中で感じ、考えている食品にかかわる不安や要求を神山美智子弁護士を中心とする「条例案作成チーム」が条例案に練り上げていきました。「一言提言」の内容は大多数が共通しており、中でも添加物、農薬、輸入食品、放射能汚染への不安が非常に強く、これらに規制を求める声が目立ちました。他に表示への不信、検査体

制の不備を指摘し改善を求めるものも多くありました。条例案作成チームで検討の結果、これらを反映した条例案がまとまりました。

一九八九年二月四日に開かれた条例案発表会（於・主婦会館）は一五〇人の人々で埋まり、熱っぽい議論が交されました。この日の議論から条例案はさらに不備を改め、将来の技術発展にも耐えられるような具体的な条例案が出来上がりました。

私たちの条例案を世論にする

私たちの政策提案を広く社会に訴えていくために多くの参加団体、賛同人、発起人が活動しました。各界からの賛同人は一二〇人を越えました。条例制定請求代表者には、神山美智子（弁護士）、小室等（音楽家）、竹内直一（日本消費者連盟）、毛利子来（小児科医）、亘昌子（遺伝毒性を考える集い）、伊達秋雄（弁護士）、湯本章子（生協Eコープ）の各氏と生活クラブ生協から林温子の八人が名を連ねました。

主な団体は、生協Eコープ、北多摩生協、調布生協、西多摩生協、立川生協、生活クラブ生協、全電通東京、自治労働京都本部、日放労、全農林関東地本、遺伝毒性を考える集い、市民運動全国センター、婦人民主クラブなどで、各地域ではさらに多くの市民団体、労組とともに活動を展開しました。

署名開始直前の三月十一日には自治労働会館でスタート集会

が開かれ、小室等さんの歌、条例案の説明、署名運動のすすめ方、各団体からの一分間アピールなどがありました。

署名運動（直接請求成立をめざして）

三月十五日の署名開始日には三十カ所以上の駅頭で一斉街頭署名が行われました。シンボルマークの七ツ星てんとう虫のぼり旗やふうせんを掲げ、商店街や公園などでも食品の安全性について訴えました。老若や男女の別に関わりなく市民は私たちの話を聞き、快く署名に協力してくれました。直接請求署名は、代表者に収集を委任された「受任者」しか集めることができませんので、ポイントはいかに受任者を増していくかにあります。家族で、地域で、PTAで、サークルでまた見知らぬ人への戸別訪問も含め、生活者から生活者へと署名活動は着実に広がっていきました。四・二三の脱原発集会やメーデーにも署名活動で参加しました。

こうした活動の中から私たちは、食不安は世代や地域を越えてすでに社会問題として構造化していることを痛感させられました。

署名活動は公職選挙期間はできないため五月九日で中断となりました。この間も都議選立候補者にアンケートをお願いし、都議会審議の姿勢をたどりました。

選挙あけの七月二十四日から二十九日に署名運動は再開され、八月八日各行政区で一斉に署名簿が提出されます。署名

総数は法定必要数（約十八万人）を大きく超え、五十万人以上となる見通しです。

九月中旬の都知事への本請求をピークに都議会審議に向けた新たな運動が始まります。

条例案の骨子

最後になりましたが、この条例が何故必要なのかに触れておきたいと思えます。

現在の食品衛生法は、一九四七年に制定され、敗戦時の混乱を反映して公衆衛生の向上と取締まりを目的にしています。現在のような新たな食不安に対応できないのも無理のないことです。また、東京都には一九七五年に制定された東京都消費生活条例は都民の主体を明確にした先進的な条例があります。すべての生活物資を対象としているため、食品に對してきめのこまかい対策をとることは限界があります。

今回の条例案は、食品に関する都民の申し出制度、消費者代表が過半数を占める食品安全委員会の設置、安全性の高い食品に対する推奨制度、安全性の疑わしい食品の使用を都施設から追放するなどを柱に四十二条にわたるものになっています。

都議会での審議は今秋になる予定です。ご注目いただきました。と思います。

（はやしあつこ「食品安全条例」制定ノ 直接請求代表者）

「美味しんぼ」からのスタート

菱田 彰

Weの読者の皆さんは「美味しんぼ」を御存じですか。当然、御存じですねと書き始めたいのですが、それには不安がつきまとうので、ついこう書き出してしまいました。で、本当はどうなのでしょう。ぜひ知りたいと思います。

わたしの学校では、生徒会の図書委員会が毎年一回「調布北高の先生がすすめる一冊の本」という冊子を出しています。それに昨年まではしつこくエンデの「モモ」について書いてきたのですが、ことしは一転して「美味しんぼ」をすすめる弁を書いてみました。

「美味しんぼ 雁屋哲作、花咲アキラ画、小学館。

これはすすめなくても読んでいる人が多いのかもしれない。しかし、ある調査で『美味しんぼ』を知っていると答えた高校生は50%強、そして、知っていた高校教師も50%で、この本は現代高校生と現代高校教師がすれちがわない、つまり、出会える場のひとつなのかもしれないと思う。

わたしはこのマンガのファンであって、もちろん全巻（現

在まで）持っている。その社会批判の目はなかなかにするどい。今日ほど食物が豊かで、そして、汚染されている時はなかったから、われわれは毎日汚染食品を豊かに?! 食べさせられているわけで、それはこのマンガの重要なテーマのひとつである。(中略)

ところで、最新の第18巻の中の『猫とマーメイド』には菱田さんという猫の愛好家が登場する。話の進行上、パターン化された人物になっているのは少々気に入らないが、しかし何となくうれしい気分でもある。皆さん、ぜひ『美味しんぼ』を読んで下さい」

この文章の中で「出会える場のひとつ」と書きましたが、今の高校で教師と生徒がファイフティ・ファイフティで出会える場と機会がどれだけあるでしょうか。50%どころか数%もないだろうと思います。実は、今回、編集部から与えられたテーマは「社会科で食を考える」でしたが、「社会科で」から出発してはだめではないかとも思うのです。わたしは自分が

「美味しんぼ」のファンであると事ごとくにふれまわっていますから生徒がたまには話しかけてきます。「菱田さん」のことをいち早く知らせてくれたのも生徒でした。

ということもあって、今年の「現代社会」の授業はこの「菱田さん」の話の紹介からスタートしてみました。きいてみると、一年生で「美味しんぼ」を知らないものは、一クラスで二、三人いるかないかでした。うれしくなつてつい話にも熱が入ります。この「猫とマーマレード」の話は「アメリカからの輸入柑橘類は絶対に食べてはいけない」というかなり強烈なメッセージです。それらにたつぷりといっている防カビ剤OPP、殺虫剤EDBには強力な発ガン性があるからです。そして、政府はその輸入をふやすことを決定しているが「国民にはちゃんとした説明をすべきなんだ」とアピールをしています。「菱田さん」は自分の家でマーマレードをつくっているのですが、輸入オレンジを何の疑問も持たず材料にしている。「あなた方は猫にはずいぶん気をつけているが人間にはぜんぜん気をつかっていない」とやられてしまう役回りになっていて、少々気に入らないわけなのですが。

ところで、ここには二つの問題があります。ひとつは、80年代に技術革新（ハイテク）と輸出大国化でひとり高成長を続けてきた日本がいま輸出大国を続けることもできず、止めることもできないジレンマに陥っていること、そこを輸入大

国化でバランスをとろうと農産物輸入化問題が出てきていることです。しかし、日本はとうの昔から輸入大国なので、実はこれは農業つぶし、農民殺しそのものなのです。第一、何でハイテク製品や自動車のツケを農産物が払わなくてはならぬのか。筋が通らない話です。もうひとつは、全世界的な農民的農業の解体と農業の多国籍企業による支配の進行です。OPPやEDBの問題もそこから発しているのです。だから、これは日米農民戦争ではなくて、逆に、多国籍企業に抗する農民の国際的つながり、自立的経済関係をどうつくるかという問題になっていくはずで、つまりは、食を民衆の手にとり戻すか、という問題だと思います。

「美味しんぼ」にもどれば、その中では問題の解決へむけて期待されているのは、いわゆる開明的保守政治家や財界人（角丸副総理をはじめ）になっていて、これは気になるといふか気に入らぬところでもありますが、作者には民衆へのある種の絶望感があるのかなと思ったりもします。絶望するのはわるいことではなく、あえていえば希望はそこからしか生まれないとも思うのですが。

Weの読者の皆さんでまだ読んでない方はぜひ「美味しんぼ」を読んで下さい。8月現在、21巻まで出ています。なお、テレビは後にして下さい。先入感が入ってしまいますから。そして、子どもたちとの出合いの場にして下さい。

川が生きかえった

——手づくりの木炭による河川浄化の実験から——

加藤 文江

一、はじめに

私達の街は、東京都八王子市の西部に位置し、国定公園高尾山を背負い、小仏川、案内川、南浅川が街の中を流れている。「緑と水」を大切に育てている、そんな街です。

なぜ主婦の手で、浄化実験に取り組んだかと申しますと、一九八二年頃、地域の中で生活に根ざした社会教育活動をしたらどうかという提案がなされ、婦人の団体、グループ等の代表者による話し合いが行われました。

そこで目標とされたのが、南浅川の源流であるこの地で「粉石けんを使い、川をきれいにしましょう」でした。この目標にそって、年一回の文化展、梅まつり等、浅川地区の大きな行事に参加し、合成洗剤の恐ろしさ、川を汚す生活排水の問題等、八王子市消費者センターの資料を基にPR活動を行ってまいりました。

この連絡会が発展し、「浅川地区環境を守る婦人の会」が誕生したわけです。会のスローガンは①粉石けんを使いましょう ②川をきれいにしましょう です。ごく素朴な生活を足元から見直していこうと、活動を始めたのです。

二、浄化作戦に入るまで

源流で川の浄化運動に取り組んだ婦人団体が生まれたと、紹介された新聞の記事がもとで、東京農工大学の小倉紀雄教授に直接指導を受けることができ、地区内の河川の水質を調べることになりました。

84年8月24日、第一回の水質測定（小仏川、案内川、南浅川、東横山橋までの約十km・二十地点）が実施され、ここで初めて、川の水の汚れを、自分達の目で知る機会を得たのです。測定項目——水温、気温、電気伝導度、亜硝酸、アンモニア、化学的酸素消費量（COD）、川の様子、天候

測定方法——パツクテスト（試薬による定性分析）、電気電導度計、温度計

この調査から川を汚染している最も大きな原因は、生活雑排水であることを知らされ、大変大きなショックを受けました。私達は川を汚す加害者であり、危険な水道水を飲む被害者でもあったわけです。そこで、毎月一回、水質測定を行い、一年間のデータを集集し、川の汚染の度合を把握し、浄化の方法を検討することになりました。

一年間の測定から——流域別汚染度とその原因

小仏川、案内川、南浅川流域の平均値のまとめを図1で表わしてみました。最も汚染されているのは、花屋測溝（AM七—地点）です。この測溝には、雨水や用水は流入せず、家庭の雑排水のみが流入している地点です。汚染の少ない上流の数値と比較すると、5—8倍の汚染状態であることが、わかります。

原因として①測溝には、九四五名分の生活污水が流入し、そのため測溝の自浄能力をはるかに超えている。②特に最近みられる簡易浄化槽に管理上の問題がある。と考えてみました。各々図1から分るように、初沢流域、南浅川流域、の順に汚染されていることが考えられます。小仏川、案内川にみられる自浄作用の効果も、流域人口数の増加により、確実に薄れ行くことが数字により理解されます。

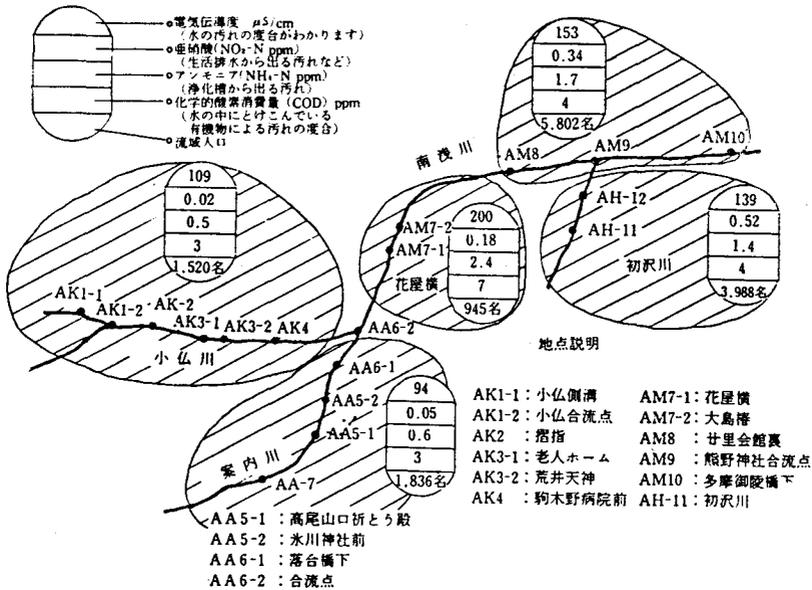


図1 小仏川・案内川・南浅川流域別平均値

三、木炭による浄化の実験と炭焼き

—AM七（花屋測溝）地点浄化実験について—

主婦の手で簡単に出来る浄化の方法について検討を始め、この地点を実験場所とし、失敗を恐れず、実験に踏みきることになりました。協力団体は、「高尾、浅川の自然を守る会」の方々、「会名のない会」の男性の協力で、第一回の実験を行うことが出来ました。

第一回 木炭によるネット方式 (85・5、87・2)

第二回 木炭によるジャカゴ方式 (87・2、88・8)

方法—木炭一二〇gを細かく砕き(約二時間かかる)たまねぎのネット状の袋に入れ、約8m位にしきつめ川の床にしずめる。

何故木炭か—この地域では昔から炭焼きで生計を立てている人達があつたこと。山の間伐材を利用出来るのではないか。炭焼きに多少興味があつたこと。

木炭に期待すること—木炭の気胞を利用し、汚水を通し木炭の中に微生物を繁殖させ、これにより雑排水の汚れを食べさせ、また吸着させる。脱臭の効果。

大きな期待と、大きな不安で、木炭による浄化の実験を初めました。毎月炭に付着するヘドロの掃除、水質の測定、炭の補給。一度雨が降ると川の床に並べてあるネットは一夜に

して流されてしまい、また新しく最初から…。炭焼き(ドラム缶利用)は8月の夏の盛り、男性の協力を得て、初めての体験でした。どの作業をとつても楽なものではありませんでしたが、炭焼きの専門家、杉浦銀治先生の御指導で、この実験も現在まで続けられたと思います。

第一回のネット方式は目づまりが多く失敗に終わり、第二回のジャカゴ方式に移り、木炭の中に微生物の繁殖もみられるようになり、喜びも、味わうことが出来ました。いずれも脱臭効果は上々です。しかし、流れる川の中に炭を置くのですから、実験室での効果は期待出来ず、流量と炭の量の関係、炭を取り替える時期の問題、データの整理、実験を継続する人的な問題、等々、考えることはたくさんあります。が、私達は、ふるさとの川をこれ以上汚すことなく、子供達に残したいという思いで、力と時間の許す限り運動を続けたと思います。

まちの環境汚染——団地の除草剤

柳原真理子

1 危ない除草剤が居住地に撒かれる

最近、ゴルフ場の農薬汚染が問題になったが、都市の団地でも同じ問題を抱え、「異議あり」の声が全国的に広がっている。

私の住むのは横浜市西部の左近山団地、建築後二十年、戸数五千戸、人口二万人の大きな団地である。結婚してすぐ入居、十年間に子ども二人が育った。ここは木々が多く、「緑豊かな良い環境」と評価されている。しかしそれが、年に五〜六回散布される「農薬まみれの緑」である時、果たして「良い環境」と言い切れるのか。私は不安のまま暮らしてきた。

六地区に分かれる団地に撒かれる農薬は除草剤と殺虫剤がある。それは六十六アール、千三百世帯の私の地区で年間約二百キロ、金額にして約二百五十万円に及ぶ。中でも年に二

〜三回撒く除草剤の量は多い。滋賀県のあるゴルフ場では年間十アール当たり六・八キロの農薬を撒き、そのうち一・五キロが除草剤である。団地では一キロから二キロぐらいであるから、バラツキはあっても、除草剤に関してはゴルフ場と同程度と言える。種類は発ガン性のあるシマジン、ダイオキシンを含む可能性のあるMCCPPなど。中には三種類を混合して散布している地区もあり、そうなると相乗効果で危険性が増す可能性があり、毒性については誰もわからない。

散布の方法も、公園に子どもがいてもお構いなく、散布後も立入禁止の措置もないため、直後に転げ回って遊ぶ姿もある。「撒くなど言われても共有地なので一人の意見を認めるわけにはいかない。きれいにしておかなければ」というのが管理側の考え方。しかし、共有地だからこそ、安全な環境に保つべきではないのか。散布にきた作業者に「撒かないで」

と言っても虚しく、言葉は農薬の霧の中に散ってゆく。

2 「除草剤を考える会」発足

そんな数年前のある日、私の加入していた生活クラブ生協を通じ、団地内で反対の動きを始めたF氏を知った。その時は署名を集めたが残念ながら中止にはならなかった。しかし八七年の秋、大阪大学の植村振作先生を迎え、学習会を開いたのをきっかけに、「左近山団地除草剤問題を考える会」が発足した。皆フツのおばさんばかり。日頃から食品添加物に気をつけたりはしている。当初八人だった。公団や管理組合に質問状を出したり、「ミミズ通信」を発行し、全戸配布したりした。その成果あって、F氏の住む公団の賃貸地区は、紆余曲折を経たが、今春初めて散布が中止になった。まだ予断は許さないが大きな第一歩だ。

しかし、三千戸の分譲地区はまだ散布が続く。散布を決定する管理組合執行部は住民によって選出されるのだが、長期留任による弊害も取り沙汰され、総会では子どもを守ろうという母親の願いに耳を傾けようとはしない。

去年の春、私の地区では一部の棟で中止を求める要望をまとめたが、その甲斐もなく強行散布された。その様子を、私はビデオカメラを肩に「突撃リポーター」よろしく追跡。安全だと主張する管理側は「今まで撤いてきて何か害があった

か」という、そしてシャワーのように芝生に除草剤が散布される。このテープは、その後半年がかりで「止めさせよう身近に迫る除草剤」にまとめた。反農薬東京グループの辻万千子さんらの協力を得、素人づくりながら全国の農薬反対運動を担う人々などに百本以上売れ、共通の認識を深めている。

3 空中散布と同程度の汚染

また八八年、八九年と横浜国大環境科学センターに依頼し、加藤龍夫研究室の樋田博さんが大気汚染を調査してくださった。その結果、この人口密集地の団地で、水田などの空中散布と同程度の汚染であることがわかった。汚染された空気を吸うのは食べものから摂るより十倍以上危いといわれる。また奈良平城第二団地の除草剤散布を考える会では、大阪の環境監視研究所に依頼、土壌中に農地の二十倍近い高濃度の除草剤が残留していることも明らかにした。さらに十数年前に農家の主婦が散布中にホースから逆噴出した除草剤シアジンを吸って亡くなった事件が、最近掘り起こされた。私の団地でも殺虫剤散布中にホースがはずれ薬剤が噴き出す光景が目撃されている。今さらながら危険と隣り合わせに暮らしているとゾツとした。

八八年十月、習志野の県営団地でも、アメリカカシロヒトリ退治のために殺虫剤を高濃度で大量噴霧し、住民に頭痛や吐

き気の被害が出る事件もあった。ズサンな農薬管理の結果である。長年農薬を撒き続けると虫にも草にも耐性ができて効果がなくなる。そしてやがては農薬の濃度も種類もキツくなっていく。

横浜市では原則的に除草剤散布は公共の場所で禁止している。以上のような事実を前にしてもなお、除草剤を散布するというのであれば、それは「人の命よりも芝生の方が大事」という価値観に基づいた管理姿勢であると言わざるを得ない。「芝生」は「けけん」「利益」などにも置きかえられる。

4 なぜ芝生なのか

もともと芝生は寒冷地イギリス原産の植物である。温暖多湿な日本にあつては雑草がすぐに生えるのは当たり前。一昔前は芝生がステイタスシンボルである時代があつた。しかし今は「団地に芝生」とこだわる時代ではない。都内のある公園では芝生を野原にもどした。自然の緑地が減つた今、ただ寝ころべる原っぱが希少価値になってきたのだ。無農薬で植栽管理している埼玉県の志木ニュータウン東の森香番街に見習つてはどうだろう。除草剤を止めて芝刈りを一回増やしたり、原っぱにして時々草刈りするのでもいい。

代替方法は自然の力を生かしながら工夫次第なのだ。以前よりセミも減り、蝶もあまり飛ばない。小さい子に「入って

は危い！」としからなければならぬよりは、花や虫と遊ぶことのできる緑地の方がどんなに「良い環境」か。管理側とは価値観も違うようだが、こういう生活感も欠けている。

最近、考える会では手押し芝刈り機を三台購入した。カマやハサミも用意して各々のペースで草取りをしている。資金不足のため、「除草剤イイヤバツジ」も作製した。子どもたちに付けて遊び回ってもらおう。団地中にこのバツジが広まるとき、きつと除草剤も追放されるだろう。

最後に前出の槌田博さんの考察を引用させていただく。

「現在、身の回りを多くの化学化合物が取り巻いている。その中には発ガン性物質や催奇形性のあるものが少なくない。これらの少しづつではあるが多品種の化学物質の相乗効果によって人類だけでなく、動物、植物、生態系に変化が起きている。ちよつとした決断と工夫で、使うことをやめることのできる化学物質は沢山ある。まずそういったものから使用を中止するべきであろう。またどうしたら使わないでも済ませることができるといふことに知恵を働かそう。一事が万事の例えの通り、自分の住居のまわりに訳のわからない薬剤を撒かれて平気でいられるとすれば、その人の暮らしが、あらゆる危険な化学物質によって侵されてしまっていることに気づくことはできないだろう。」

地球を守る心を家庭科で

村岡 洋子

この地球上には、自然から人間への贈り物としか思えないふしぎな存在があります。例えば数え切れない程、多くの種の中から、ほんの数種類の生物—虫の中の蚕、動物の中の羊、植物の中の綿と麻—がくれる繊維もその一つです。人間は、繊維を採取し、取り出し、

紡ぎ、織る、編む、という繊細で手のかかる仕事を、一つずつ仕上げて来ました。地球上のあちこちに、ただ、ぼうぼうと茂るばかりの藍を、醗酵させ還元させ、繊維を染める技を、人はどのようにして学んだのでしょうか。

このような事実は、人類が、長い長い地球の歴史の末に育まれて来た、まぎれもない地球の一員であることを、それ故に、本能的に自然の恵みを感じとることができ、自然との絶え間のないやりとりによって、自らの暮らしを営むすべを学ぶことができたことを示している、と思われのです。

繊維を「織る」につれて、我々は、その巧みな自然の技に感歎し、それを造った力のふしぎに打たれ、その援けを借りて、コピーを

も作るようになりました。コピーは、天然繊維ともよくなじみ、いくつかの長所も持つていて生活を豊かにしてくれました。

しかし、繊維産業が人間の暮らしに恩恵だけをもたらせたわけではありません。政治や経済のしくみによって、働く人の人権は侵害され、綿畑の奴隷や女工哀史を生み、一方産業廃棄物を排出して、自然の破壊を進めました。

ものを生産する場合には、製品自身をはじめ途中で発生するさまざまな物質を、その段階で、自然に帰すことのできるものにまで処理する工程が組みこまれていなければならなかったのです。勿論そのために、生産量は少なくなり、高価にもなるでしょう。豊かに装うこともすてきですけれど、自分に似合う数枚の衣類を大切に着る、という暮らしも、より人間らしいといえるかもしれません。全ての生産や生活面にこの原則が貫かれていたら、どんな社会になっていったでしょう。

今、世界的な規模で、環境の汚染と地球の

危機が叫ばれています。しかし、根本的なところで、意識が改革されているとは思えません。さらに、生活者である我々自身もまた、日常的に便利な化学物質を使い、廃棄して汚染をひき起こしているポリリユーターでもあるのです。ただ、自然を愛する、というだけではなく、今、自然を自分の内部でどうとらえ、自分の暮らしをどう変えて行くか、厳しい選択を迫られているのです。

しかも、迫られる選択の範囲と重さは、すでに環境問題に止まらず、次第に拡大されつつあります。原子力の平和利用にあたって、物理学者達は、「公開・自立・民主」の三原則を掲げたのですが、原子力発電所建設に際しては、この三原則は悉く無視されてしまいました。原子力発電の安全性や環境問題は、もとより大きな問題ですが、放射線のゴミ処理の問題だけにかぎっても、人類は「滅びの世界」に足を踏み入れた、と私も思います。遺伝子工学は、その初期の段階において、無軌道な推進を規制しようという動きが研究

者自身のあいだから提起されました。バイオテクノロジーは、なお、「自然な生命と死」をはじめ、社会的な問題を問われ続けています。また、ICなどの先端技術産業に対しても、新たな公害物質の問題や、従業員の健康障害や精神障害、コンピューター社会の病理や管理強化等に対して多くの警告が発せられています。

これらのさまざまな課題を反省し、制御して、人間社会が生きのびるための究極的手段は、「民衆の良識による選択しかない」ので、高木仁三郎氏は、「自らの内なる自然性に依拠した運動を通して実現する」と説きます。ある技術やシステムを許容するか、あるいはどんな形で許容するか、をきめるのは何を自然と考え、人間らしい暮らしと思うか、と

いう意思——その人の「内なる自然性」であり、これを育てるのは、「教育」です。

この教育の第一として、高木氏は、「生きた自然との接触による感性の蘇生」を挙げ、第二には「人間や自然についての歪められた観点から、どう解放するか」である、と述べています。歪められた観点の一つは、「自然に対して人間が優位性をもち、征服すべき対象として考えること」、もう一つは「狩する人の伝説」です。

自然に対するいわれのない優位性の観念は、容易に拡大されて、他の動物や民族、障害者や身分の低い者等、「自分より下の者」に対する差別を産むこととなります。さらに「狩する人」のモデルは、人間が本来、闘争性と征服願望を持つ動物であることを是認

し、過度の開発や戦闘、男性中心の社会構造を正当化することにつながるでしょう。

地球は、その上に住む一五〇万種、あるいはその倍近い、いまだ未知の生物が、その進化の過程で、相互に作用し合い、自らに適した環境を醸成しつくり上げて来た、生きていく天体です。

かけがえのない地球のかけがえのない一員である、という認識の上に立って、自分たちの家、地域、国家、さらに地球について「われらの暮らしのかたち」を選ぶ力を育て、「地球を破壊するしわざをけつして許さない」という意志にまで高め、さらに、持続した運動にまで抜けて行くことは、今後の家庭科の中で、大切な課題の一つではないでしょうか。

男女で学ぶ家庭科の新時代来たる！

家庭科新時代

— Weからの提案 —

日本図書館協会選定図書

「家庭科新時代へのいわば『船出の書』」(日本教育新聞)

半田たつ子編 A5判 360頁 ▼定価二〇六〇円(税込) 三三二〇円

ご注文は、最寄りの書店に(地方小出版流通センター扱)。ウイ書房に直接お申し込みの場合は、送料をお添えの上振替で

182 東京都調布市西つつじヶ丘 2-25-14
03(326)1380 振替東京 6159867

ウイ書房

◆学習の主人公◆

いのちのもとをつくる

福島県立農業短期大学校一年

◆世界の食糧と輸入農産物

遠藤 利一

世界の食糧は過剰傾向にあると言われているが本当に過剰と言えるのだろうか。大げさではあるが現在地球の半分は飢えていると言われている。食糧が過剰で豊かな生活を送っているのは日本とアメリカとヨーロッパの一部の国だけなのである。しかし、この国の人

達全部が豊かな生活をしているわけではない。飢えている人達もいる。世界の食糧が過剰と言われているのは、その人達を差し置いて考えているからである。大量の食糧を必要としている国がある。しかし、その国のことは考えず、食糧が余っている国同士で「買え」「買わぬ」と争っているのである。食糧が余っている国が、価格が安いと言うことで、別の余っている国に買うことをすすめる。これが現在問題になっている自由化である。そんな余裕があるなら何故、豊かな国から貧しい国へ提供しないのか。そんなことをすれば、

貧しい国へ食糧を輸出して、生活を成り立たせている国が、今度は苦しくなる。また、貧しい国ばかりに食糧を提供すると、他の国から非難されるに違いない。このような問題があるため、貧しい国へ、食糧を提供することは難しいのである。

次に、輸入農産物は安全性に欠けていると強く疑われている。間違いなく輸入農産物は安全性に欠けていると思う。ポストハーベストと呼ばれる輸送にあたっての様々の処理に危険がひそんでいるのです。しかし、この危険をなくすることも可能である。一つは、薬品を使わずに低温輸送する。二つめは、輸送時間を短縮する。三つめは、国際的に共通した基準を作る。これらが実現されれば、安全性は保たれることになる。しかし、それは行なわれていないのである。危険性のある農産物を輸出している国としては、自分達が食べるわけではないので、対して問題としては取り挙げていないと思う。危険といっても何が危

険で、どこまでが安全なのかを考えると難しい。とにかく危険性があるのは確かである。

例えば、輸送するにあたって、その国との距離によって時間が多くかかる国がある。その国まで送り届ける間に、農産物が腐ったり、品質が低下したりするかもしれません。それを防ぐために薬品を使う。また、いかに新鮮で、美味しいかを見せるためにも薬品が使われる。良い例が、スーパーなどに並んでいる輸入品のレモンである。このレモンは、やけにつやがありすぎる。これは、薬品が使われているためであり、この薬品には、ガン物質が多量に含まれていると言われます。

アメリカでは、主食は米ではなく、小麦である。しかし、米を主食としていないわりには、米の生産量は、日本よりも多い。アメリカでは、だから輸出するしか方法はないのです。また、アメリカは、日本とは比較にならないほどの大規模農業で、大型の機械が導入され、労働力が少なくてすむ。規模が大きければ、当然病害虫も多発すると思う。そこで使われるのが多量の農薬である。

これら二つの問題は、これからの農業を担っていく私たちにとって重要な課題になってくると思う。

◆ 豊かな食文化のための農業経営

本田 ひとみ

現在の食品流通の状態を見ても、まったくといっていいほど季節感がないと思います。

しかし、私は今までおいしいなんてあんまり思っていなかったさつまいもを、高校一年の時に、農業基礎という授業で、さつまいもを栽培し、クラスのみんなど食べた時のおいしさは、忘れられません。今考えると、これが旬の味なのかと思いました。

現在の生活で、服や和菓子は、季節感を大切にしていると思います。それは、夏にコートやセーターを着たり、冬の雪が降っている時に半袖半ズボンでいるのも考えものだと思います。そして和菓子も、茶道で使う場合なんかは、とても季節感を大切にします。このように季節感を大切にしているものもありますが、中には、トマトのように、実が青いのに出荷し、店先に出た時に赤くなっておいしそうに見えるものもあります。

しかし、私たち農家で、もぎたての熟したトマトを食べている人達には、新鮮さがなく食べた気がしないと云えます。この他にも、トマトと同じように、太陽の恵みを受けていない食べ物があると思います。これらは、消

費者が、便利さだけを求めたために起きたことだと思えます。

それで私は、温室と露地の組み合わせを考えた農業経営をやりたいと思います。

そして、食べ物は、人間にとって「エサ」ではなく、生命の根源であり、人間の生活の中で高度なものであり、一つの文化だと私は思います。だから、私は、旬の味を大切に、消費者に、本当の意味の旬の味、おいしいものを味わう喜びを理解してもらえような農業経営にしたいと思います。

そして、豊かな食文化にしたいと思えます。

◆ 消費者と農業

菅島 健夫

農業には、伝統的な農法としての有機農法と近代化し機械化した農薬による農業がある。

消費者の人々は、有機農法は、農薬・除草剤をつかわないので健康によいと思うという意見だと思えます。では、なぜ健康によい有機農法を行わないのでしょうか。消費者の人々は、「健康」ということしか頭に浮かばないのではないかと？ 農家の立場から考えては見ないのかなと思う。有機農業を行うとすると

労働時間が、大変かかるのです。それなりの技術も必要となりますので冷害にみまわれ収穫が減少します。また農薬をつかわないので

病虫害など発生しますし雑草もたくさん生えます。この雑草を手で四つんばいになってとらなければならぬ。この姿を見てどう思いますか？ 農業は、気象の中で左右される仕事です。ですから今、伝統的な有機農法を行う人が、少ないのではないかと？ 消費者の人々も、土にまみれて農業を行って見れば、どうですか？ 農業に手をださず商品しか見えないのでは、わからないのではないかと、今また農業を違った目で見てはどうかと思う。

◆ 農業の魅力

丹野 美樹

畜産——現代の若者達はこの言葉を聞いてまっさきに頭に思いうかべることは、「汚い、臭い」ということだろう。畜産ばかりでなく農業全般に対して、大半の若者はダサイとたくさんくさいと思っている。

しかし、私はいままで一度もそんなふうに思ったことがない。実際に農業に従事してみると、逆にそれが誇りに思える。

現在、日本は工業国となって、日に日にそ

の技術が進歩し、発展しているが、私には工業というものには何の魅力も感じない。工業を批判するわけではないが、人間が作りだした物を、人間が自由に操り、思いのままにするなんてちつともおもしろみがないと思う。ところが、農業はそうはいかない。土地の性質や気候、その年その年の気象など人間力ではそう都合のいいようにはかえられないものもうまく使いこなし、毎年毎年、地球上の何十億もの人間の「いのちのもの」をつくりだしている。それをつくり出すために、必ずしも人間のおもうまにいかないところに魅力を感じる。

どうしたらもっと収穫量が増えるか、どんな品種をつくり出せば需要が高まるかなど、多少工業と似た面はあるが、常に生物と接しているという点が一番の魅力である。

農業といっても、私は畜産を主に学習しているが生命の誕生はいつも感動的である。

牛の場合、わずかに百五十ミクロンの卵細胞が受精し、約二百八十日を経て四十キログラム前後にまで胎児が育ち、生まれてくる。その過程は特に神秘的なものである。

無事に子牛が生まれたときの安心しきった母牛の腫は幸せそのものだ。

自分より体の大きな家畜が、自分のいうとおりに動いてくれたときの喜びは非常に大きい。体も大きく力も強いものだから、逃げ出さうものなら人間をふり切つて殺してでも逃げ出すことができる。そんなこともなく、家畜はちゃんと人間に従ってくれる。だから「家畜」と言うのだが。

私はまだ、畜産についてほんのかけ出しだが、小さいころから私のまわりには動物が常についていたので動物の接しかたは少しは分かっているつもりだ。

動物は人間が愛情をもって接すれば、必ず愛情をもってこたえてくれる。

この素直な心が私は好きである。
畜産の魅力もここにあるのではないか。

◆ 私と農業

阿部 秀一

私は、自分の家が農家ということで、小さい頃から家の手伝いをしてきたので、土や植物などとは、都会の方面の人よりは接してきたと思います。そして、中学の時に、我が家の農業を後継していこうと思ったので、福島県立岩瀬農業高校に進学し、生まれて初めて本格的な農業の学習に取り組みしました。農業

全般の実習や授業を受け、特に実習で覚えた知識や技術は、身につきました。それからこの学校に入學し学習しています。

我が家の経営規模は、稲作を中心とした第一種兼業農家で、作付面積は、稲作が三・二ヘクタールで、自分の住んでいる郡山市の大槻町の方では規模は大きい方です。労働力は家族労働で、父母が中心となり、休みの日には、自分も手伝いもします。

私は農業を志してきて、不安に思うことがあるとあります。減反や米の輸入自由化などです。減反については、日本人の米離れや、消費量が少なくなつてしまったため、毎年作付面積の20%を減反しなければなりません。それでも、余剰米は増えていくばかりです。私は、将来はまだまだ減反が進んでくるだろうと思います。しかし、この減反した土地を、ただ何もしないで放つておくことをせず、稲の代わりになる作物を栽培していこうと思つています。その作物は、自分が現在考えているものでは、麦類、大豆、アスパラガスなどです。これらの作物は、兼業農家でも、十分に栽培できる作物で、それほど手間がかからず栽培できるものだからです。しかし、これらの作物は、収穫して販売しても、

その代金が安い面や、土地、気候条件などにも問題があります。でも、アスパラガスは、生長が早く、収穫できる回数が多いので、現在では一番良い作物だと思っています。

自分は、転作した土地は、最近注目されている有機農法で栽培したいと考えています。現在、我が家では、除草剤や殺虫剤などの強力な農薬や化学肥料を使用しています。しかし、自分は昆虫や微生物が死んでしまうような農薬を、私達人間が食用とするものに散布しては、後になって農薬による後遺症がでるのではないかと思います。それに、そのような農薬を散布されては、植物にとっても良いとは言えないでしょう。

私達人間は、少しずつ自分の首を締めているのではないかと思います。このままでは、日本に限らず、植物の生態系が破壊され、地球の汚染問題にもつながるでしょう。私はこの汚れた自然を元に戻せないものかと思えます。私は、少しでも農薬などは使わないで農作物を栽培したいと思います。

現在、私が思うことは、日本の穀物自給率を上げなければならないということです。現在の日本の自給率は非常に低く、三十%位です。このままでは、日本の食糧事情は外国

(輸入相手国)に左右され、もしも、世界的な不作になってしまえば、日本の食料や飼料も供給できなくなり、全体的に、生活が壊れてしまうだろうと思います。日本で供給できる作物は、米やジャガイモが自給率を百%超えています。裏を返せば、化学肥料などは外国から輸入されているので、実質的には、完全に自給されているとは限りません。そのためにも、これからの日本は、本当の農業の自立というものがようになってくるのではないかと思います。

◆ 農業後継者としての私

茅原 一路

私の子供の頃の夢の一つに自分の家業を継いで、おいしい梨をつくるというのがありました。中学校のころまでは、家をつぐことに何の抵抗もありませんでした。

しかし、高校に入り、三年になり就職か進学か選択しなければならなくなったとき、農業後継者というものにはばられるような気がして、それがなんとなくいやだったので進学を選びました。

しかし、そうやって見たのはいいのですが、実際、家のことを考えると好きなことを

やっているわけにもいかないので、結局は農業の大学を選んだわけです。

これからの果樹農業は、バイオテクノロジーや新しい技術も開発され、どんどん近代化へ向かっています。私もこの大学へ入って、新しい技術を覚え将来の家を継ぐとき、役に立てたいと考えています。

この文を書いているとき、友人と話したことは「皆、若いうちから農業をやりたいとは思いますが、家のことを考えると……」ということでした。

これは、今現在問題になっている農業後継者不足の問題にも関わってくることなので、実際、こう思っている人は少なくないことでしょう。ですが、今はこう思っている、これから悩みながら私たちは、次の世代へと近代農業をひきついでいくことであるうと思えます。

最後に、前にも書きましたが、農業後継者の問題や農家自体が減ってきている等の多くの問題点をかかえている中で、がんばってきた両親や祖父と同じように、私も悩みながらも自分のやるべきことをたしかめていきたいと思えます。

一年生の性教育は

日々のくらしの中に

●熊本県家庭科サークル

光 永 京 子

一、はじめに

教員になって五年目にして、初めて一年生を担任した。希望して、である。学校のことをよく知らない子どもたちに一からかかわってみたかったからである。

我が校は、一学年二学級（一学級約三十名）の中規模校である。どういうわけか、私の担当学級には、男の子の元気者ばかりが集まっていた。女の子はおとなしくて、言われたことはできるが、男の子の大半は、授業中でも席にじって座っておれず、立って歩いたり、立てひざをついたり、思い思いにしゃべったり、やる気がなかったりと、私の話すことなど、どこ吹く風である。

入学一週間後、初めての授業参観の日、こんな様子には保護者もびっくり。「元気者が集まりましたね」

と婉曲に言われた方もいたが、「先生がきびしくしつけなからんから……」と言われたおばあちゃんもいた。この「元気のいい子たち」が持つ、様々な問題を考えてみた。

。家事とは無縁の過保護状態——三世代同居が多く、祖父母たちの手がかかりすぎる。そうきんのしほり方も知らないので教えると、そうじ時間をぞうきんしほりだけで費やす。一年生の終わりまで服を着せてもらい、時間割をそろえてもらう子もいた。

* 時間的ゆとりのない生活状態——祖父母たちの手がかかりすぎる反面、親は農業・漁業など仕事に追われて、子どもと接したくともできない。また親たちが年齢的に若く自分たちのことに精一杯で、子どもたちへの愛情を十分に表現するゆとりを持たないのではないか。

。精神的幼さ——右の二点も要因となって、幼児期に身につ

けるべきことができない。「できない」のではなく「知らない」のである。

となりの学級担任は、低学年のベテラン、この学校でも、既に一年担任を二度経験されたが、「こんなに過保護な学年は初めて」とのこと。大変な一年生をひきうけてしまったものと後悔したが、後のまつりであった。

二、子どもたちにどんな力をつけるか

勉強だけを子どもたちに教えていればいいなら楽だが、授業自体成立しえないのだから、それ以前のこととも山積している。そのために、次の三点を、この一年間の目標とした。

(1) 毎日の学校生活を子どもたちが楽しいと感じるように、教材研究を子ども立場からやる。

(2) 子どもたちが私と本音でつきあえる時間をつくる。毎日の生活の中で性教育をすることで、より一層の子どもと私の関係を深める。

(3) 生活する力をつける——「働く」という字には、「動く」にニンベンがつく。これは、働くということ人間になっ
ていくことを象徴しているように思う。今の子どもにとっ
て働くとは、家事に参加することである。具体的には家庭
と学校のトイレそうじ、洗たく板を使つての足ふきマット
洗い（一年の終わりには自分たちだけで、脱水して干せる
ようになった）、卵焼きや、おにぎりづくり。もちろん、主

旨を理解していただいて各家庭と連絡を密に取りあった。
以上の三点を中心にして、子どもたちと一年間かかわ
た。その中で、強く印象に残っている事件を紹介したい。

三、さまざまな事件

(1) けんかのルールづくり

低学年では、決まって「先生、〇〇ちゃんが△△ちゃんを打った」等と言ってくるし、男の子はささいなことから取っくみ合いのけんかをする。そういった時、「〇〇ちゃん、ごめんなさいを言いなさい」と先生が裁判官になることが往往にしてある。それでは先生がいけない時に、子どもたちが自分たちで処理する能力はついていけない。

以前、四年生を担任した時、けんかの仕方が問題となり、話し合つたことがあった。けんかの大そう強い子に、「けんかの授業」をさせたところ、けんかにはルールがあることを教えてくれ、なるほどと思つたものである。

私たちは「けんかをしてはいけない。仲良くしなさい」ときれいごとを言っているが、果たしてそれが可能なのだろうか。むしろ、幼い頃けんかをするので人間としてのつきあい方を学んでいるのではないか。兄弟げんか、親子げんかしかりである。そこで、四年生の子どもから学んだことをふまえて、「けんかを「するな」とは言わない。でも、ルールを守ろう」と子どもたちと「けんかのルールづくり」について

話し合った。その結果、

①自分より弱い者とはけんかをしない

②頭、顔、胸、腹、生殖器は人間にとつて大切な所だから、そこは、打ったりけつたりしてはいけない

③けんかは素手で、物を使つたり投げたりしない

この三つを子どもたちと確認した。そして、私は子どもたちがけんかをしたら、けんかした理由を知つていてもこう言つた。「理由について先生は怒らない。君たちで解決すること。でも〇〇ちゃんがルール違反をし、お腹を打つたことは悪いね。そのことは△△ちゃんにあやまりなさい」

(2)母親のいない子どもについて

今の世の中では、大低どの学級も同じだろうが、私の学級にも母親のいないA君、B君がいた。A君は、両親がけんかをして母親が出ていったことを私に話せる面を持つた子だが、生活習慣が確立されていない。授業中床に寝っころがりたりしているので、まず起こして励ますことから、私の日課が始まる子だった。B君は、離婚して母親がいない、おとなしい子であった。が、内気と過保護故に、人の中によく交わらず、じーっと人がしてくれるのを待ち、いらいらすると、となりの子をひっかいたりした。

我が校では「読みきかせ」の時間が毎週とつてあり、家庭でもしていただいているが、A君、B君は、そんな状況にな

い。私は、「読みきかせ」の時、A君とB君を私の前に座らせることにした。四月当初に、子どもたちには「A君、B君のお母さんは、お仕事で家にはいないので、家で本を読んでもらえないから、前の席をA君、B君にしようね」と話し、納得してもらつた。

ところが、二学期転校してきたC君は、その事情を知らないで、「何でA君B君は、いつも先生の前に座ると？」と聞いた。子どもたちが「お母さんの家におらつさんけんたい」と自然に答えたところ、D君がふと「先生、A君たちのお母さん離婚したんね？」と言つた。他の子どもたちは、一斉に私を見た。

A君は大丈夫と思つて「A君に聞いてごらん」と言うのと、A君、「ぼくのお母さん、お父さんとけんかして出ていかけた」とニコニコして答えた。そこで「そがんこと(そんなこと)あるもんね。みんなのお父さんお母さんもけんかするぞ(でしよう)？」けんかして、仲なおりでできる時とできん時とあるもんね。みんなのおうちでもそういう事があるかもしれんよ。もちろん先生もね。それにね、交通事故とかにあつて、お母さんがおらんごとなることもあるもんね」と答えた。離婚や片親である、という現実は大がどんなにかくしても、いざれ子どもの耳に入ってくる。子どもにわかり易く話して聞かせ、それは異常なことではない。大切なのは、その中

で、どう生きるかということだ、と話してやる必要がある。また、将来自分に絶対關係のないこと、とは言えないことを、子どもたちに考えさせたかったのである。

ある日「このプリントは必ずお母さんに見せてね」と言う
と、B君は「ぼくにはお母さんおらんもん」と言えるようになり、私も自然に「お母さんのおらん人は、おばあちゃんに見せんよ」と答えた。それをひやかす子どもはいなかった。

(3)人間らしさとは……

教員をしていると、おちんちんを見せびらかす光景を何回か経験する。十月のある日、E君がパンツを下げた。それを見た私、「おーい、みんな集まれー」。E君を取り囲む。「ほら、みんな見てごらん」とE君をサンプルにして、性器、その仕組みを説明した。E君は恥ずかしかるかと思つたが、自分のを見てにこにこよく聞いている。すると今度は、F君もパンツをぬいで、E君と並んだ。とたんに、「や、F君のおちんちん皮がむけとる？」という声がとんだ。「本当だ。あのねー、男の子は大きくなる時に皮がむけた方がいいもんね。むけそうな時はむかなんよ。でも体の皮が全部はがれることはないけんね」と言うと、大爆笑。すると、「や、O君のおちんちん立つとる」の声でまたもや大爆笑。

そこで、「みんな、どんな時おちんちんが立つね」と聞く

と、「テレビでいやらしいの見た時」「写真とかの女の人の裸を見た時」と答えてきた。「ふーん、そういうこともあるね。立つ人もいれば、立たん人もいて、おかしくないよ」と言うと、「でも、お母さんの裸見ても立たん」の一声があつた。男の子たち「そがんねー」と納得。私も（そうか、母という存在は、子どもにとって女であつて女でないものなんだなあ）と感動。子どもってすごい！

ここで、「なんでみんなパンツはくのかな」と尋ねると、「バイ菌が入らんごと」「やたらにさわられんごと」とりっぱな答えが返ってきた。「その通り。でも、もう一つ理由がある！あのね、動物は、パンツはかないでしょう。どうしてかな」「うーん、恥ずかしくないから」「そう、恥ずかしくないからだね。人間は？ 恥ずかしいからパンツはくんだよ。人間が人間らしいということは、恥ずかしいという気持を持つことだよ。だから平気で人前で裸になるということはず「恥ずかしい」という人間らしい気持がうすくなっているのかもしれないね」と話した。

以後、フルチン姿の男の子は、学級で見られなくなった。

(4)先生に赤ちゃんができた

一月に入つて（妊娠五カ月目）子どもたち、保護者に「赤ちゃんができた」ことを伝えた。つわりがひどかったので、三カ月目頃は、ほぼ毎日出していた学級だよりの発行もストッ

プ。それでピーンときた保護者の方からは、「私は生むまでつわりがあつたよ」とか、「私は前置胎盤で、こんなだった」等自分の状況を話して下さり、励まされた。

あの頃を乗りきつたのは、その励ましがあつたからだと思う。また、体育の時間や、持久走大会の時、子どもを誘導していると、走つて来て「先生、そがんことしたらあぶないよ。じつとしかんね」とうれしいお叱りを受けたこともあつた。また四月の授業参観でしつげのことを言われたおばあちゃんが電話で、「先生、妊娠しとつときは、体弱つとるけんな、風邪ひいたら学校はすぐ休まなばい。無理せんこつ」と言つて下さつた時には、思わず涙がホロリ。もちろん職員集団も遠足の時配慮して下さるし、体育はほとんど隣の学級の先生が合同でして下さつた。私は妊娠によつて、子どもや大人との間の人間関係を学んだように思う。

子どもたちへは、機会がある毎に、妊婦の気持ちを話して聞かせた。「赤ちゃんのはなし」(福音館、マリー・ホール・エッツ作)という絵本を見せながら、「今の先生のお腹の子はこんなになつてるよ」等と話して聞かせた。子どもたちは「先生は給食を、二人分食べなんけん、ミートボール八個」とか「先生、予防注射せんか? お腹の赤ちゃんに毒だけんだろ」等言つてきた。家庭訪問では、ある女の子が母親に、「先生には、炭酸はダメ、ジュースにしなさい」と言つてく

四、おわりに

様々な事を通して、私自身と保護者、子ども、先生たちとの人間関係が変わつていった。初めは大変だと頭をかかえこんだ子どもたちから、どれほど多くのことを学んだことか。ある親からは、「先生の子どもは28人、56個の目に見まもられて幸せですね」とも言われた。

子どもたちと、自然の中へ行つて「生きる力」を学ばせたかつたし、性教育の授業をすることが課題として残つたと思ふ。というのは、ある女の子は母親にこう語つたという。「先生が赤ちゃんを生むのはうれいけど、きつからうね」この言葉に自分の性を生む性としてとらえ、それ故の大変さを感じとつていふことを感じた。性を自分のもののできるような性教育について、私たちは考えていかななくてはならぬ。

産休に入つて何人かの子から手紙をもらった。もうこの子どもたちの担任になることはないけれど、個人的につきあいを長く続けていきたいと思う。やつと、この原稿を書きおえた。今、予定日まであと四日、責任をおえてホットするとともに子ども誕生が待たれてならない。

(脱稿の翌日入院、五日後に無事男児が誕生しました)。

家庭科教育の本質とは……………

——地域の特産物を生かしたすしづくりを通して——

●三重県志摩郡磯部町立磯部中学校

木下 宣子

家庭科教師として歩んだ二十数年間を、今、振り返ると、常に「家庭科教師とはなにか」「どうすることが本質に迫ることなのか」問い続けて、結局、未だになにも定まらず、年月だけが過ぎてしまったように思う。

決して、技能中心の物づくりであってはならない。「なぜ」「どうして」など、常に科学的に物ごとが考えられ、それが暮らしに根づく家庭科教育でありたい。そしてそれが、日々実践できる生徒に育てたいと……。結果的には、地域性、生徒ぬきの教えこみの家庭科教育であったように思う。その原因は、あまりにも雑多な教材を、時間的に余裕のない状態では、無理な面が多かったと、自己の研究心のなさ、力量不足等を棚上げて、勝手ないいわけをする自分がある。

そこで、学習指導要領の改訂期に際し、改めて、家庭科教育の本質を探ることにしたい。まず、同和教育の観点から、家庭科教育を考えることにする。本校は、同和地区を校区に持ち、同和教育を学校教育の中心にすえ、教育実践を行っている。家庭科の授業においても同和教育を中心にすえて実践しているが、その中で、たくさんの矛盾点を見い出す。

その一つは、男女別学についてである。家庭は女子を守るべきという伝統的性別役割分業的な考え方が、家庭科を女子のみの教科としてきた。これは、時の政府が女子づくり、家庭づくりを呼びかけ、固定的概念を位置づけ、思想の統制をしようとしたところにある。

二つ目は、教育で大切なことは、生徒一人ひとりの発達段階を見極め、それに応じた内容で、くらしに根づいた地域性を生かした教材でなければならないが、その地域性や生徒の

実態を無視しかねない教材選びでなかったらどうか。しかし、今までの指導要領では「生活に必要な技術を習得させ、それを通して、生活を明るく、豊かにするための工夫創造の能力および実践的な態度を養う」として、内容面では「〜ができる」「〜を知る」とし、具体的に指定させているところ、生活をせまくとらえさせ、社会に目を向けさせることができかねる目標であった。そのため、教師の教育活動を制限し、社会や地域へ目を向けることなく、生徒一人ひとりの個性を無視した教育になってしまっていた。

これらの点を反省し、生徒の実態、地域性を把握した上で、食物領域において、自主編成を試みた一例を紹介したい。

一、生徒の実態と考察

ここ志摩地方は、太平洋を東に、南には美しい山並みを持つリアス式地形の風光明媚な半島である。最近では、海岸沿いの各所に観光ホテル、民宿が立ち並び、年々観光客で賑わう。特に夏場は、他県からも大勢の人たちが新鮮な海の幸を食べにやってくるため、志摩の道路はパニック状態に陥る。

このような地で生まれ、育った子たちは、新鮮な海産物を豊富に取り入れた豊かな食生活に恵まれている。冠婚葬祭には、その地域性を生かした料理、特にすしがつくられ、他地域の親戚関係など親しい家に重箱に詰められ配られるが、生徒たちも、親や祖母からその作り方・味つけを、家伝として

受け継いでいるであろうと思っていた。

ところが、生徒対象に行ったアンケート結果によると、食生活に新鮮な魚貝類が意外にとり入れられていない。また、この地方の代表的な郷土料理の一つである「てこねずし」についても、家で作って食べる・買って食べると答えた生徒が半々であり、インスタント食品、レトルト食品などが一番人気があり、食卓に氾濫している実態が見られ、この地にも、時代の波が押し寄せている。

また、中学生という時期は、第二次性徴を迎え、活動範囲も、社会に対する見方も、それぞれ広くなり、大人社会への仲間入りをしはじめる時期でもある。意欲的・主体的に生活し、将来の生き方を決定する重要なこの時期に、親の手伝いをし、家族の一員として意識し、家族との対話を大切に、楽しい食生活をしていることは、人間形成上大切なことだと思う。残念なことに、そういう体験をしている生徒が減りつつある。そこには、親の労働事情もあるが、部活動終了後、せつせと塾へ通う姿がみられ、受験戦争のあおりが、食生活をおろそかにしている。これらの実態を踏まえながら授業実践を試みた。

二、実践例

(1) 単元名「郷土のすし」を取り入れた調理実習をしよう

(2) 指導計画（全六時間）

①志摩地方に伝わるすしと郷土食……

二時間

②基本的なすし飯の作り方と実験……

二時間

③地域の特産物を生かしたすしづくり……

二時間（本時二時限目）

(3)指導について

各班ごとに、志摩地方に伝わるすしと郷土食の関係と由来を、地域の方（親、祖母、隣りのお年寄り、親戚の叔母さん）に聞き、献立作成に取り組ませた。実習した各班のすしを試食しあう中で、郷土の伝統的な調理に関心を持たせ各地域には、生活に根ざした独特の郷土料理のあることを知り、それらを活用、発展させ食生活をより豊かにしようとする態度を養いたい。

(4)本時の指導目標

- ①実習した志摩地方のすしの試食を通して、調理に、より関心を持ち、郷土の伝統的な良さに気づかせる。
- ②各地域のくらしに根ざした独特な郷土

志摩の地域性を生かしたすし（2年C、D組）

班	献立名	材 料	おいしくするための工夫
1	・ひもの入り ・ちらし	・ひもの・土しょうが ・みょうが・あさつき	①ひもの（酒につける） ②土しょうが、みょうが、あさつき
2	・てこねずし	・かつお・大葉 ・紅しょうが・のり・卵	①かつお（沸とう後冷めたつけ汁につける）②大葉、紅しょうが ③のり、卵 ④つけ汁も混ぜる
3	・てこねずし	・かつお・黒ごま ・土しょうが・大葉	①かつお（2と同じ）②黒ごま ③土しょうが・大葉 ④飯にみりんかける
4	・さばちらし	・さば・溶きがらし ・土しょうが・大葉	①しめさば（塩と酢） ②土しょうが・大葉 ③溶きがらし
5	・てこねずし	・かつお・干しいたけ ・大葉・かんびょう	①かつお（しょうゆ・みりん・酒につけておく）②大葉 ③干しいたけ・かんびょうだけ飯に混ぜる
6	・まきずし ・いなりずし	・まぐろ・かんびょう ・おかか・卵・きゅうり ・三つ葉・ごま・あけ	①まぐろ、三つ葉 ②かんびょう、おかか、卵、きゅうり

「てこねずしの由来」

志摩地方の郷土料理の一種で、現在、各家庭の日常食や祭事などの行事食に、また、民宿や食堂の料理にと、広く取り入れられている。昔、漁に出ている海の男たちが、とりたてのかつおを、しょうゆにつけ、飯に混ぜ、手であらくこねたところから「手こねずし」と名づけられた。

それが、おいしかったため、各家庭でおいしく食べるための工夫がなされ、食生活にとり入れた。そのため、地域によって、かつおの扱い、材料の工夫、盛りつけ方が、それぞれ異った方法で、郷土料理として伝えられている。（2班が調べたもの）

※だしのとり方、すし飯の基本については、事前に調理実験（調理カードより）も取り入れて指導しておく。

料理について知ること、それらを応用・発展させ、食生活をより豊かにすると共に、食べ物の持つ社会的な意義・役割について考えられる生徒に育てたい。

③ 自分自身の食生活のあり方等にまで発展させたい。

(5) 指導過程

開	導	入	学習活動	指導上の留意点	準備物
・「てこねずし」 たか発表する	・おいしいすしをつくるためにどんなところを工夫したか発表する	・前時に実習したすしを試食する ・試食を終え片づける ・各班毎に実習したすしの特徴を発表する	・それぞれの班のすしの味や特徴、作り方を話し合いながら ・中央へ皿と箸をまとめる程度とする ・すしの材料、味つけの工夫。郷土食としての由来などを重点にして発表させる ・模造紙にあらかじめ書いておいた献立表で発表する	・六つの班のすしが各班に配られる ・反省プリント	・特に味、香、材料の取り合わせなどに着目させる ・「てこねずし」の由来、青じそ、ごま、土しよがうが と鮮魚について考え、地域・ハラ

三、授業結果とその考察

整理	展	明	ト
・今日の学習のまとめをする	・日本人の食生活に密着している理由を考える	・すしは古来より	・写真
・到達目標に達しているかを機間巡視により知る	・特徴的な祭ずしを紹介し保存食、材料の工夫、栄養価、多人数にも向く等のことを押さえない	① 地域の特産物を生かした ② その土地の生活が産み出したもの ③ 歴史が刻まれているもの ④ その他(①～④の補足説明)	・まとめ用プリン
		・県内、全国の郷土のすしについて知っているものがある ・知っていること ・調べてきたことを発表しあう	・浜島のたきずし ・他に志摩に伝わるすしに甲賀ずしはどんなものがあるか話し合わせる(甲賀ずし、浜島ずしなど) ・機 ・実物投影 の準備 用の用具

生徒たちは、郷土のよさを見直し、海産物についても興味をもって活用の工夫をしようと努力する姿勢がうかがえた。

例えば、次の実習「揚げ物」の際、鯰、貝柱、鰯、海苔、アオサ、海老等、海産物だけでなく、家の田畑でとれた農作物であるさつまいも、じゃがいも、大豆などが材料になった。

前回のすしづくり以上に、楽しそうだった。試食会では、アオサ、貝柱が人気があった。おばあさんに教つたものの一つだと言う。昨年までは、ちくわ、ソーセージ等、加工食品が多かったのだが、今回は、ほとんど使つた班はなかった。

この中で、失敗もあった。大豆をそのまま揚げてしまったため、固くて食べられず、大笑いとなつたことだった。これから大豆を扱うとき、そのことを思い出してくれると共に、浸水の必要性を一生忘れずにいてくれるであろう。

その後、ある生徒の一人が、手こねずしをつくり家族に食べさせたら、みんな大変喜んでくれたことを伝えてくれた。

このような生徒が一人でも多く育ってくれることを願っている。そして、今まで以上に視野を拡げた中で、食生活を考え、真剣にくらしといのちを考え、これからの人生をしつかり歩んでほしいと思う。

四、最後に

身近な生活から教材を見つけ、教材化することは、生徒はもちろん、教師自身も以前より意欲的に授業に取り組み、楽

しい授業が展開される。例えば、今回、教師自ら、地域の特産物の食品の特質をグループで研究しあったり、郷土食の研究家を招いての講習会や、その土地の古参を訪ねての研修は、非常に勉強になった。

日本食が国内外で見直されている現在、特産物を使った郷土食を取り入れ、すぐれた点を知ることが、食物学の研究をするのみでなく、地域の文化、日本の文化をも知ることができ幅広い学習へ発展するきっかけとなる。

また、加工食品について学ぶとき、その食品の特質を正確にとらえることで終わるのではなく、大量に仕出すのはなぜなのか、それを消費者として、くらしの中でどのように対処していけばよいか。対処していくためには、どう行動していけばよいかなど、真剣に考えることは、つまり、いのちとくらしを学ぶ大切な教育であり、家庭科教育の本質が、自ずと明確化するのではないだろうか。そう考えるとき、家庭科教育はありとあらゆる教育の原点であり、真の家庭科を追い求めるためにも、自主編成は必要なことである。また、男女を問わず、当然、学ばなければならない教科として強調したい。

以上、家庭科教育の本質等を述べてきたが、教育を考えるとき視点を変えてみる必要はないか、そのためにまず教師自身が変革することだと思う。そのためには、日々研修を今以上に重ねることの大切さを改めて感じた。

「お母さん、命は地球より重いつて

ホント?」

●山形県立新庄南高等学校

田村より子

一、念願の「保育」の授業が持てました

「教育は共育」とも「育児は育自」とも言われますが、子供たちって、本当に私たちの生活に活力を与えてくれますね。子供とメチャク遊ぶのが好きな私は、我が家でも特技を発揮して汗だくになって追いかけておいたり、笑いころげたりの日です。その折り折りに、子供たちのキラキラと眩しい笑顔を見ると、親冥利に尽きると自己満足したり、子供たちのお陰で生き生きとしていられると感謝したりしながら暮らしています。

そんな私が、今年家政科二年の「保育」を担当することになりました。クラスは私のホームルームクラスでもあり、俄然張り切って教材研究に熱を入れたわけ

ですが、いつも我が家の子育て奮闘記に脱線してしまいます。我が家の長女は近頃第二次反抗期を迎えているらしく、いつもイライラして、トゲトゲしい口調で言い返すことが多く、つい親子喧嘩をしてしまいます。

そんなこんなで、「非行に走ったらどうしよう」等と心を痛める時もあり、授業では「第二次反抗期は大人に成長するための切符だ」などと話していても、内心穏やかではありません。でも、私が娘や息子に一本とられた話をリアルにセリフ入りで解説しだすと、その腹だたしさが生徒たちにとって笑いの対象になり、しまいには私も相方の他愛のなさに苦笑してしまいます。そして、何だかそれほど深刻な問題ではないような気がして来て、今日帰ったら笑顔で受け容れようなどと殊勝な気持にもなるのです。高校二年生と言っても、我がクラスは幼さが残っており、いまだに第二次反抗を地でい

く生徒もおります。ですから、私の話を大声で笑いながらも、心に思い当たる生徒もいるはずで、自分たち親子の關係を第三者的に冷静に考えるキツカケにもなればいいなと思ひ、その日のまだ湯気が出ているホヤホヤの情報を、タイミングを見て話すことにしています。こんなふうに、一石二鳥を狙った私流の授業が開始されました。

我がクラス四十五名は、いや、今年の六月一人減ってしまひ、少々寂しくなつた四十四名の生徒たちは、我が校きつての明るく騒がしいクラスです。しかし、一人一人の内面に目を向けてみると、中学校で点数で輪切りにされて家政科に入つて来た生徒が多く、劣等感の裏返しにの明るさやバカはしやぎのような気がして、無性に空しくなることもあります。学方面では、数学や英語の落ち込みがひどく、既に小学校五、六年生の時点のつまづきをそのままにして、今に至つてゐる生徒もおり、落ちこぼれたのではなく落ちこぼされたこの子たちの学ぶ権利や伸びる権利を思うと、文部省の教育行政の責任に怒りを覚えずにはおれません。

また、家庭に目を転じると、農村社会に根深く残る嫁と姑との確執を目の当たりにして育つたため、嫁であつた母への不信任感を顕にする子や、逆に祖父母への憎悪をむき出しにする子。農家の機械貧乏や減反政策のため、きのこ栽培へ転作したが、失敗して、年中出稼ぎに行つてゐる父。その分お母

さんがしつかりしていてくれればよいのですが、それもできないので、担任を悩ます行動をとつてしまふ子など様々です。「保育」の授業をするに当たつて、そんな彼女たちに何をどう教えていけばよいかと、あれこれ悩みました。その結果、教科書では、どちらかというときと良き母としての心構えや、育ての具体的方法を中心に扱われているのですが、自分を含めたすべての生あるものの命の尊重と、子供たちが自分の可能性を十分伸ばして、より人間らしく育つ権利の保障という二つの点に重きを置いて指導していきたいと思います。それは、これから生まれて来る子供たち、これから育てていく子供たちのことは勿論ですが、彼女たち自身が成長過程にある自分に気付き、自育に目覚めるきっかけになればという期待もあつたのでした。今まで、テストの点数だけで差別選別されて来た彼女たちの、分らない所を分かつたとする努力すら見せなくなつてしまつた捨てばちな態度を、自分の能力を引き出す意欲へと変えていけたら、もつともっと素敵な女性になれるのにと思うと、胸がはやる思いでした。

二、子育てって、おもしろいのよ

「先生、オレ、保育の授業が楽しくつてしかたねえや」。こんなうれしい声に出合ひ、「ヤッホー」と心の中で叫びました。しかし、その喜びも束の間で、その次の言葉に生つづきを

飲んでしまいました。

「先生の話ば聞いてっど、子供欲しくなつたや」。これには私も真青になり、次に言う言葉に迷いました。そして、考えたあげく、「ありがとう。うれしいわ。子育てって本当に素敵よ。……(落ち着いて、落ち着いて)……でもね、前にも話したけれども、親になるのは簡単だけれども、良い親になるのは本当に難しいのよ。私ね、自分の子供たちには素敵な人間になって欲しいと思うから、そのためには私自身もつと素敵な生き方のできる大人にならなければいけないと思うの。今も修業の身。辛いよ、親って。いっつも子供たちに見られているんだもの」。つい先日、ピアスをつけてきては注意され、マニキュアをつけてきては注意を無視して、私の血圧を下げていた彼女ですが、根は正直で優しい子なのです。「フーン」と、うなずきながら私の目を見て真剣に聞いています。

「そう言えば、私も高校時代にそんな気がしたもののよ。高校生と言えば親になるための助走の時期でしょ。自分を磨くには今しかないよ、本を読んだり、他人の嫌がる仕事を進んで引き受けたりのよ。そして、親になってみて、良い親であろうといつも努力しているつもりでも、反省することだらけなのよ。いっつも子供たちの心を思いやっていたかな、と自問自答すると、結構自分勝手な事があつたりして、ちつと

も良い親じゃないわけよね。……(この辺まで来ると私も平静を取り戻している)……簡単に赤ちゃんが欲しいなんて言わないで、今は、素敵な人間になるための修業を積んで欲しいな」
身を乗り出して話す私に、「いやだな先生、すぐ先生はそういうふうに見えるんだから。心配しないでよ。こう見えてもオレ結構しっかりしてんだぜ」と、いやはや彼女は私の取り越し苦労をすっかり見抜いていたのでした。つい、性非行に対する布石を考える所は、自分の中に解放されていない性の影を見て深く反省してしまいます。そして、「ごめん」と舌を出し、照れ隠しに、「今話した事は真面目な話よ。でも、やっぱり子育てっておもしろいわよ」。自分でもわけが分からないことを言ってしまうました。そんな私に、「先生、また美紀ちゃん達の話してな」、「先生、ありがとう」この言葉には胸がキューンと痛くなりました。もちろんうれし涙のおまけもついてですが。

三、愛と性

本来自然なはずの性も、いかに取り上げようかと考えてみると、すごく難しく感じます。一番大切にしたいところだけに、あれこれ迷いましたが、ここは読書会形式にし、ビデオ教材も取り入れて、あまり定義立てしないでいいこうと思いましたが、読書会用の本も数冊図書館から選んできましたが、結

局、「愛と性の十字路」と、「悲しみの性」の二冊を選びました。それらの中から数ページを選んで印刷し、綴じて各人に与えました。その結果、「悲しみの性」の中の女性が性のほけ口として扱われている事例に対する反応が強く、これに対する意見が多く出されました。そして、「愛と性の十字路」の「女性は女性の体を大切にせよ、女性は女性の体に責任を持って。男性は女性の体を大切にせよ、男性は女性の体に責任を持って」と言う言葉に対する共感の意見もよく出て、「相手を思う思いやりを大切に、平等な人格と人格が尊敬し合う中で生まれた愛を将来きつと育てて欲しい」と、私の期待でしめくりました。五月の連休中に、一人の生徒の恋の逃避行があっただけに、力のこもるのも無理ありません。彼女は普段は目立たなく、優しく素直な生徒だっただけに、寝耳に水で、本当にショックでした。その後、家にもどってきて登校せず、私が訪問して話をしても全く心を閉ざして、「学校をやめて働く」の一点張りです。しかし、よくよく話を聞いてみると、やめた後の二人の見通しは全くただ二人で一緒にいたい一心の行動なのです。私も彼女の気持ちを理解しようと努力はしてみたのですが、時が過ぎ冷静に考えることができるようになった時に、彼女の立場が悪くなるのではないかと思うと、何とか高校を続けるよう説得し続けることしかできませんでした。

しかし結局、彼女の心を学校に向けることはできず二カ月余りの説得の末のことですので、自分の無力さに落胆しきっていた私に、別の生徒の登校拒否カウンセリングをお願いしていた八幡町立病院の中原先生は、静かな物腰で、「あなたは何もしてやれなかったのではなく、彼女をやめさせてやっただけではないですか」と慰めて下さいました。そんな折りの授業ですから、狭い学校の価値観に知らず知らずのうちに染まっていた自分に反省しながら、もっとおおらかに性を見つめようと、生徒以上に学ばせられた私でした。

四、生命の誕生

我が家の子供たち、特に中学一年と小学五年生の娘たちは、私と夫の出会いや結婚式や出産の様子をよく聞きたがります。夫と小学一年生の息子の目を盗んでは、女三人の秘密の時間を持つのですが、そんな時、歯が浮くようなことも不思議に自然に語れます。

今やテレビやマンガに性が露骨に氾濫していますが、我が家の子供たちも例に漏れず、興味津々のようです。ですから、将来、性を興味本位にもてあそんだり、ゆがんだ性の觀念を持つたりしないようにと、子供たちの成長を考えながらも少しずつ自然な形で性を語っていきたいなと思っています。

こんな私の母親としての気持を、授業の合い間に生徒に話

します。子供たちの反応もあとで叱られない程度に話すのですが、それでもきつと叱られてしまいそうです。

生命を生む苦しみと感動は子供たちにも生徒たちにも伝えたい経験です。くり返しくり返し命の大切さを語ってあげば、少なくとも自分の手で自分の命を消したり、他人の命を傷つけたりはしまいと思うので、いろんな機会をとらえて話します。時には秘密の時間で、時には祖父母を混じえた食卓の場で。そんな時、息子がいきなり、「お母さん、命って、地球より重いんだぜねや」と言うではありませんか。「さすが我が息子。日頃の教育の賜物」と思いきや、「ほんて地球より重いなが？ ほだい重いごんたら、地球、重だぐて宇宙の下さ落ぢでいくべや」と言うではありませんか。結局、分かっているはいなかったのですね。それを生徒に話したら、大爆笑でした。それは、そうした抽象的な表現をしつかり理解してくれた笑いでもあり、命の大切さを笑いで共有した時間でした。

そんな時、タイミングよく、NHKの特別番組「驚異の小宇宙、人体」が放映されました。第一回目の「生命の誕生」のビデオを見せたところ、大変な感動を受け、びっちり感想文を書いてきました。他のクラスでもこれを見せ、感想文を書かせたものから、言葉を拾ってつなげたら素敵な詩になったと、我が校の国語科の大滝十二郎先生が見せて下さいました。感激の二乗を経験し、幸せいっぱい私です。

海は心の母

そこは原始の海
卵子に向って泳ぐ
三億の精子の中で
ひとつだけ選ばれて生命となる
それは私

生命の大切さを知った

「感動的な受精の瞬間」では
思わず涙が出そうになった
受精してから20日で
お母さんの胎内で
子供の心臓が動き出すなんて
生命の神秘

三億分の一人と考えると

自殺なんてできない

海は心の母

人類の母だということを

実感した

人間の一生は

地球の流れからみれば

短くはかない

しかし

強く今を生きる生命

母親になるために

自分の体を守ることが

大切だとわかった

だからタバコは 一生すわない

グリーンピース日本連絡事務所

〈関 裕子〉

大気や海洋の汚染は止めようのないものなのでしようか？野生動物を殺すのは、止むを得ないことなのでしようか？地球上すべての生命を危険にさらす核はどうしても必要なのでしょうか？『グリーンピース』と一緒に考えませんか？『グリーンピース』は、私達の大切な地球が、政府や企業によつて乱用されていることに対する疑問から生まれました。一九七〇年のことです。

それ以来、この運動は、全世界22カ国に広がり、会員数は二五〇万人を越えています。どの政党、企業からも援助を受けず、国際的なキャンペーンはすべて、各国支部への寄付・会費・商品売上げでまかなわれています。

活動の三本柱は、海洋生態系保護、反核、反有害物質キャンペーンで、それぞれの分野で「平和的手段による、非暴力直接行動」を行っています。

グリーンピース日本連絡事務所は、この国際的環境団体の日本における窓口です。どうぞ私達の活動を御支援下さい。また、環境全般にわたる資料、ビデオなども御利用下さい。(年会費 三千元。季刊誌のみ 二千元。隔週ニュースレター 年三千元。季刊誌・週報込みの会費 五千元)

連絡先 〒170 東京都豊島区東池袋1-31-2-302

☎ 03-5992-6233

自己紹介—ぶるぐりぐり

日本ネグロスキャンペーン委員会

〈幕田恵美子〉

「世界的な砂糖不況により深刻な経済危機に陥ったネグロス島の子どもたちに生きる力を！」をキャッチフレーズに、一九八六年二月、日本ネグロス・キャンペーン委員会が設立されました。日本各地のネットワークを基点に、具体的な支援をするための募金活動と同時にネグロスの人びとや状況を理解し対等な関係づくりをめざした活動を展開しています。

ネグロス現地では、まず現実に危機に瀕している人びとへの緊急救援活動の支援、次に危機から脱した人びとの生計を立て直すための復興プロジェクト(米や野菜等の生産や家畜の共同飼育等)支援。さらに砂糖労働者から自らの食物を生産する農民となるための農業研修センター支援を行っています。ツプラン農業研修センターでは日本からの適正技術専門家や有機農業者らによる技術協力・交流も始まっています。

キャンペーン委員会では、ネグロスでの活動支援のための募金、そして国内活動を支えていただくための賛同人、ツプラン研修農場を支えていただくためのツプラン会員(各年間五千元)、そしてキャンペーン活動を通して様々な事を学び交流していこうという場としての会報/ハリーナの購読者(年間三千元)を募っています。

連絡先 〒162 東京都新宿区新小川町1-19

☎03-269-4821 〒振替/東京7-145245

家族と家庭科

■酒井はるみ

女性の解放と家庭科

マッカーサーは、一九四五年十月十一日に、憲法の自由主義化と人権確保の五大改革を幣原首相に要求したが、この五大改革の筆頭に婦人解放が位置づけられていた。

また女性の教育については、戦後教育改革のもととなった『第一次米国教育使節団報告書』のなかで、あらゆる教育機会が男女に均等に保障されることを強調していた。

これらによって、新しい法律は、個人の尊厳を保障し、法の下での男女平等を実に多くの面において実現した点で、一九四〇年代後半当時、男女平等について世界で最も進歩的な内容をもつという評価も受けていたのである。

一方、「家」制度を廃止したあとに、近代家族を理念とする家族制度がとり入れられた。

近代家族は、夫と妻の人格の平等と「男は外、女は内」という明確な性別役割分業（性役割）を特徴とする家族で、夫婦の人格の平等と性役割は矛盾するものではないと考えられていた。当時は、労働市場へのリクルートは男性と若い女性に限られていたので、勤労者家族の場合、近代家族理念と家族の実態はかなり一致していたのである。

さて、教育の機会均等と、夫婦が協力して家族生活を営むという近代家族の理念をふまえて、小学校家庭科は男女共学、中学校家庭科は男女とも選択となった。このこと自体、きわめて進歩的である。だが、それは建前でしかなかった。当時文部省で家庭科の担当官をしていた重松伊八郎の論理はつぎのようであった。

男女の教育の機会均等がはばまれていた不合理を是正し、男子と同等の教育を受けさせよう、男子以上の負担をさせまいとすると、主婦たり母たる修練はどこでやったらいいか。この家庭の実務の修練が、一般大部分の女子にとって必要なものであるという事情は、日本でも西洋でも同じことである。民主家庭になったからといって、こんな事情までがひっくり返ってしまうはずはない。それでは男子

の何の時間を見合いにしておけばよいか。

この理由によって、この理由のみによって、家庭科が職業科の一に居るのである。つまり職業的教育のためにではなく、単に、実業諸科を見返りとして男女授業時間の均衡を保たせてあるに過ぎない。

『新しい導き方 家庭科概説』48年)

家庭科を女子教科と限らない、選択だとしつつも、性別役割にもとづく女性の役割遂行は教育の機会均等よりも優先されていた。家庭生活は男女ともにあるのだから「男女共学の形態で学習されることが望ましい」と述べながら、実際には、結局主婦準備教育としての家庭科に女子をとりこむことになつてしまふのである。

しかし反面、家庭科を女子教科とすることによって、女子にむけて女性の解放を語ることもできた。

高校に「家族」という教科が設置されたが、そのなかに「單元6 仕事に成功するには」が含まれている。教科書の記述をみてみよう。

職業は婦人を聡明にする。(略) ……知性がみがかれ、頭がよく働き、…世の中に対する知識、常識などが発達する。…仕事に当る誠実さ、真剣さが人格を高め、生き生き

とした深みを感じさせる。人形のようなしとやかさは、生存競争の激しい時代に生きる婦人に対して望むことは無理であるかも知れない。

『家族』中教出版49年)

続いて、生活の安定向上のために、主婦も働く工夫が必要であり、またそれが社会に寄与することにもなると述べている。

ここには、伝統的性別役割分業を切り崩す妻の就労が肯定的に導入されているのである。職業選択については、中学校社会科でもとりあげていたが、女性の就労について特別に記述されるようなことはなかった。女子教科であるが故に、女性の職業選択について特にとりあげることができたことを示している。

当時の家庭科は、女性を主婦として家族に位置づける面を強く押し出していたとはいえず、女性の就労の例のように、別の面で、女性の解放を促す面ももっていた。女子教科という家庭科のもつ二面性である。

親子論と心理学

人間の解放とは

—読者への手紙—



小沢牧子

(カッタ・井田裕子)

大澤和子さん

Weの夏、そしてそれぞれの夏が過ぎて、風のいろが変わり、やさしい秋がおとずれます。お元気におすごしでしょうか。

We 六月号に、あなたがこの連載に向けて投書をお寄せになつてから、心ならずも長いときが過ぎてしまいました。あなたの問いかけを心にあたためながら、どんな形でそれにおこたえしようかと、さがしていたのです。

先日のこと、夏の太陽がまぶしいある午後、ウイ書房であなたにお目にかかり、ゆっくりとお話する機会を得ました。ぜひお訪ねしたいとねがっていたウイ書房、そこで若い大学院生のあなたと、半田たつ子さん、編集部の高橋恭子さんの

四人で、あなたの問いに共にじっくりと向きあい、それぞれの考えや体験を語りあうことができたのは、忘れがたいよるこびです。思いを深められ、心やすらぐ、うれしい時間でした。あなたの問いかけをきっかけに考えることができたさまざまなことを、今回この誌面をお借りして、読者のかたがたと共有したいと思います。

六月号の投稿欄「わたくしからあなたに」で、大澤さんは次のように書いていらつしやいます。

「……連載をとてましたのしみにしています。第一回目に『親子論に位置する心理学のすがたやその社会的機能を批判的にとらえるというテーマで』とありました。それはそれでとても楽しみなのですが、一方で、心理学という学問のもつ可能性、役割、そういうものもあるんじゃないだろうか、と私は思うのですが、小沢さんはその点についてどういう風にお考えでいらつしやるのでしょうか。……」

そう、同感です、と共感なざる読者が、きつとたくさんいらつしやるにちがいない、おこたえしなければと思います。

心理学、とくに臨床心理学を学びはじめた若い日々、私は心理学を人間解放の学問と考え、それを期待していました。心理検査、カウンセリング、発達理論、家族関係論……、学ぶことは多く、知を蓄積し技を習得することは、よろこびで

もありました。歴史のなかで積み重ねられた「知」とよばれるもの、その体系を学び吸収することは、たしかに楽しかったのです。

しかしその専門性を、自分の生活者としての感性や、ただの親としての視点からとらえるとき、とまどいや疑問にさらされるが多かった。何がほんとうのことなのかを見きわめようとするなら、専門学の側でなく、ただの親としてあたりまえの生活者の側に眼を置こうとしなければならぬのは、必然でした。なぜなら、それは肩書きや権力をもたない側だからです。

いまでも相かわらず、私は専門家とよばれるところにありますから、矛盾だらけの言い方であるのは承知ですが、できる限り生活者としての自分の足もとを大切にしながら、心理学、科学、そして学問をとらえなおしてゆきたいとねがっています。その模索については、ことしのWe六月号、「私の迷いと歩みのなかから」に書いた通りです。

人間は多様な人びとに豊かにつながっていれば、生きていきやすいのだと思います。きしみやわずらわしさはあっても、しなやかな知恵や支えあいがあるに伴います。子どもの自然な育ちがそこにあり、見守られる死があります。人と人のかかわりについての知恵や、成りゆきに耐える力がいやお

うなしに育てられます。それはいわば、人の生きる力なのでしよう。

人が「個の自由」を得、それとひきかえに「孤独という見返り」にさいなまれるこの時代、弱者はことさらに生きにくい社会です。競争にさらされるなかで、心身の疲れは、大人にも子どもにもつもります。

歩けなくなり立てなくなつたとき、心理学の知や技が役に立つことがないとは思いません。応急処置としての役割を、たとえばカウンセリングの技術はたしかに持っています。それは、いわば人を傷めない技術です。もちろんそれは、大事なものです。親子関係のもつれを解く助けをすることもありますが、その事実を否定しようとは思いません。

でも、つらい気分にある人の話をじつと聴きながら、共に傍らにあることは、ふつうの人びとが暮らしのなかに抱え得た知や力であったはずだと思います。苦しむ本人個人の問題としてではなく、仲間を支える倫理の問題として。

大澤さん、あなたのひたむきな眼差しを思いおこしながら、またゆっくりお話ししたいとねがっています。心理学は個がたたかう時代の産物であり、競争に息づまる社会をソフトな姿で補完している学問だと、私には思えてなりません。

「解放の心理学」ではなく、「心理学からの解放」について、私はいま考えようとしているのです。

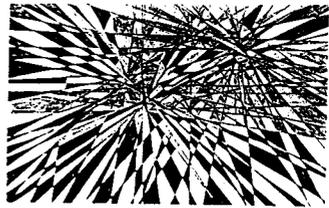
海の輝く日

多く朝の歌

(その2)

佐藤通雅

(カットも)



朝の私の日課はこうです。早晩に目が覚めます。すぐ目がパッチリというわけにはいきません。頭の中がボワーンとしています。そこで二十分ぐらい編み物をして、ボワーンとしてきた頃運動に出かけます。出勤前の一時間、走ったり、歩いたり、寝ころんだりします。多くの家はいまだシーンと寝静まっています。わずかに動き出している所もありません。新聞販売店です。一日への歯車がまだ充分かみあっていない、しかしやっと一つだけかみあいはじめた、そういう時間帯です。この一時間にずいぶんいっぱいものを見てきたなあと思います。昼間や夜ではけつして見ることできないものたち。もっとも朝型の私は、夜、とりわけ深夜の味を知りません。九時以降のテレビもほとんど見ないので、世の中

の半分は知らないといってもいいのです。ですから朝だけがすばらしいんだという気はありません。ただ私のやり方で見たもの、それを今回は点描してみようと思うだけです。

四時半から五時は、冬期間はまだ深い闇です。道路も霜で凍てついています。身ぶるいするほどの冷気にせめたてられながら走ります。やがて体がほてり、空気の中に解きほぐされていきます。私は四季の中で、この厳しい期間が一番好きです。天空には一面に星が散りばめられています。仙台もしだいに都会化し、夜の明りも増えてきたので、見える星の数は逆にどんどん減ってきました。でも早晩には再びよみがえり、かくまで生き生きと光を放つのです。冷気の中にほてりはじめた自分、空を仰いで走っていると星が降るような、星にまみれるような気がしてきます。この感じ——。何と表現したらいいだろうと考えをめぐらしました。どうもうまいことばが出てきません。星についてのことはなら色々あります。歌人の山中智恵子さんは星の好きな人で、著書に『星暦』『星醒記』『星肆』などの題をつけているほどです。これらの本にはさらに「星夜」「星物語」「驛星」「星鬼」「星城」「星の匂ひ」「星屑」「星年代記」「金星蝕」「星と剣」などの章を散りばめていますから、星好きぶりがうかがえます。ところで私の「この感じ」は見当たりません。辞典もあれこれ探したのですが、これだと思いのがありません。

こうして何年間か、あれでもないこれでもないと考えてきました。時がめぐって夜明けの遅い季節になるとまたまた……。時々、ほとんどどうでもいいこんなことにこだわるのが私のくせです。ある朝ふと、ピタリと来ることはがやってきました。

「星浴び」

です。なあんだと思うほどのシンプルなことばですけど。本当ははじめに浮かんたのは「星浴せきよく」でした。でも性欲をイメージしてしまうので、星浴びということにしました。この程度の語彙ならどこかあるんじゃないかと、またまた執拗に探しましたが、今のところ見つかりません。

さて、こうして星を浴びつつ走っていると、東方の闇がゆるみ出し、黄薔薇のようなあざやかさが広がります。そこに朱の色がにじみ、ついには暁闇が西へ西へと追いやられます。この瞬間の表現も考えましたが、すんなりと、

「硬質の夜明け」

または、

「硬貨の夜明け」

におちつきました。

榴ヶ岡公園に着くと、何人かの早起き族がもう活動しています。この公園は、昔練兵場になっていた所ですが、美しく整備して一般に開放しています。広々としたトラックがあ

り、季節が来ると梅や桜、つつじが咲きます。朗々と詩を吟じている人がいます。足の不自由なお年寄りが娘さんにかかえられながら歩いています。犬と走る人もいます。鳩にえさをやる人、太極拳をはじめの人、民謡調の歌をうたい踊りながら、節々で「ヤッホー」と叫ぶグループ。毎朝欠かさず、ほうきとちりとりを持って、ごみ拾いをするおじさんもいます。私はといえば、トラックを軽く走りまたは歩き、柔軟体操をして、それからゴロンと寝ころがって朝雲を堪能します。

一人ひとりが好き勝手なことをやっているのです。それでいて、ちっとも不自然ではない。ばらばらでいて調和しているのです。「これでいいんだよなあ」と、ある日私はつぶやきました。自分の思うように、やりたいようにやる、しかも誰からもとがめられない……。

もっと若い頃、私は汗みずくになるほど走り込んでいました。その時はまわりがよく見えています。馬力も衰えてきた今、自分の体に耳を傾けて走るようになりました。そうやってはじめて周辺が見えてきました。体でつつ走るといふより、体を自然の中に解き放つ気息も覚えてきたのです。年を重ねるとは、こういうことだなと、ひそかに考えています。一時間のトレーニングを終え、食事をとり、いよいよ出勤です。

広がるネットワーク

● 平井 雷太

「病気のおかげで、
凄味のある音楽
になりました」

—ピアニスト・神谷郁代さん
を訪ねて—

そして、明晰な頭脳による力強い演奏」と高く評価されています。昨年は芸術祭賞を受賞。現代の日本を代表するピアニストとして世界的に活躍中。

平井 ピアノを始めたのはいつからですか？

神谷 私は小さい時から、体が弱かったもので幼稚園に行けなかったんですね。よくひきつけを起こして、ぐったりして紫色になっちゃう。それがあんまり頻繁だったもので、心配して医者に行くと、これはもしかしたらお医者さんが慰めの意味で、「こういう子は、絵とか音楽に敏感で才能のある子がいるから、がっかりしないで楽しみに育てなさい」と言われたらしいんです。

平井 それが五つくらいの時？

神谷 そうそう。もしかしたら才能があるのかな、とか親の欲目だったのかもしれないけど、それで先生について始めたんです。それで、十歳の時には毎日学生コンクールを受けたんですね。最年少で。課題曲がベートーヴェンの悲愴ソナタでした。その時は予選を通して、本選の時はダメでした。

それで翌年また受けたいんですけどね、その時の審査員の中に、後に私の先生になった井口愛子先生がいらしたんです。その時は、井口先生につくななんて思ってもいなかったんですけれど、運命かどうか、その二年後に先生のところに伺

毎月一回、文京区で開催されている（社団法人）整体協会の活元会で時折お目にかかる方に神谷郁代さんがいます。神谷さんのことは演奏会のパンフレットには、次のように紹介されています。

一九七二年ベルギーのエリーザベト国際音楽コンクールに入賞後、ヨーロッパ各地での演奏活動のあと、ロンドンにデビュー。「豊かな音楽性、冴えたテクニク、強い精神力、

うチャンスがありました。

平井 その時が中学一年ですか？

神谷 そうですね。それで先生の前で何曲か弾いたら、どういうわけかすごく気に入られて、「これも弾いてごらん、あれも弾いてごらん」と言われましてね。その時思ったことは、先生に「この音は違う」と注意されたら、一回で直せるかどうかが才能のバロメーターだと思いました。

井口先生から、「基本が大事だ」ということはよく言われました。だいたい四の指（薬指）は弱いでし、これだつて練習しなければだめ。親指は他の四本の指とついている場所が違いますから、同じように動かすというのはなみ大抵のことではないんですよ。基本というのは、始まった時から死ぬまで基本ですからね。

平井 基本練習はどのようにやるのですか？

神谷 弱い指をとり出してそれだけを一時間練習するということがあるんですが、とにかくまず指を強くするというのと。それから、身体を音楽を弾くような身体にするというのも基本練習でしょう。力を抜いたり入れたり、スポーツと同じで、力が抜けない方がいい音は出ないわけです。

例えば三時間弾くのであれば一時間は基本練習をすべきですね。基本練習をみっちりしておくとな、崩れないんですよ。だから、私も今でも基本練習ですよ。

平井 学校に行きながら、練習していたわけですね？

神谷 うちの父は学校の先生だったんですけど、人間そんなにいろいろなことはできないから、勉強は学校の中だけでやるように言われました。私の才能は音楽の方にあるのがわかったから、後はもうピアノの方に精力を傾けていいという教育方針でしたね。

平井 親がピアノを無理矢理やらせるようなことはなかったのですか？

神谷 なかったですね。そんなことしてもダメですよ。誰だって練習はいや。でも、そこで努力できる人というのは才能があるんです。

平井 神谷さんは練習が苦痛ではなかった？

神谷 けっこう面白いんですよ。だって、それをするとな、果があるんですよ。私は自分でも上手になりましたし、やめなかったのはね、練習すると効果が上がったからでしょうね。それがやっても全然効果が上がらなければ、もうちょっと練習も苦痛だったでしょうけど。

平井 ピアノでの悩みっていろいろはないのですか？

神谷 ありますね。実は去年ね、珍しく体調が一般に良くなかったというのかな。

去年はずっと大変だったんですよ。息が入らなくて。ハアハア言っちゃってね。一年半くらいになりますけれど、かな

り苦しかったですよ。苦しかったんですけど、コンサートは一回もやめてないんです。ひどい時は二十段くらいの階段でも、途中で一息いれないと息が切れちゃってということがありました。もう、とにかくひどかった。

でもね、病気をもっといいことに利用したんですよ。何しろ動けない、今までサツサツと行けたところもゆっくり行かないといけないし、小さい声しか出ないし。その時に、そういうことは悪いことばかりだろうかと思っただらね、いい点もあつたんですよ。

実際、この前の春に九州でNHKのFMクラシックコンサートの公開録音があつて、その録音がつい一週間前に放送になつたんです。そして、NHKのプロデューサーに「これはどういうことですか」と言われて、私もびっくりしたんですが、なんか凄味のある音楽になつてたんですよ。

いつも元氣一杯に弾いていたでしょ。弾くのが当たり前前で、身体の中がどうなっているかサツパリわかつていなかつたのね。もう、いつだつて余裕があつた。

でも、今度初めてわかつたの。こんなに呼吸して内臓を使つていたのかと。ちよつと肘をあげるとかいうことにこんな身体を使つているかと思つたんです。

しかし、今度は病氣でしょ。もう弾くので精一杯で、よけいなことは何も考えられなくて、ドレスを何色にしようかと

か、お客さんにどんな人が来ているかとかに気がまわらなくて、とにかく弾くだけで精一杯。

そうなるのかえつていい音楽が出てくるということがわかつたの。人間なんてそんなものですよ。

平井 いい音楽になつた？

神谷 いい音楽というか、集中すれば人間いいものが出てくるでしょ。それが元氣な時は、注意が少し散漫になるらしいのね。

平井 音が違うんですか？

神谷 〃氣〃から何から違う、全く違う音楽になつていました。それで、その時にわかつたわけ。昔からヨーロッパでも病氣がちな人がいて、早死にした人もいたけれど、そういう人に名演奏家が多かつたのは、これだなと思つたの。

そうか、それで本当に苦しい思いをしながら、その演奏をしていけば、弾くのに集中していけるから、もつと凄味のあるものになる。だから、病氣というか、こういう経過というのも悪いものじゃないんだと思ひましたね。

本当は、それを元氣な時にも同じ氣持ちでやればいんですよけど、人間ってなかなかそういきません。

でも、ずいぶんこれで一年半くらい努力しましたから、今後少し音楽が違ってくるんじゃないかと思つているんですよ。

(6) 入籍ごっこ

私のところは未入籍コンビなの。何十年所有してきた姓をどっちかが捨てるのはヘンやね、ってことで話し合って止めたんやね。素朴な疑問とは案外根性あるものなんよ。フフフ。

もしかしたら「愛する人の姓になりたいワ」とか言う化石みたいな女が今でもいるかも知れないけど、男がそう言うのをまだ聞いたことがないから、そんな女がいたとしてもたぶんそれは自分で自分を無意識にせよ騙してるのね。それとも男に騙されているのかな？ はっきり言うて、現行の婚姻制度はりっぱな差別構造だわさ。入籍した時点で差別はその人の中で容認されてしまうと思うんやね。後で騙されたってわめても、その苦勞は自分でしよい込むしかないわさ。

それでね、私が未入籍コンビだと知ると、入籍やってる人から心配されることがあるのやね。「子供が私生児になったらかわいそうですよ。無責任だ」って。私らは子供がいず、私生児も私達生児（入籍親の子供は、きつとそう呼ぶのやろうね）も選択してへんから直接は関係ないけど、へ

あっちゃ こっちゃ フフフ

田中正彦

んなこと言うなと思う。ヘンなこと言うから訊き返すわけ。

「へえ。んじや、あなたは、私生児産んだらきつと差別されてかわいそうだから、将来の愛の結晶のために入籍しようと言うようなことを二人で話し合って決めたの？」って。まあ、そうやないのね。まずそんなこと二人で話し合ったりしてないの。話し合うなら、当然、「この国では一応どっちの籍に入ってもいい自由があるから、どっちがどっちの籍に入るうか。ジャンケンで決める？ あみだにする？」の議論がある筈だけど、んなこと考えてもいない。当たり前前みたいに、籍は男のにするのやね。つまり、その時、ナンモ考えてないの。ナンモ考えないで、そのまま幸せとかに流れて、入籍して、後に入籍夫婦の子供が出来ただけなのに、自慢することやないのね。けど、それだけなのに、大きい顔して、「私生児産むのは、無責任」って説教するの。フシギ。

それが差別なのね。それが差別を産むのにね。なのに、自分は差別意識なくて、差別されるかもしれない私生児を心配してあげているつもり。ヘンなの。何故やろう？ 単に暇潰しなのかしら？

生活美術を愛するマジヤール人民芸の中でも、ハンガリー刺繍は特に魅力的。地域ごとに個性的な三十余の様式がある。それは多様化を尊重するフランス刺繍の対極で、様式の完成度は「日本の歌舞伎と同様」ほとんど完璧に達し、新たな創意よりも伝統の継承に精力が費やされるといふ。マジヤールの村々がハンガリー・ルーマニア・チェコ・ユーゴ等に分割された現在は、伝統文化の保全が民族のアイデンティティの鍵とされている。

特に、ルーマニア北半部のトランシルバニアは九世紀以来のマジヤール人定住地で、ハンガリー刺繍の五つの典型をふくむ民族文化のふるさと。いわば日本の飛鳥にもあたる思い入れがある。そのトランシルバニアでの文化財破壊と人権侵害について、'89年3月の国連人権委はスエーデン提議の実情調査決議を可決したが、ルーマニアは内政干渉を理由に調査を拒否し、外国通信社特派員を開放して情報鎖国状態をつくりだしている。

問題の発端はマジヤール語の禁止や信仰の自由の制限等をふくむ「ルーマニア化」政策の進行。特に'88年春以来の「地域整備計画」の強行による七千の村々の地あげ・地ならし、マジヤール系や

森の かなた



■村田直文

ドイツ系住民二百万人の粗悪な新設集合住宅への強制移転、中世以来の民家・教会・墓地・城館等人類共同の遺産たるべき生活文化財のブルドーザーによる潰滅が痛ましい。強権支配につきものの支配者層の腐敗や、御用史観による歴史の捏造も問題。この間の亡命難民はすでに五万人、その中には15%のルーマニア人もふくまれている。

同化や開発の悲劇は、カンプチアアのポルボト派の蛮行や中国の文化大革命でも記憶に新しい。イギリス化によるケルト系村落破壊やウエルシュ語ゲール語の抑圧、スペイン化によるインディオ文化やバスク語カタラン語文化圏の問題もある。日本の皇民化政策の犯罪は、アイヌや沖縄や韓国朝鮮の被害として語られることが多いが、本土内各地の方言・民俗等の制圧を伴って強行された事実もある。現代日本の産業開発は自然と文化の新たな破壊を進め、日の丸君が代の文教政策は新たな同化を進めている。

トランシルバニアという地名はエルデーイというマジヤール語のラテン語化で「森のかなた」の意。森のかなたを見失わないために、私たち自身の足元を見直すことも求められる。

さて、保育が始まると大騒ぎ。準備期間中に子ども同士で遊んでいたはずですが、母親の傍を離れない子、泣いている子知らん顔で一人遊びをしている子などみんなバラバラです。

朝の挨拶も思うようにできないし、名まえを呼んでも、家では返事ができても保育者に呼ばれて返事ができるようにするのは大変なことでした。まして、母親が

少な目に作った弁当でさえ、みんなと一緒に全部食べるなんて、至難の業に近いことでした。それでも保育者達は意欲に燃えて「初めのうちは仕方ないね」と言いあいました。だんご作り、クッキー作り、絵かき、散歩、つなひき、読みきかせ、紙芝居と張り切る母親達の工夫の数々に喜ぶ子どもも多いけれど、みんなで何かをしたり、楽しむ状況ではないのです。遊び仲間や友達なんてこの子ども達にはまだ必要ではなかったのかしら、と

いう思いが頭をかすめます。泣くことの多い子どもの母親は、「子どもがかわいそう。子どもがいやがるんだもの」と幼児クラブを続けることを悩みはじめたのです。そんなすきま風が入る頃、子ども達の様子が変わってきました。泣く子が少なくなり、友達の名を呼ぶようになり、休ん

幼児クラブを始めてみたら

①子どもってわからない



●佐多和子

だ子を氣遣い、泣く子がいれば心配し、保育者を呼びにいく子どもでできたのです。友達と遊ぶことが当然のようになり、大きな子の真似をして返事をしたり、隣の子につられてお弁当を全部食べる子ども増えてきたのです。そしたらみんなであることがとつても楽しくなってきました。あんなに泣いたり

いやがっていた子が熱をだしても休みたがらなかつたり、保育が終わっても家に帰ろうとしなかつたりするのです。

半年から一年ぐらい過ぎた頃に、母親達は「あれが仲間作りの時期だったのね」とやつとわかるようになりました。そして、子ども達の「泣き」も決して拒否の印だけではなくて心魅かれる印でもあることを知ったのです。だって、そのあとだって「いやだ、いやだ」と大騒ぎしてプールに入った子が、帰りには「あつ、おもしろかった」とケロッツとして言

ったり、目の前に出された蛙を「近づけないで」と泣きそうな顔をしつつ、そつと触ろうとする子ども達を何度もみましたから。それでも、子どもの「泣き」に大人は弱く、涙の裏の要求をつかむことは、にわか保育者にはなかなか難しいものなのです。

(カット・加藤友子)

高遠高校での共学

その5

KNOW
HOW
共学
家庭科

湯沢静江

一九七三年の四月から、共学「家庭一般」を一年生に始めて、一学期が終わったころ、教育文化会議に依頼されて書いた文章がある。家族の歴史や、家族関係の分野を扱ったまとめの一部である。十数年を経て、現況とそれほど変わっていないように思う。

教授者側の力量不足もあって、用意した教材に必ずしもくいつき方はよくない。そこで、できるだけ身近かにある教材をとりあげることにし、生徒の両親に共働きの多いことから、現在、母親が会社や工場で働いていることの意味について考えさせることにした。母親が働いている理由については、次から次へと十ぐらいの項目があがった。たとえば、子どもが大きくなって手がかからなくなったとか、物価が高いからとか、農業をやるより勤めに出た方が収入が多いとか——その中に、社会的な仕事をもつことによるこびというの也被げられていた。それらを確認しあつたうえで、さらに、男子には将来の妻が職業を持つことについ

て、女子には結婚してからの職業についてグループ討議をさせた。農業や、商業などの自家営業の場合なども考慮に入れて討論をさせる必要があると思つたが、共働きの問題をより顕現化させるために範囲をしばつた。グループ討議の結果は、経済的に困らないのなら女の人は家にいる方がよいというのが男女を問わずかなりの数にのぼつた。「女が家にいなければ都合が悪い」「女、子どもに働かせたのでは男の恥だ」という男子もいる。てれくささもあつてそう言つてみただけということが言えなくもないが、「K君の家では、お母さんが働いてると言つてたけれど、それでは、お父さんは男の恥をさらしてゐるの？」と聞き返すと、頭をかかえてニヤニヤしてゐる。生活的でないというか、観念的というか、とにかく、全体的にはもう一つふみこんだ思考力がついていないという感じが強い。母子家庭ならどうするのか、経済的に貧しかったら、妻を働かせてもいいのか、その時、幼い子どもはどうなるのか、女性が職業（特に専門職といわれているような）を途中でやめるといふことは、職業の側や賃金の側からみてどうなのか、という思考はされていない。今後そういう、他角的な考察をさせながら、固定化されている男女の問題を、ガタガタとゆさぶつて、新しい家庭の創造とはどういうことかということころへ迫りたいと思つてゐる。

『教育課程の自主編成 実践編 創刊号』より

梶村先生のこと

この五月、梶村秀樹先生が亡くなられた。先生は一九三五年生まれ、東京大学で朝鮮の近・現代史を専攻された。

人づてにきいたことだが、父上は法曹界の方で先生を法科に進ませたかったのに、歴史、それも当時はやる人の少なかった朝鮮史などを選ばれたのに落胆し、反対されたという。

先生は小柄で、一見おとなしそうな方だった。いつも口もとに微笑をうかべていらした。

しかしその黒ぶちの眼鏡のやわらかなまなざしの奥には、父上の反対をおしてもなお、朝鮮史を学ぼうとするしなやかな強さがあった。それは何だったのだろうか。

私の夫は、かつて「金嬉老事件」がおきたとき、在日朝鮮人の犯した殺人事件の背景を

鋭く問う日本人の一人としての先生の真摯な姿に感動したといつも語っていた。私もその後、私の卒業生がかかわった「韓国政治犯」の救援活動の中で、先生の姿を多く見るようになった。

実際、先生は、いつも実践の人であった。日本人が朝鮮を研究するということは、切れば血の出る問題につねに身をさらすということである。先生はそ

私の朝鮮史

岡百合子

こから一度も逃げなかった。まったく、ここまでつきあう必要があるだろうかというようなマイナーな会にも、先生の姿はあった。私は、たった五人しか聴衆のいないガラソとした部屋で、間島バルチザンの話を聞いたことがある。しかしそのとき、先生の説はいつもと変わらず、とつとつとした語調ながら気迫にみちていた。

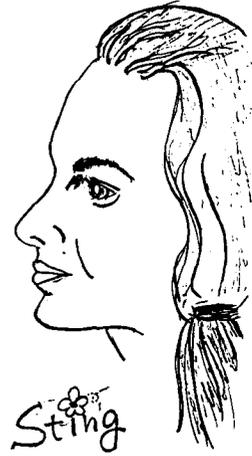
そんな多忙の中でも、先生の学問的業績はすばらしいものであった。私には、先生の専門である経済史をはじめ、学問

上のことは語る資格はない。ただ私自身が先生によって朝鮮史の豊かさに目がひらかれたことを思うだけである。

先生はそれまでの他律的であり「停滞した朝鮮」ではなく、「内在的発展」の契機、エネルギーをもった朝鮮史像

を求めつづけられた。この視点は、朝鮮民族の自立的発展を阻害したものの存在をうかびあがらせるだけではなく、世界史近代の闇をひらく扉にせまるものであった、と私は思う。

先生の著書の中でポピュラーなものの一つ、講談社新書「朝鮮史」は、あの短いスペースにそうした先生の思いがこめられた名著である。私は今、それを読みかえす。五十三年の生涯をかけぬけていってしまった先生の熱い思いが、改めてよみがえってくるようであった。



政治家諸先生の「微動だにしない髪」について書いた方がいて、注意して見ると髪というより鉄兜やヘルメットに近い。台風級の逆風が吹いても動かないみたい。それで思い出したのが私が教わった先生で、学者はモシヤモシヤ頭がいい、と夏なんか水道で朝シャ
ンならぬ鉄管シャンプー、小鳥の行水のように頭ブルブルふってました。同じ髪でもすごい差です。最近長髪を後ろに結ぶ男性、見かけるようになりました。熱帯雨林の保護を訴える来日、環境庁長官に2万5千円入りののし袋のみ手渡されたロッカーのステイキング、そうです。通勤の電車の中でもスーツにこの後ろ結び、たまに見かけハツとします。スーツはリクルートファッションにみられるように、会社、社会の機構の中にinする服、ガンダムモデルスーツみたいなもの。以前は長髪といえばTシャツ・Gパンで職業欄に自由業と書きました。それはスーツは着ても会社・社会に丸抱えされないヨ、と

いう意志表示を髪型で示す事と共通してる。これが50年代の「グレイ・フランネル・スーツ」より隠れた香りがするのは、フラワールドレンの花がより身近に咲き始めたから。15年程前に出たSF小説「長髪族の乱」は長髪に拒否反応を示すポリスや矯正会のオバタリアン達と渡りあう若者の反乱のお話ですが、その中で高校生が言う「12年間も真黒の学生服や同じ髪型で、一番大事な自分の着る物のセンスをクリエイトする能力や独創力を奪われる残酷さ」はもはや小説内では収まらないリアルなセリフです。長髪賊の乱は19C中国ですが、20C初めやはり一人の苦学中学生が清朝反対！と弁髪をチョン切った。これが校則違反で問題になった、かどうかは？ですが、この時から若者の長い反乱の旅が始まります。今、彼のポスターはあの、天安門広場にあります。ポスターといえど今回の選挙のポスター面白かった。その人の日常がわかる服や、風にそよぐ髪をもつ候補者が増えたからです。息子をおんぶした。パパ、バギーを押すママもいましたね。二〇〇八年八月八日、TVで国会中継を見る。カラフルなTシャツの議員達が楽しそうに審議していると、オツとベビー連れのパパ議員がオムツをかえ始めた。女性首相はコッパンでお見事なフットワーク。鉄兜みたいな旧議事堂は解体、酸臭いっぱいの風が吹くオープンスペースの新議事堂で、みんなの髪がゆれている。

コンピューターと暮らし

コンピューターと教育の問題を考える場合、まずは道具として使いこなす知識と技術を、徹底的に教えるべきだという私見を前回述べた。もうひとつ違った観点で触れておきたいことは「コンピューター」というものを自分の暮らし方や生き方との関係でどう捉えるかという問題である。

コンピューターが仕事をする時には、その内部ではいわば極小無数のスイッチがオン・オフの選択を連続的に繰り返しながら、求める答えに到達するまで、まさに機械的な二者択一の作業を行っている。0か1か開か閉か、そこにはそれ以外の道はなく、その宇宙を支配しているのは二進法という掟である。

今から四十年も昔、高校一年の頃、「解析1」の授業中に、先生が十進法と比較しながら二進法について説明してくれた。わずかに十分程度、それも定められたカリキュラムとしてでなく、たまたま思い付いたからちよつとだけ紹介しようという感じで、勿論その当時はコンピューターのことなど知る由もない時代。後に国立大の教授になった先生で、教え方に優れていたから熱心に聞いていたのだが、二進法の話は一種強烈なショックであり鮮明な記憶を残したのであった。

ヒーローミーヨー、一つ二つ三つ四つ、算用数字な

ら0から9まで、漢数字なら一から十まで10種類の数を表す記号があつて、九九も含め過去に習ってきた加減乗除の全ては十進法の法則に従っていた。単に数学の世界だけでなく、日常生活のあらゆる場面で3番目や4番目があり、5種類・6種類があり、7通り・8通り・9通りが考えられたのに、そして人間の手や足だって10本の指を持っていて、自分の目の前に現実的に「10あるいは十」が存在しているのに、何故？

0と1しか認めない(2という数字のない)掟がどんなことに役立つのかその時点ではまったく理解できなかったのである。ハムレットのセリフではないが生と死という二者択一はともかくとして、現実の暮らしには右でも左でもない中央、上でも下でもない真ん中の部分が大勢を占めることが多い。黒白をつけることは避けて何段階か濃淡のある灰色の部分の認めるからこそ人間は生きてゆける。コンピューターを構築する二者択一の原理は矛盾を許さないが、人生とか暮らしとかいうものはそれこそ矛盾そのものであつて、相反する答えを併存したまま人は生きる。学校教育にコンピューターを取り入れるなら「二進法」の功罪・限界についての教え方に留意し、○×式教育がその世代の思考に与えた悪影響を少しでも払拭して欲しいものだ。

その6

碧海西葵(あおみ ゆき)

「チエルノブイリの春」



よしだあきひろ

(イラスト 十倉ゆかり)

連絡先：〒665 兵庫県宝塚市亀井町5-8

石けんコンサート通信 <6>

チエルノブイリの春

サミの人たちは トナカイを失った
森や湖をすべてを失った

チエルノブイリの春

私たちは 何もなかったかのように
忙しい毎日を送っていた

サミの人たちと 私たちと

何ががうと言うのだろう

サミの人たちの嘆きが 苦しみが

聞えてくるのだろうか

毎日忙しいだけの私たちに

聞えてくるのだろうか

(詩 吉田明弘 曲 山本謙吉)

スカンジナビア半島に、サミ(ラップ)

と呼ばれる遊牧民族が住んでいます。サ

ミの人たちはトナカイを放牧し、農業や

漁業を主体として暮らしています。

チエルノブイリ原発事故当時、スカン

ジナビア半島には雨が降っていました。

その雨とともに、サミの人たちの大地の

上に放射能は降りそそいだのです。

サミの人たちは、生活の手段一切を失

いました。あまりの高い放射能汚染の

ため、トナカイの出荷停止を余儀なくさ

れ、農業も漁業もできなくなってしまう

ました。まさに生活の糧を失ってしまったのです。

そんな様子を描いたドキュメンタリー『脅威』という映画を観たあとにできた

のがこの曲です。僕たちの暮らしと、サミの人たちの暮らしがオーバーラップして、僕の中にイメージされたのです。

僕は思うのです。チエルノブイリ原発事故は、単に放射能の恐ろしさを教えてくれただけではなく、僕たち自身の生活

の在り方を問うものであったと。

自分の生活を犠牲にしても忙しく走りまわらなければならない毎日の仕事。

他人のことなどかまっていられない、そんな社会の在り方、人間の在り方。僕た

ちの暮らしがそんななかにあるとするならば、サミの人たちの苦悩などわからな

いだろうし、ましてやその悲しみや嘆きを共有することはできないでしょう。

僕たちはどこか遠いところの出来事として、チエルノブイリを思っていないか

ったでしょうか。自分には関係がないと、心の底で思っていたのではなかった

でしょうか。僕たち自身のヒューマニズムの質が問われます。



人が人と出会う

夏は豊かな出会いの季節。

「今年のフォーラムには、行けないかもしれない」と、冬のころは沈んでいたが、幸い、痛みが柔らいで、福岡、熊本、岩手、石川、静岡、千葉などにかがうことができた。旧知・未知の方々とめぐり逢えた歓びは深い。

とりわけ、緑いっぱいの阿蘇で開いたフォーラムは、熊本の方たちの周到な準備、関西や首都圏の方たちの側面からの援助によって充実した内容で盛り上がり、出会いのうれしさに酔った。

私が強烈に揺さぶられたのは、田中裕一氏の「環境破壊を授業する」だった。熊本の家庭科サークルのすぐれた実践は、田中氏からも学んでいると思った。詳細は冬増刊号に譲り、ここにはそのメッセージを紹介しよう。

〈教師は次の二つを心することによって、必ず、生徒とい関係をつくることができる。

●絶対に生徒を差別しないこと ●わかりやすい授業をすること

すごい！ としか言いようのない田中氏の結論は、こんなにシンプル。しかし、この二つが、実は最も難しいことなのかもしれない。考え考え帰京して、娘に話すと、彼女はいつとき黙って「もう一つあるよ。それは、先生の生き方に納得できること」と言う。「ウーン」。この言葉にも唖った。

石川県の「家庭科・自主編成講座」で、私のパートの司会をされた寺島絃子さんは、Wee発足の年「新しい家庭科を創るために―高等学校では―」を連載して下さった方。「家庭科って、こういう内容も扱えるのか」と、多くの読者が、目を見張った。その寺島さんが私を「家庭科の流れを変えた人」と紹介なされた。過分の言葉を聞きながら、「そううぬほれることはできないのです」と呟いていた。

「ありがとう、寺島さん。雑誌Weeは、日本のあちこちに点在している。現状にあき足りない家庭科の先生たちに、線となり輪を結ぶための場を提供しました。Weeの三つの願いに共感する人は、家庭科教師であろうとなかろうと、人間同士として手を結び、アミーバーのように自在に動く有機体が生まれました（フォーラムはそれを確認できる場、だから楽しんで）。

私は、家庭科の先生たちに、教師というアキを抜いて、生きて暮らす一人の人間であるための場を提供したかった。同時に、家庭科教師でない読者が、家庭科への偏見を除き、家庭科のつくり手の列に加わることが望んだのです。それが出来た時初めて、家庭科の流れを変えた」と胸を張りましょう。でも、その日は、まだ遠いのです」と。

Weeの会便りに載った次の文が、私を刺していたから。「私は創刊号からの読者なのです。が、このごろほんとなにまなくて、特に六月号のように家庭科の部分が多くなると、読む気がしないというのが本当のところですよ」。家庭科の先生方の中に、枠から脱け出ようとは外からのメッセージを積極的に求める方はふえている。石川の会で会った荒井紀子さ

んは、「家庭科の可能性を探る夏増刊号、とてもよかった。特に、家庭科の外の方、平井和子さんや小川眞平さんなど」と言われた。

寺島さんは、金沢から東京・自由ヶ丘のモンペハウスに、内山裕子さんを訪ね、「よそおい」から得たヒントで教材を創った。昨夏のフォーラムに大津和子さんを招き、「一本のバナナから世界を見る」実践に学ぼうとした村上昌子さん。We⁸⁷年八・九月号「原発、知らなくていいのか」から、食物の安全性と原発を結び授業を創った浅井由利子さん、など。

私は、社会教育の場で、家庭科問題を話すことも多い。「あなたの言うことに100%共感する。でも、うちの娘が学んでいる家庭科は……」との声を、どれほど聞いたことだろう。

お子さんの答案を持ってきて「ミシンの部品名が書けたり、茶わん蒸しの卵液の濃度を答えられれば、それで家庭科の目標は達成できるのですか？」と言った人もある。

こうした家庭科への疑問に、家庭科教師は答えなければならぬ。と同時に家庭科教師でない人も、例えば六月号17頁の西本和代さんの悩みを読んでほしい。フォーラムで村岡洋子さんは、「しんどくとも、家庭科の実践を読んでいるうちに、短大での理科の実験の観

点が変わってきた」と言われ、うれしかった。「家庭科の部分」を読む気がしない人に、どうしたら読んでもらえるのか。授業に即、役立つものしか欲しくない家庭科教師に、教材のヒントをWeに見出す目を、どうしたら持つてもらえるのか。例えば、「食べものから地球を見る」この号に、ヒントは見出せないのか——ひとところよく出た、Weから「新しい家庭科」のマクラコトバを外せ、の声は聞かなくなつたけれど。

⁸³年春の公開ゼミナール「学校をよみがえらせよう——家庭科の窓から——」を取材した朝日新聞の佐藤洋子さんが、「学校と家庭、家庭科をかけ橋に、暮らしの大切さを教えつつ」の見出しで書いた記事の結びである。

「たくさんの問題をかかえる教育現場に教師以外の人間が入る可能性をさぐるべきではないか。暮らしの大切さをこそ教えたい、教師も一人の人間としての自分を出して行かなければなど、学校をよみがえらせる手がかりとしての家庭科の問題は教育と家庭両方にまたがる広い問題を呑みこんでいった」。

この日から、半年半が過ぎていく——。ある県の官制研究会で、挨拶した校長の言葉。「大多数の生徒は、健全な家庭に育つて

いるが、登校拒否、非行その他、学校の指導の限界を越える事例もあり、それらはほとんど家庭に原因がある。家庭科の先生は、そういう子が育たないような家庭づくりに力を注いでほしい。啞然とした私は、講演の中で、それを全部ひっくり返していったのだが。東京・全電通会館ホールで開かれた「女子教育もんだい」の研究会で、弁護士の中島通子さんも、先生方のレポートに、よく「崩壊家庭」という言葉が出るが、考え直そうと言われた。

フロアーからの発言で「わが校の家庭科の先生の保守的な対応ぶり」を、バラした人もいた。折から、宮崎勤に関する報道でマスコミは過熱している。市民もまた「人間じゃない」「殺してやりたい」と、自分を正義の側において断罪する。私の中で田中裕一氏の「絶対に差別しない」の言葉が、どんどん重くなる。自分を外に置いて批判し、思い込みをもって断定している限り、「差別」の網から逃れることはできない。「崩壊家庭」の子に対して、「家庭科」や「家庭科の先生」に對して、また、家庭科から、家庭科の外の世界に對して、私たちはある思い込みの目を向けてはいないだろうか？ 思い込みを外さない限り、人と人は出会えない。

通信のWe

連絡先 石川由紀
東京都世田谷区上野毛4-19-12
☎03-701-8578
FAX 03-704-2254
本欄編集担当 平井雷太
東京都文京区本駒込6-15-1
河西ビル5F すーすらくだ
☎03-941-4659
FAX 03-941-5427

第三回の合評会が6月24日(土)の午後、関千枝子さんをゲストにお迎えして行われました。担当にあたった私は『広島第二県女二年西組―原爆で死んだ級友たち』を読んだ時たんたんと級友たちの生活を書きながら原爆の恐ろしさやうかがひあがらせている関さんのすごさを感じました。それで是非一度お会いしたいと、そして女が子どもを抱えて生きていく時、健康をそこなったらきびしい現実が待っていることをWeの関さんの原稿から改めて痛感し、お願いしましたところ快くお引受くださいました。関さんにお会いしたいと新しい顔ぶれもあり少し緊張した雰囲気が始まりました。テーマは4月号に「関さんが書かれた「子どもたちに生きぬく力」でした。ま

ず関さんからお話をうかがいました。

——Weに書きましたとは『この国はおそろしい国―もう一つの老後―』(農文協)でありまして、日本は豊かであり、貧しいのは心だとマスコミではいわれてますけど、そんなことはなくて、経済的にもそんなに豊かではないと、特に中小企業で働く者、あるいはいったんやめて再び働く女性の場合働く所は中小企業が多いわけですので、そのあたりの豊かさとはほど遠い現実を書くつもりでした。しかし取材しているうちにいろいろな事件が起こりまして、その一部をWeに書きまし

た。特に言いたかったのは今の日本の場合子どもに働かせないということ、18歳すぎても大学とか結婚とか親がかりであること、話——というような関さんのお話を受けて、話し合いにはいりました。

関さんが親の死を黙って見ていた子に疑問を持つといわれましたが、この点については今の子といういい方をしたくないという意見が圧倒的でした。しかしやはり貧しい生活が子どもに見えにくくなっているのは現実であるというお話でもまして、ではどうすればいいのかということ、子どもに手伝いをさせ

たり、仕事としてさせている家庭の例も多かった。子どもだけではなくて、餓死するのを黙って見ていた周りの人たちはなにをしていったのかという思いも関さんだけではなく話されましたが、人に何かをしてあげるといふことはその関係によって非常にむずかしいというか、人にはプライドがあり生活の面倒まで見られる関係というのはなかなかつくれないしお互いにその力もない。自立した生き方というのとはかなりきびしさを伴う。例えば新宿にいる浮浪者といわれる人たちに個人として何ができるかといわれた時、やさしさといってもたかがしれているというか何もできない自分を感じてしまう。それだからこそ、行政の援助の必要性を思うというお話が参加者の方々からありました。

合評会を終えて、目の前で死んでいく親を見ていた子どもの今後を思うと気が重かった。それにしても生きていこうとする気力が奪うような、人間の尊厳をおかすような発言が行政にあったとしたら許せない。

それともそれでも生きていく強さをもたないといけないのだろうか。

〔間瀬中子〕

◆七月号の「波」に、半田さんが、「戦争と少女」を書きたい、と書いておられた。私も「戦争と少女」という言葉ですぐに浮かんで来るシーンがある。

京都の小学校は、一般に戦争に対して一本、線を引いていた、と思う。敗戦近くの何年か、毎月一日には桃山御陵の参拜に行き、教育勅語を筆で写したりもした。御真影を拝むこともした。しかし、それをするにあたって、勇ましい励ましの言葉や大仰な戦争讚美もほとんどなく、ごく淡々と行われていた。

それでも、学校に在郷軍人の下士官が配属されていた。威武高で、いかつい大男の彼に、私たちはカバと仇名をつけ、「海行かば水浸くかばね」と歌うとき、かばだけを特に強調して、彼が赤くなったり青くなったりするのを楽しんだりした。若い女性のS先生は「ハイ、変なところを強調しないで」とほがらかに、そしらぬ顔で指揮を続けた。

腕立て伏せは、不器用な子がすると、体がくの字に曲がり、お腹が地面にくっつきそう

になる。下士官氏が大きな皮靴を子供のお腹の下にさしこみ、持ち上げようとした時、Y先生がとんで来られ「お腹は子供の一番大切なところですよ。持ち上げるなら、手でやって下さい」と、強い調子で抗議された。一瞬、

回りはシーンとなり、緊張した空気がはりつめた。「黒豆」とあだ名のあるY先生の小柄な体には、想像もつかない犯しがたい威厳があつて、下士官氏は黙って引き下がった。

若い理科の得意なH先生は、「教練」の代わりに「役にたつ科学的な研究」ならやってもよい、という許可をとられて、掲示板で呼びかけられた。集まったのは、たったの四人。「これだけか」と言われた先生が、許可をとるのに、どれ程苦労されたか、今なら察しがつく。しかし、たった四人の科学研究班は、ほんとうに楽しかった。疎水(びわ湖から水を引いている人工の川)のふちに自生した、コウゾやミツマタの木を採集して、水につけ、繊維をとり出す。柔く叩いたコウゾの繊維は布をかぶせて上ゾウリの鼻緒に、ミツマタは

紙すきの真似ごとをしてゴフゴフとした美しい紙に。ふのりを買うために、二時間も歩いて行つた。カビや様々の微生物を顕微鏡で見たり、何種類ものタンポポを、花のない花壇に分類して植え名札を立てた。

これらの場面の意味が、いくら小さいとはいえ、六年生の少女の胸に伝わらないはずはない。私は、自分が守られている、と確信し、その先生の背後に、教育というものはるかな拮かりを見た、と思った。その後、学校というものに対する本質的な信頼が、私の心の中にずっとあり続けている。声高な反戦の言葉が語られたわけではないが、私は、今は、戦争中という特別な時代だ、と思っていた。この中でも人は、きちんと自分らしくしていただける、ということを子供の心に伝えてくれた学校を、今、改めて、肅然とした気持ちで思い出す。

戦争最後の年の四月、女学校に入った。そこでも「戦争、戦後と少女」のシーンは無数に存在する。私は56歳の今に至るまで、生き

ることへのエネルギーをこの時にもらった。戦争で家族をなくしたり、学校や家を失ったりした人達のことを思えば、やはり甘いのだろうかけれど、また、いつか書ければいいな。

(福知山・村岡洋子)

◆「木・鳥・娘…」を読みました。詩集というの、ゆとりをなくした心理状態を、はっきり自覚させてくれますね。スズメとカラスくらいしか分からなくて、柿の木とあじさいの程度しか気付かないのですが、自然に囲まれて暮らしているのに、もったいないことです。草も、名前を知らずに、抜くの、根が深いか、切れやすいとか、草取りに関して知っているだけでは、困ったものです。こんな自然とのかかわりかたでは、「波」を読んでも私も買ってみた『東京漂流』からみると、「見たくても自然が見れない」、生活よりは金属バットを振り回しかねない危さから遠のいているようです。でも詩一編を一时间くらいかけて読んでみたいですね。

今、未来社の『ナチズム下の女たち』を読んでいます。肩こりで通っている接骨院で、手塚治虫の「アドルフに告ぐ」を見ています。そして家に帰ると中国のニュースが流れ

てきます。今日(六月二五日)、NHKスペシャルで「シベリア強制収容所・厳寒のコリマ街道」をやっていました。フアシズムの恐ろしさをつくづく感じています。けれどドイツでは自分の意志で、政党に入ったり、少女連盟に入ったり、圧力はあつたけれど、自己選択したとありました。日本はあのころ、選択権なく組み込まれていったように思うんですが、だとしたらこわいですね。

こんなふう押し流される人にならないように、自分の足下が常に分かっていて、一步一步に責任を取れるようにするために、消費者教育は大切なのではないかと考えていました。一時期、家庭科とコンピュータがテーマになっていましたが、献立アドバイスや栄養価計算にコンピュータを使うのではなく、最も得意とする集計を、機械にさせ、統計とコンピュータのかかわりを理解すると、いい加減な設問や解答を集計すると、とんでもない結果になることが分かります。発展すると、公の発表データも、いい加減ということが分かります。消費者として、という視点でいなければいけないか、という問題になります。すると一人一人が自分に責任をもって生きていく結論になり、Weの考え方と合うのではな

いかと考えていました。

(岐阜・加納とし子)

◆毎週四カ所、違う所で授業をしているわけですが、『子ども発、大人へ』をテキストにしている所が三カ所、『家庭科新時代』が一カ所ですから、Weを読まない日、Weについて考えない日は、一日もないと断言できます。私とおよそ十歳ほど年の違う人達と、テキストやWe、時にはビデオや新聞の切抜きを教材にしながら、話し合い、考え合っています。「私はこう思う、こう考える。あなたは、どう思う? どう考えますか?」の繰り返しです。こちらの意図や、私が出ているの、教育学者の学生に多く見られる傾向で、「何言っているんだよ」と、目や体一杯反発してくるのは、農大の学生に多く見られます。

彼等の側には教師を選択する余地のないこと、最終的には、私が単位認定という評定をしなければならぬこと、とにかく、限られた時間、教室という密室にいななければならないと思つていることに象徴される、私(教師)と彼等(学生)との関係を、どうやって崩し、同じ問いを共有する仲間として語りあえるよ

うになるか…それだけなのです、私の今の所の授業論は…。すぐれた文化(教材)を一緒に味わいながら、彼等のいきざまに立会い、あるいは見守るのが、私のできることです。正しい答を教師が持っていて、それをいかに能率的に、たとえ主体的であったとしても、うのみにする授業、うのみにさせるための技術を高める授業を、私はやりたくない。『子ども発…』と『新時代』は、こんな私にとっ

「Know How 共学家庭科」の湯沢静江さん。

大手の塾の「大検講座」の講師にと請われて、長野から上京中の御多忙な時間をぬって、ウイ書房を訪ねて下さった。スラリとした長身の若々しい、笑顔のやさしいかた。静岡に生まれ、まもなく大連へ。中一で終戦。学校が潰れ、工場で働く。47年春に帰国。中一〜二と休学同然だったので、留年を勧め、学校側を説得し、中三に編入。

お金も物もあてにならないと思いついた引き揚げ体験から、女の子でも一人で暮らせるように技術をとの御両親の配慮で、高校は被服科へ。教科書もない時代だったが、かえって、大学並みの質の高い授業だったとのこと。

て、本当にやりがいのある、取組みがいのある教材です。そのあたりのことについては、もっと時間をとって、きっちりともとめたい。今は現在進行形ですから、今までのことをまとめるゆとりがなく、この先のことに手いっぱいなのです。

夏増刊号は、線を引ながら読んでいます。平井和子さんの発言、ほんとうにLove Callです。一七ページ「子どもを産み育

それもあってか、短大入学後の授業に失望し、家庭科に対する疑問に煩悶し、授業に出ず、図書館にこもって片っ端から読書。そのとき出会ったのが、常見育男氏の「家庭科教

KNOW HOW 共学家庭科の 湯沢 静江 さん



育史」。納得できなければ自分で家庭科を創ればいいと気づき、楽になる。

二十歳で農業高校の家庭科の教師に。三学年一度に持たされ、毎晩九時頃まで残り夢中

てる」から一八ページの上段まで、私の体験を言葉にして下さったようで「そうなんだよねえ」と、一人で何度もつぶやいていました。「座談会」の内容は、教育学部の学生の反応の中に、ここで述べられていることとびつたりあてはまることが多いのです。後期のテキストは、『新時代』と、この増刊号にします。

(福島・西内みなみ)

で授業の準備を。生徒と共に寝起きして蚕を飼い、農作業をし、一緒に悩む。次の赴任校では、生徒にせがまれて、ホームルームで女の生き方や職業について話す。72年頃から、長野県教育文化会議の他教科の先生も巻き込み、従来の家庭科にはなかった社会科学の領域も盛り込んだ、男女共学家庭科の基盤を作る資料集作り、教育課程の自主編成を始める。この春、高校を退職。「いいなア、僕もやめたい」との、同僚の教師達の咬きに心を残しながらも、身内の方々の健康状態を含めて、自分が大切に思うことをできる時間を確保するために。とはいえ、教科書の改訂の仕事、忙しくて手の回らぬ先生たちに代わって県のサークルのまとめ役と多忙は続く。(稲色)

**Weの
読者会だより**

〈東久留米の会〉

◆六月二十四日、滝山団地集会所に6名集まりましたが、また新しい仲間が参加して下さいました。新しい出会いは新鮮で楽しいものです。自己紹介やお互いの近況報告に花が咲き、肝心のWeの方にはなかなか話が進みませんでした。

最後に落着くのは、やはり子供に関する問題です。そのひとつとして、ナンセンスギャグマンガやコントの低俗性が話題になりました。制限せず何でも見せているうち、いいものと悪いものとを判断する力がついてきていずれば卒業するのではという意見と、その反対に、内容も製作者の意図もともに不愉快で見せない方がよいのではとの意見も出ました。わが息子は小二ですが、ファミコンの中心を徹底的にやっつけることに熱中してい

ます。子供達の会話の中にも、死とか殺すということばがいつも簡単にゲーム感覚で出てきます。わが家では、マンガ・ファミコンなど一定のルールを設けていますが、それぞれの家庭によって考え方も違うことでしょう。こんな世の中で、子供にとっても情報が満ちあふれています。それを親がいちいち取捨選択できるものではなく、またそれがいいことだとも思いません。でもわが子ということだけではなく、大人として子供の感性をもう少し大事にしてあげたい気がします。

次回は七月二十八日久しぶりに夜七時から滝山団地第一集会所の予定 (川住広子)

◆七月二十八日金、夜七時より団地内の集会所で、私(西内)の上京に合わせて、読者会を開いて下さった。

私はこの四月から、慣れ親しんだ土地・仲間たちから去り、みちのくの玄関、福島県に住むことになった。四カ月ぶりに会えて、お互いにもあれも聞きたい、これも話したいということばかり。私からは、何よりもまず、会を支え続けて、来られないとわかっていてもいつもきちんと開催の案内を私にも下さる瀬戸井さんと川住さんにお礼が言いたかった。毎回二十数枚案内を出しても、集まる顔ぶ

れは少なく、維持していくのがたいへんなことを感じた。その夜も私を含めて四名ほどで、急に来られなくなった人が三名ほどいると、瀬戸井さんが申し訳なきさそうにおっしゃり、私の方が様々な気遣いに申し訳なきでいっぱいだった。

話は、たぶん四十年ぶり(?)に集っても変わらないんじゃないかなと思うほど、それぞれが、今、ここで悩んだり、思ったりしていることを、思いつき出して仲間の意見を求めるという内容だった。

今年度小学校のPTAの会長になってしまった(?)三角さん。「えっ、ほんと? ウッソー」の三拍子でやっていこうと思っていたのに、体をこわすほどたいへんだと、厳しい現実について例の明るい調子で話して下さいました。

正直に言えば、たった四カ月でも、福島の土地に生きて、くらしのリズムが大きくずれてしまっている自分を感じた。福島では、ゆったりとした時の流れの中で、あまり自己主張をすることのない人々が、他意のない会話を交わし合っている。もしかしたら、十年ほどタイムスリップした世界に住んでいるんじゃないのかしらと思うことがある。

久しぶりになつかしい顔を見ることができ

て、とても刺激的だった。こんな風に安心して、自分を語れ、Weを語り合える場を、一日も早く、今のくらしの中に創りたい、そんな想いを強くしてくれた読者会でした。

次回は九月三十日(土)午前十時より、滝山団地集会所にて
(西内みなみ)

連絡先 0424-72-6826 (瀬戸井)

〈We兵庫の会〉

◆七月九日(日)、神戸市勤労会館和室にて「高齢化社会と老人介護」というテーマで例会を持ちました。参加者十八名。

福知山から村岡洋子さんに来ていただき、たくさん資料を用意して、二時間たっぷり話

していただきましたが、奥が深く、今日は総論、次回から各論で、というくらい、話きれない内容でした。

改めて、日本はなんて貧しいのだろうと、思いました。これは障害者のこと、住宅のことにも、共通していること、そして政治の貧困からくるものだとも思いました。どういう社会を目指すかという方向性が、ここ数年逆多どりし、狂ってしまったと思いまし

た。
具体策として、どこから手をつけていったらいいのでしょうか。吉田さんからは、田舎では老人介護はまだ嫁の役割というのが根深

▼私のすすめる一冊▲

『シティ・サファリ』

——子供の都市探検のためのガイド』

カロリン・シエーフアー／エリカ・フィ
ルダー著 遠州専美／遠州敦子訳
都市文化社(定価 一五四五円)

酒井晴美(大阪市立大学大学院生・

生活環境専攻)

身近な環境をいかに新鮮な目で眺めることができるか、という意味で「シティ・サファリ」なのである。

最初は五感を働かせてまわりの世界を感じそれを表現する方法を学ぶ学習、たとえば戸外でおもしろい形を捜し、地図に書いていく試み、そして、身近な動植物から人工的な環境・人間生活を理解するためのいろいろな観察の仕方やインタビューの方法、さらに、街の中心街へと視点を広げ、卸売市場・廃棄物

い。そこをたちきること。金森さんからも、まずは男も女も、自分の親の介護に責任をもつ、パートナーはその手助けを。小・中・高生の時から、自分の血縁でなくても、地球の老人と自然にふれあう機会を多くする。ぼけを暗くとりえないで、老いていけばそうやっていくのは当たり前と受止めよう。デンマークなどでは寝たきり老人はいない、という記事が新鮮な驚きだったなど、感想・意見が寄せられました。

次回は、十一月三日、このテーマについてほりさげていく予定です。

(西本和代)

処理施設の見学や商店主へのインタビューを通して、食べ物・エネルギー等の流通の仕組みを認識する学習など。

アメリカの二人の女性教師の実践である。訳者の「小さい頃からのこのような環境教育、コミュニケーション学習が、アメリカ市民の環境を守る運動を支える原動力であろう」という文に思わずうなずいた。身の回りの環境を見直すヒントに、「住」教育を考えるために、ぜひ一読をおすすめています。

読書から

● ● ● 今月の



中野 敬子

『木炭の博物誌』

岸本定吉著

木炭のことは何にも知らなかった。日本の木炭の技術も製品も世界的にすばらしいものだそう。原料の木は循環資源であり、化石燃料が使いつくされた後も期待できる。木炭は燃料以外に、土壤改良剤、融雪剤、家畜飼料添加剤、空気浄化、汚水処理、防臭などにも使用されているが、著者はこの分野での開発と、収炭率の少ない第三世界での製炭に、日本の技術を役立てたいと思っている。

(総合科学出版 一二〇〇円)

『長寿村・短命化の教訓』

—— 医と食からみた橿原の六〇年 ——

古守豊甫／鷹鷲テル著

医学部では栄養学を勉強する機会がないという。おかしなことだが、これはさておき、本書は、両方の立場から、橿原地区を見る。昭和元年から約六十年間の住民の死亡診断書三千枚をチェック分析し、近代化が健康と生命、疾病構造にどんな影響を与えたかを明らかにした。長寿の秘密は何だったのか—穀物を中心とした伝統食の中に鍵をさぐり「微量ミネラル」に着目する。(樹心社 二〇〇〇円)

『食卓を脅かす食品照射』

トニー・ウェブ／ティム・ラング／キャス

リーン・タッカー著

浜谷喜美子／久保田裕子訳

食べものを長持ちさせ、殺虫、殺菌もしてしまうものがあるなんて魔法のようだ。この魔法は放射線というものだそうだが、この影の部分に何があるのかわからない。わからないけどやってみるっていうならチョット待って、少なくとも魔法をかけてあるかないかくらいは教えてよ、と言いたい。言わないなら誰のためにかけるのか、とつくど考えなきゃならないから。(三一書房 二〇〇〇円)

『アフリカ 飢えの構図』

毎日新聞外信部「アフリカを考える」取材班

ひとくちにアフリカの飢えといっても、地域特有の要因がある。取材班は飢えを生み出すメカニズムを解く。そして行きついたらこころは「植民地主義」だった。飢えをつくる元凶はアグリビジネス(農業関連企業)の存在。たった五企業がすべての穀物輸出の九割を支配している。飢えは分配の結果なのだ。希望は、まだアフリカに可耕地の八割が残されているということ。(三一書房 一三〇〇円)

泉

この頁は、あなたと私の情報交換の場。小さなスペースですが、ご利用ください。

「アジア人権基金設立準備会」へ送ります。

モンペハウス (〒152 東京都目黒区自由が丘 1-28-8 自由が丘デパート
☎03-713-1006 内山裕子)

◆江の島映像フォーラム'89

「芙蓉鎮」(ふようちん)文化大革命に翻弄

されるヒロインの姿をとおして現代中国の縮図を描く。
日時 九月三十日(土) 二時～五時十五分
場所 神奈川県立婦人総合センターホール
先着五百人(二歳～六歳児の託児室有) 小学生にビデオ「E・T」の上映(申込制)
申込先 神奈川県立婦人総合センター生涯学習部 (☎0466-27-2111内線561-562)
電話で予約して下さい。

◆ミニ・コミ誌を紹介します

め・め・め通信 25号の内容は

。「こんにちわ」前八尾市保健所々長 丸山 創さんのヨーガのお話

。料理 野草を使った料理の作り方

。「国際化社会のもとでの日本の食糧とコメ問題」川島利雄先生の講演から

。発行 ぐるーぷ 一部 百七十五円

◆冊子「学校のなかでの悩みに答える・PART II」

「PART I」の続編です。「今回は学校の先生を中心に悩みに答えていただき、設問も入学から卒業後の問題まで幅を広げて作製しました」(紹介文より)

。A5判 百八頁 六百元
。問合先 障害児を普通学校へ・全国連絡会事務局 (〒156 東京都世田谷区上北沢 4-4-11 ☎03-303-4739)

◆中国人民解放軍による学生市民無差別攻撃の犠牲者へ救援を!

。カンパのお願いー呼びかけ人: 庄幸司郎

アジア人権基金設立準備会 '89・6 中国民主化犠牲者救援金(郵便振替 東京0-398417)

。モンペハウスで「ペキンリボン」を作りました。一つ五百円から。売り上げはすべて

。連絡先 (〒658 神戸市東灘区住吉山手 5-17-22 ☎078-841-1929 公庄れい)

あちら 126号の内容は

。選挙ってなあーにー例会報告に代えて

。八月例会案内

。2001年のおんな宣言 おくむらさこ

。問合先 あちら札幌 (〒063 札幌市西区琴似 一条6 グランドハイツ琴似408 細田英理 ☎011-644-2927)

◆『消費者教育の創造』(ご注文下さい)

消費者教育は、新しい家庭科の重要な柱です。著者宮坂広作氏が「消費者教育は、単に知識を伝達するだけではだめで、消費者のものの見方・考え方の枠組み・様式の自己変革を援助するの でなければならぬ」との主張を貫かされたもの。この本は書店経由では入手できません。直接ウイ書房にご注文下さい。電話、またははさみ込んだハガキをご利用下さい。定価二千円、税六十円、送料二百六十円です。(編集部)

十日路

〈新潟〉 男性優位8割が実感(新潟日報、7/28)

新潟市婦人政策室は、87年に市内の女性を対象に行った初の本格的な意識調査を「新潟市の女性の実情」にまとめた。これでは、男女がともにつくる社会を実施するためには、女性の「自立」が不可欠と捉え、調査結果を精神的、生活的、経済的、社会的の四つの分野別に検討している。また、家庭や社会で分割の人が男性優位を感じているが、若い世代では従来の男女の役割分担の意義が変わりつつあることが分かった。(山口久子)

〈千葉〉ごみはるばる御キ口(朝日、5/27)

千葉市が、自前の施設でごみを処理し切れず、青森県三戸郡田子町の民間最終処分場に、紙や生ごみなどの可燃性ごみを持ち込み始めた。私企業による産業廃棄物の「越境」はよくあるが、約六百キロも離れた土地へ自治体が可燃性ごみを捨てるのは、極めて珍しいという。市民の間からは「本当なら自分の土地で処分すべきごみに」。行政とし

て、本気で減量化に取り組む時期ではないのか」との批判も出ている。(木田直子)

〈神奈川〉訓練の全面移転要請へ―厚木基地騒音対策協(朝日、8/2)

米海軍厚木基地での夜間発着訓練(NLP)による騒音問題解消をめざす厚木基地騒音対策協議会(会長・長洲知事)が、八月一日開かれた。代替訓練地として硫黄島の使用が日米間で合意に至っているが、これまでの「早期移転の実現」からさらに、全面移転を求める要請文を全員が承認。八月中にも防衛施設庁など政府関係機関に要請することを決めた。(渋谷裕子)

〈長野〉悲劇ありのままに―信州戦争展(信濃毎日、8/4)

戦争のありのままの姿を伝えようと「平和のための信州戦争展」が松本市で開かれる。今年は二回目。今回は▽第二次大戦の実態▽日本の侵略戦争に反対し、闘った人たちが▽戦後の反戦運動▽大戦と長野県▽日本、長野県

をめぐる現在の軍事情勢などがテーマ。注目されるのは、今回新しく県下で入手した未公開写真六枚。旧日本軍が山東出兵時に中国大陸で行った生々しい惨殺行為が写っている。また七三一部隊に参加した人が生体実験で使ったメスや薬品も公開する。最近、県南部に飛来する米軍機の問題など現状も報告する。(宮崎春美)

〈愛知〉PTA会費で県教委接待(朝日、6/23・28)

県立春日井高校(伊藤一太郎校長)で生徒から集めたPTA会費が県教育委員会職員の手待ちに流用され、同校長らの学校内外での会合、飲食費などにも使われていたことが明らかになった。明らかになった分だけで流用は約百万円にのぼるとみられる。同校PTAは六月二十七日、真相究明のために帳簿類などの調査を始め、結果を公表することになった。(平野利依)

〈大阪〉男女一緒の50音出席簿(朝日、6/16)

堺市教委は、男子を先に、女子を後回しにしている現在の学校出席簿を男女混合の五十音順に改めることを決めた。現行の男子優先

型の出席簿は、児童や生徒に「無意識のうち
に男女差を植え付ける」として、各地で改善
を求める声が相次いでいる。新しい名簿は、
市立の幼稚園と小学校では完全に混合にす
る。中学生以上は保健体育、技術家庭などの
男女別々の科目の都合上別にするが、一般の
授業用には混合型名簿をつくるという。全市
で統一しての取り組みは全国で初めてとい
い、早ければ来春にも実現する。(大江美香子)

〈鳥取〉初の女性に熱い期待(日本海、7/31)
清潔な町議会の再生を目指して行われた八
頭郡智頭町議会の「出直し選挙」に七月三十
日、町民の審判が下った。町制始まって以来
初の女性候補大坪操子氏は、上位当選。地盤
のない中で立候補、ひたすら政治の浄化を訴
えた若手新人が大量得票を果たすなど町民は
町議会の「体質転換」を選択し、議会に新風
を求めた。(前田享子)

〈福岡〉「性的いやがらせ」働く女性が告
発(毎日、朝日、8/5)

福岡市内の出版社に勤めていた女性が「性
的な誹謗、中傷を受け、退職を余儀なくされ
た」と、会社と上司を相手に損害賠償を求め

る訴訟を起こした。この女性を支える「職場
での性的いやがらせと闘う裁判を支援する
会」の代表格の牟田和恵佐賀大講師は「女性
を共に働く仲間として見ることができないこ
とから発生している。また、男の領分に進出
する女性を引きずりおろすためにも使われて
いる」と訴えた。同会事務局、福岡市中央区
天神一—三福岡借成ビル(☎092-751-8222)

〈長崎〉水爆搭載機の事故で棧市長に申し入
れ書(朝日、6/23)

「脱原発させば」など市民八団体らは、六月
二十二日、米空母タイコンデロガの水爆搭載
機が水没した事故について棧市長あてに申し
入れ書を提出した。それは①日米両政府に対
して、二十四年間も事故が隠され、核持ち込
みがあったことへの抗議と、事故の全容や核
汚染状況の明確化、水爆の回収をさせる②日
本政府に非核三原則の厳守を改めて明らかに
させる③原子力で推進する船の受け入れを認
めない、などとなっている。(河野瑞枝)

〈宮崎〉廃止または改善を——高校入試30%
推薦制(宮崎日日、6/23)

県立高校入試に導入された三〇%推薦制に
ついて、調査した高校生の七割近くが廃止、
改善を求めていることが、高教組が発表した
「三〇%推薦制・三年間の総括」で明らかに
なった。昨年七月、初めて推薦制を経験した
当時の高校三年生、七百七十三人からの回答。
「うまくいっている」と答えた生徒は一割に
満たないほか、推薦枠が三五%を超えている
学科では、一般受験生の競争率が高くなって
おり、同教組は「問題点改善を県教委に求め
ていく」としている。(永田育)

〈沖縄〉各地で「反戦」の願い(沖縄タイム
ス、6/23)

毎年六月は県内各地で、沖縄戦を思っ
て追体験する催しが続くが、ことしは「慰霊の日」
休日問題が浮上して例年にない盛り上がり
みせた。石川高校では群読(朗読劇)や反戦
アニメ、生徒らのロックバンド演奏で戦争の
むごさとともに平和の尊さについて考えた。
知念高校では全体討論集會が行われ、「沖縄
から世界へ恒久平和を訴える」学校平和宣言
をした。摩文仁の沖縄平和祈念堂で行われた
沖縄戦没者追悼式前夜祭には二百人が参加し
た。(大嶺麗子)

が、宮崎の事件直後調べたところ、800件近い未届けのいたずら未遂事件があったといい、幼女をねらった陰湿な犯罪は増加の傾向にあるという。(8.15～23日付各紙より)

★凍結受精卵で妊娠成功

東京歯科大市川病院が慶応大産婦人科グループとの共同で、凍結受精卵を移植する不妊治療でわが国初の妊娠に成功していたことが12日明らかになった。胎児は双子で年内にも国内初の「凍結受精卵ベビー」が誕生する。

'84年オーストラリアで初めて出産に成功したのを皮切りに、'87年4月までに63人の赤ちゃんが誕生。日本では、昨年2月、日本産科婦人科学会が「受精卵の凍結保存期間は結婚が継続している期間内で、かつ卵を採取した母体の生殖年齢を超えないこととする」などの条件つきで臨床応用を認める決定をした。しかし、凍結受精卵の手法は受精卵の寿命を半永久的に延ばせるため離婚後の受精卵の所有権のあり方など、常識的な倫理では想像できない問題を引き起こす芽を秘めている。(7.13日付朝日)

米、テネシー州では、不妊に悩む夫婦が体外受精のために受精卵を凍結してもらったが、その後2人は離婚手続きを申請、妻は「受精卵はすでに生命を得ているもの。子どもは1人で育てる」と主張、夫は拒否したため、双方が、裁判所に受精卵の扱いの決定権をめぐる訴訟を出した。(8.9日付朝日)

★人工妊娠中絶で米の国論二分

米連邦最高裁が3日、中絶を制限するミズーリ州法を合憲として認める判決を下して以来、中絶是非に関する議論が高まり、タイム誌は「中絶問題が米国で、ベトナム戦争以来、最大の政治的論争を巻き起こすことは間違いない」と述べている。

米国では'73年、女性解放運動の高まりの中で、受胎後3ヵ月までの中絶を「憲法上の権利」として完全に自由化する画期的

な判決を下したが、ミズーリ州の中絶制限判決は、州法によるさらに厳しい規制を容認するもの。この判決をうけ早速公共の病院での中絶は行われなくなり、相対的に貧しい女性たちに打撃を与えている。(7.23日付読売)

★中絶できる時期短縮

厚生省は、優生保護法に基づいて医師が人工妊娠中絶できる時期について、現行の妊娠後「満24週未満」から「満22週未満」に短縮する方針を28日までに固めた。医療技術の進歩により、満23週で生まれた超未熟児の成育例が相次いで報告されていることや、世界的にも短縮の方向に動いているため、年内にも改正に踏み切る考えという。(7.28日付朝日)

★チェルノブイリ汚染で、新たに10万人避難計画

タス通信によると、ソ連白ロシア共和国最高会議は29日、'86年4月、ウクライナ共和国でおきた原発事故の放射能による汚染がひどい地域から、新たに10万人の住人を他の地域に避難させる方針を決めた。24日のプラウダは、モギリョフ州にある2つの村では、1平方キロ当たり140キュリーの放射能汚染が今でも計測されているのに住民が住んでいる、と指摘。住民の安全面に対する配慮のなさを非難している。(7.31日付朝日)

★林さん、板門店越え帰国

朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の平壤で、7月に開かれた世界青年学生祭典に参加した韓国外国語大生、林秀卿さんは、板門店の軍事境界線を越えて帰国を強行。韓国の民間人が亡命以外の目的で北朝鮮入りしたうえ、朝鮮軍事休戦委員会の許可なしに板門店を経由して帰国したのは、40余年に及ぶ分断史上で初めて。軍事休戦協定違反で、北朝鮮と米韓両国との関係に悪影響を及ぼすのは必至という。(8.16日付朝日)

★家永第二次教科書訴訟で却下

自著の高校用教科書の部分改訂を検定で不合格とされた、家永三郎元東京教育大教授が、文部大臣を相手取り不合格処分を取り消しを求めた「第二次家永教科書訴訟」差し戻し審で、東京高裁は「すでに学習指導要領が改正されており訴えの利益はない」と訴えを却下した。(6.27日付読売)

★教科書検定で大幅な書き換え

来春から中学、高校で使用する教科書の文部省検定が終わったが、歴史、社会科を中心に「侵略問題」「平和運動」「途上国援助」など文部省のクレームで大幅に書き換えられた。(7.1日付読売)

★大学進学率、女子が逆転

文部省が3日発表した、'89年度「学校基本調査」速報によると、4年制の大学と短大に今春進んだ学生のうち、女子の進学率が史上最高の36.8%を記録し、男子の進学率(35.8%)を初めて上回った。また小、中、高校の先生のなかで、女性教諭が占める割合も軒並み最高になるなど、「教育の世界」での女性の進出ぶりがひととき目立っている。(8.4日付朝日)

★参院選で自民惨敗

第15回参院通常選挙で、自民党が36議席と、改選69議席を大幅に減らしたのに対し、社会党は改選の2倍を超す46議席と大躍進。公明は10、共産5、民社3といずれも改選議席より後退。初めて登場した「連合」候補は12人のうち11人が当選した。この結果、自民は非改選議席と合わせて過半数を大きく割り込み、与野党の議席が逆転した。

24日、宇野首相は、参院選敗北の責任をとり、首相を辞任すると表明。自民党は、8日両院議員総会で、投票で総裁に海部俊樹氏を第14代総裁に選出した。9日、衆院で海部総裁を、参院は社会党の土井委員長を首相指名。41年ぶりに首相指名の両院協議会が開かれ、憲法の規定により衆院の議決が優先され、海部氏の首相就任が決まっ

た。

9日夜海部首相は、組閣を完了。初めて2人の女性(民間から起用の高原須美子経済企画庁長官と森山真弓環境庁長官)が入閣したが25日になって「女性問題」が表面化して山下官房長官が辞任、後任に森山真弓氏が女性として初の官房長官に起用された。(7.24, 8.9, 10, 26日付各紙より)

★日本全土に酸性雨

欧米の森や湖の生態系に深刻な影響を与えている酸性雨が、日本でも、全国的に降っていることが、14日、環境庁のまとめた調査で明らかになった。酸性雨は、大気中の硫酸酸化物などが雨に溶けて降るもので、欧米では、年平均水素イオン指数(pH)4.0程度の酸性雨が降り、国際的な問題となっている。全国29カ所で年平均pH「4」台のところが多く、環境庁では、すぐに被害が心配されるほどではないとしているものの、国境を越えた酸性雨問題が、いよいよ日本でも無視できない状況になってきたとしている。(8.15日付読売)

★幼女が標的に!

昨年8月より、東京、埼玉で続発した幼女誘拐、殺害、死体遺棄——特に、遺体を切断したり、焼いて段ボール箱に入れて届け「犯行声明文」や「告白文」を送るという猟奇的な事件が発生、幼児をもつ親を震撼させたが、7月23日、八王子署に問いせつ誘拐などで逮捕された五日市町の印刷業手伝い宮崎崎が殺害を自供した。犯行動機について「殺していたざらしようとした」と供述した。ビデオ愛好家であったこの26歳の若者の部屋から、約6000本におよぶビデオテープを押収、所有のホラー映画などに事件の残虐な手口をおおわせるものが多数あったこと、その後の調べで、殺害した幼児をビデオ撮影した自作ビデオも見つかり、きわめて計画的な犯罪であったことがわかった。

同時期、若い女兒に性的な犯罪を繰り返していた男が2人逮捕されたり、埼玉県警

- くらし、環境
- 83/2.3 住むということ (¥500)
- 85/11 みのりの秋に (¥530)
- 85/12 人間と土を生かす (¥530)
- 86/1 くらしの文化を探る (¥530)
- 86/2.3 水はいのちの泉 (¥530)
- 87/8.9 「原発」知らなくていいのか (¥530)
- 87/12 国際居住年って何だった (¥530)
- 88/10 食と環境といのち (¥550)
- 89/1 くらしの論理を創る (¥550)
- 世界・社会
- 84/1 「1984年」
- 86/12 平和—今年を顧みる (¥530)
- 87/1 女性—世界を変えようか (¥530)

- 87/5 情報化社会の光と影 (¥530)
- 88/7 なぜ、家庭科にコンピューター (¥550)
- 88/8.9 コンピューター、何をどう変える (¥550)
- 88/12 マスコミと文化の交響 (¥550)
- 89/2.3 上すべりの国際化 (¥550)

◆単行本

- 「子ども発、大人へ」学習の主人公&小沢牧子
—いま生まれる新しい関係— (1300円 千250)
- 「らくだが頼んだ」平井雷太 (1200円 千250)
—教育の常識の非常識—
- 「若いいのちの像」児玉澄子 (1300円 千250)
—私のカウンセリング入門—

★バックナンバーのご案内★
ご注文は、最寄りの書店(地方小扱)または、料金をおそえの上、振替で直接ワイ書房へ。

WE EDITOR'S NOTE

◆雄大な阿蘇の自然に抱かれて、We夏のフォーラムの三日間は、まさに、テーマそのもの「自然との共生を求めて」豊かな時をすごしてきました。帰ってからひっきりなしのお手紙が多くなりました。その思いをオーラムにつなぐと、具体的提案も出てきています。来年は「東京」で決まりました。創り手を募っています。

◆「若いいのちの像」の著者、児玉澄子さんの書きおろし「教室のミニ舞台から—こぼれ話20」が、近々刊行されます。高校の英語の授業の中で、生徒たちにせがまれ語った、異国での体験、疎開の話などの数々がそのままに、珠玉の小品集。ご期待下さい。

◆宮坂広作氏の「消費者教育の創造」、好評発売中です。まだお求めになっていない方は是非。(稲邑)

◆小学生のころ石油の埋蔵量を表す言葉として「無尽蔵」を知った。地球が大きな球体で有限なのに、その中にあるものが「無尽」であるはずがないと思っただ大人になつてみれば、「無尽」の向こうに限界は見えていた上での大人の言葉なんだと納得はしたのだが。「無限」に近いと思っていた地球の「時間」にさえ限りが見えるようになるなんて思ってもいなかった。(中野)

♥夏休みに帰郷して、久しぶりに母校を尋ねました。お邪魔かなと思いつつ、教師の研究室をのぞいてみると、髪の毛が増した先生

が、にこやかに迎えて下さいました。十八年前にタイムスリップしてしまつたやうなひとときは、本当に楽しいものでした。後輩へのおみやげとしてWe五冊を図書館に寄贈しました。Weの読者がふえるといいなあと思いながら。(柳田)

★数万の大観衆の声援の中精魂尽きるまでの熱戦を展開する甲子園の球児たち。様々の批判はちよつと棚に上げ、引き込まれた好試合の数々。一方、連続幼女殺害事件の容疑者とされた青年の若さを喪失した風貌。明と暗、陽と陰。同じ地球に、同時代人として住む両者の途方もないこの差はなぜ、生まれたのか—考えてみませんか★次号は「からだ—その不思議」がテーマです。(半田)

新しい家庭科—

Vol.8 No7 1989年9月20日発行
定価567円(本体550円+税17円)送料共
年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ワイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 郵便振替 東京6-59867

第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

ユック舎

東京都文京区本郷2-32-8
 ☎/FAX 03-815-6549
 振替=東京1-86349 発売=批評社

子育て新時代

全国私立保育園連盟編
 一三六〇円

——仕事があうお母さんへ——

「アグネス論争」の問題提起を受けて、全国私立園連盟が昨年10月「21世紀に向けて明日の子育てをみんな考えてみよう」というテーマで、「トピック&トピック21」を開催した。その記録集。私の子育て・中沢けい／子どもの権利と大人の責任・落合恵子／みんなが人間らしく生きるために・ヤンソン由実子他。
 池亀卯女著
 一三三六円

育児不安をこえる 子育ての輪

小児科医であり、四人の母である著者が、母と子、父と子、社会と子ども、病気などの関係を等身大にすつきり解明する。
 安達倭雅子著
 一三三六円

電話の中の思春期

子ども110番の相談員である著者が、子どもの性や体の悩みに耳を傾け、子どもと率直に語り合うユニークな性教育の本。
 保育園を考える親の会編
 一三三六円

子どもの放課後110番

母親のいない放課後子どもたちはどう過ごしているか——働き続けている母親一五〇人の体験を集めた子育て情報の本。
 シリーズ・いまを生きる 11
 一〇三〇円

大人・子ども

風を野に追うなかれり小倉千加子／インタヴュー 清水真砂子／男にとつての子ども／対談 藤本和子・津野海太郎他。

価格は税別です。

Q & A 教職員の 仕事と生活



教師生活のすべての疑問にこたえる。
 全93項目。
 四六判 定価1500円

大槻 健・宇野 弘・橋本三郎(監修)

どじする!

生活科

A5判
 定価1300円

新指導要領の「生活科を批判しつつ、ではどのような生活科を創りあげていったらいいかを、先導的実践をふまえて解説した格好の手引書。
 歴史教育者協議会編

〒112 東京都文京区春日2-17-3
 ☎03(815)5511
 あゆみ出版